

各國博覽會共進會名譽賞領

釀造發賣元

商標



登錄

大阪府堺市

河盛又三郎

御用品

醬油

宮內省

各國大博覽會共進會

優等賞牌受領

商標

登錄

油

萬程

醬

TRADE

MARK

大阪府堺市

豐田熊次郎釀造

電話四十六番





大阪府堺市
 釀造元
 戸川源之祐



精撰
 醬油

電話四十九番

全錄油



各賞牌受領

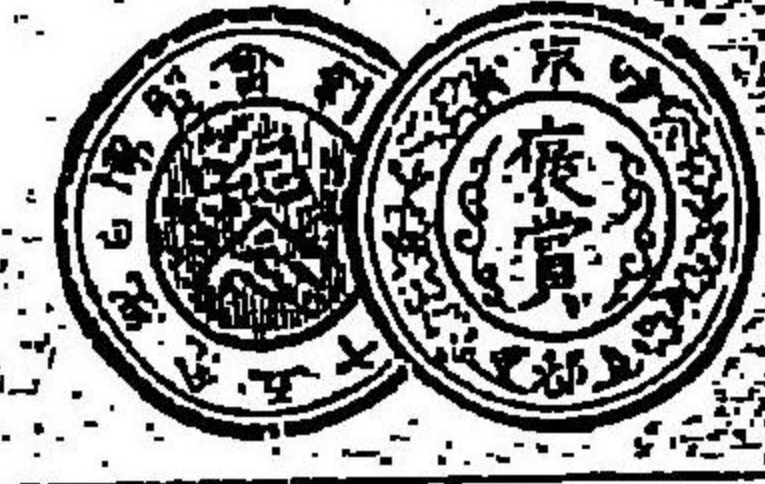
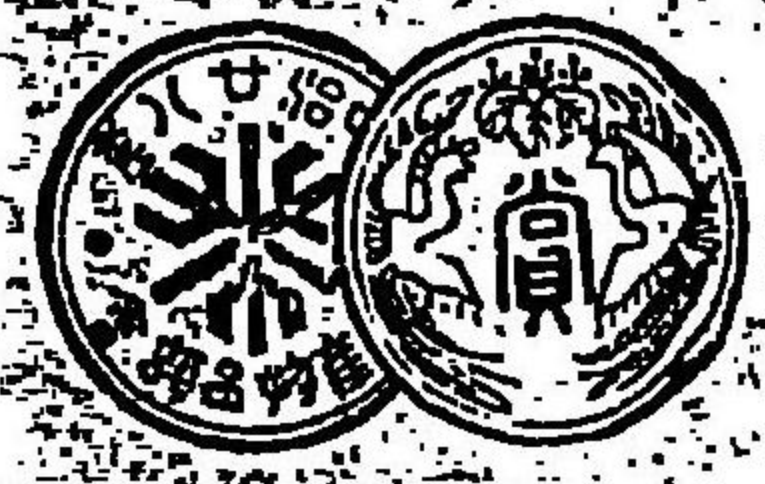
宮内省御用品



堺市甲斐町東町

辻本福松

(電話二〇六番)



内各外博覽會賞牌受領

宮内省御用品

登錄 商標



大阪府堺市大所

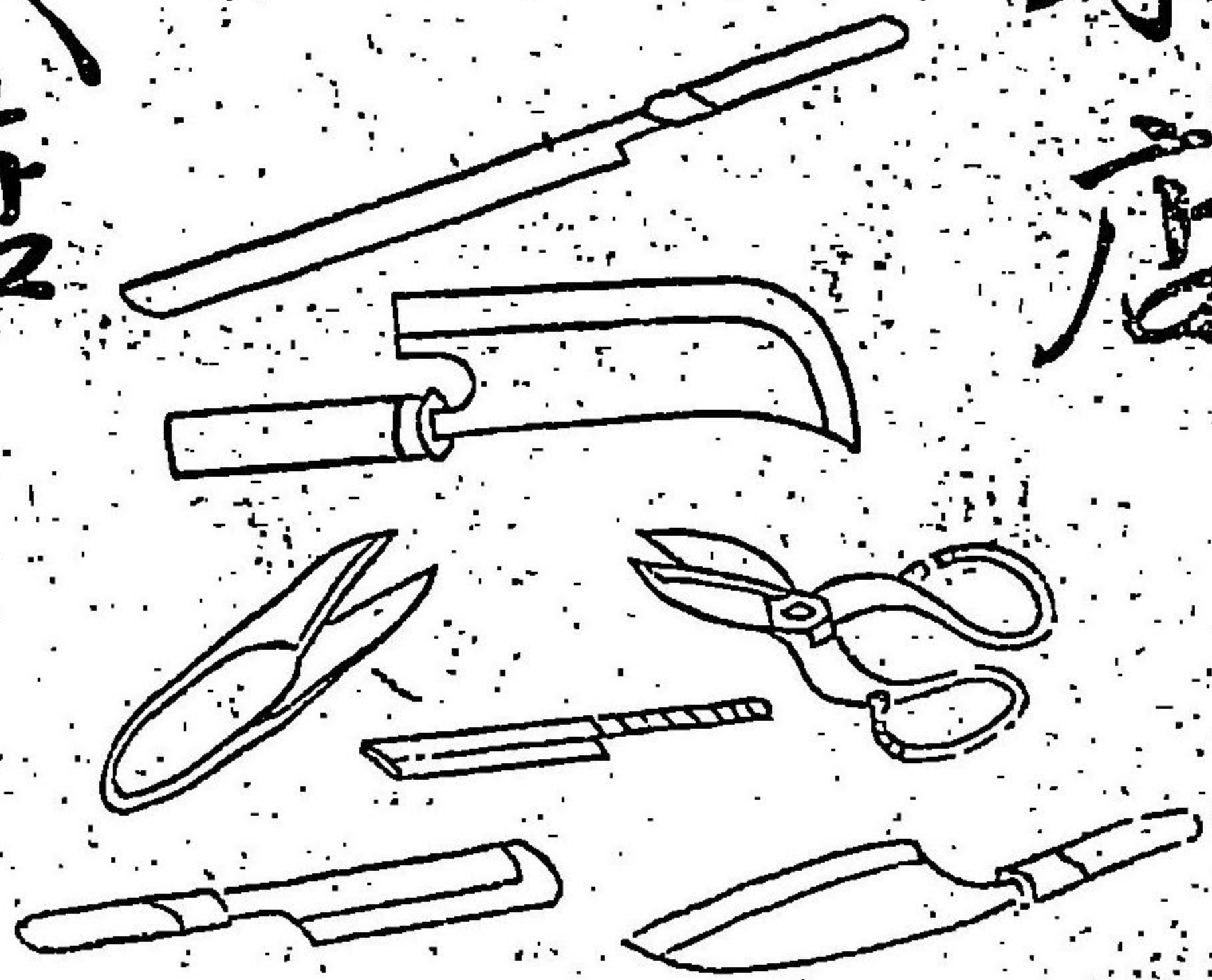
左色義酒井本店

大阪市京町橋西詰

左色義酒井支店

東京市南傳馬町貳丁目

左色義酒井商店





商標

登錄

薰香白冰香

大博覽會
各國品評會
賞牌受領
共進會

香料問屋

泉州橋大道志也町
高田薰清堂



受

褒

領

賞

三好石鹼

大阪府堺市大東町二丁目

大寺南門

發賣本店

三好德次郎

電話七百七十八番

(上卷下第六)

和泉新田葉

見本御入用之方ハ
御申越次第呈送ス

本品從來使用ノ營業者ハ既知セラル、所色澤鮮美葉揃剔致シテ舶來紙卷煙草ハ無論此葉ノ供給ヲ竣テ製出スルモノナレハ方今將ニ舶載品ヲ凌駕セントスル内國諸種紙卷其ニハ必須不可缺要葉タルコトハ此葉ノ特色ナリ其他各刻煙草ニ於ケル香味ト色艶ニハ配合上此葉ヲ措テ又他ニ覓ム可カラサルコトハ敢テ茲ニ贅セス殊ニ本年ハ天候其順ニ適ヒ近年稀ナル良葉ヲ産シ本來ノ優美ニ一層ノ妙趣ヲ加ヘタリ

●相庭ハ各々變動ノモノナレハ茲ニ掲載スルヲ得ス御照會ニ應シ可及的勉強ヲ以テ都度迅速御答可致候

●弊店ハ從來各國葉煙草營業ヲ以テ誠意着實品質ヲ撰擇シ注意ト勉強ニ依リ諸事懇篤ニ取扱可申候事ハ敢テ畷々セス大方諸彦陸續御用向仰聞ラレン

トヲ萬希敬白

支那產葉煙草數種其池者種持合居在御注交之折

大坂府和泉國堺市西區六軒筋

内外煙草同屋ハ久吉井才三郎



株式會社 五十一銀行

泉州岸和田

諸預リ金

頭取 川井 爲己

諸貸金

取締役 寺田 甚與 茂

送金

全 左 納 權 一

荷爲替

全 兼支配人 寺田 元吉

代金取立

全 副支配人 近藤 省吾

圓萬拾五金本資

全 監查役 田代 藤環

代金取立

全 岸濱 口嘉七

代金取立

全 岸濱 口嘉七

代金取立

全 岸濱 口嘉七

吳服及物帶地

御祝用小袖るい

并に洋端物各種

御便利用吳服切手販賣

岸和田
おぎや町
海
堀川吳服店

口述

各位益々御安康奉賀候儀、當院儀御引立之御餘光ヲ蒙リ、日々隆盛ニ赴候段奉
鳴謝候就テ、尚一層勉強仕會席御膳并ニ宿泊共左之直段ニ改正仕御便利ヲ專
一ニ仕候間、舊ニ倍シ陸續御來車奉願上候敬具

改正直段表

會席御膳	金五拾錢
辨並御當膳	金廿五錢
宿泊料	金七拾錢
御滞在賄	金八拾錢
特別	金壹圓
一等	金七圓
二等	金五圓五拾錢
三等	金四圓
御一人	金三圓
特別	金七圓
特別	金七圓

潮湯并ニ割烹御旅館
其他鮮魚割烹御好應調進
廣園寺
海濱院

80
2
212

大日本理科通信講習會

會員募集

文 理 工 農 醫 學 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士
博 士 博 士 博 士 博 士 博 士

池 田 菊 三 助 保 啓 苗
飯 野 三 三 助 保 啓 苗
酒 野 三 三 助 保 啓 苗
飯 野 三 三 助 保 啓 苗
大 林 正 三 助 保 啓 苗
古 武 正 三 助 保 啓 苗
高 寺 正 三 助 保 啓 苗
中 島 正 三 助 保 啓 苗
須 吉 正 三 助 保 啓 苗
須 吉 正 三 助 保 啓 苗

趣旨 本會は理科中人生に須要なる數學物理學化學の普及發達を企圖し諸大家の贊助を得通信教授の方法に依り志を勵して修學し得ざる者の爲めに斯學を講習せしむるの目的を以てす

程度 大凡小學教員の學力程度に始まり實業に従事するの素養たるは勿論各種の教員檢定試驗高等學校其他の入學試驗文官普通試驗陸海軍の學力檢定試驗等に應ずるに適す

講習科目 算術、代數學、幾何學、三角法、物理學、重學、化學、動物學、植物學、礦物學

講義錄體裁 二百頁以上の菊版美本每卷寫眞編版にて精巧美麗なる理科大家の驗法學術上の要領實證應答問題答案實業に關する事項等を掲げ行文は平易簡明也

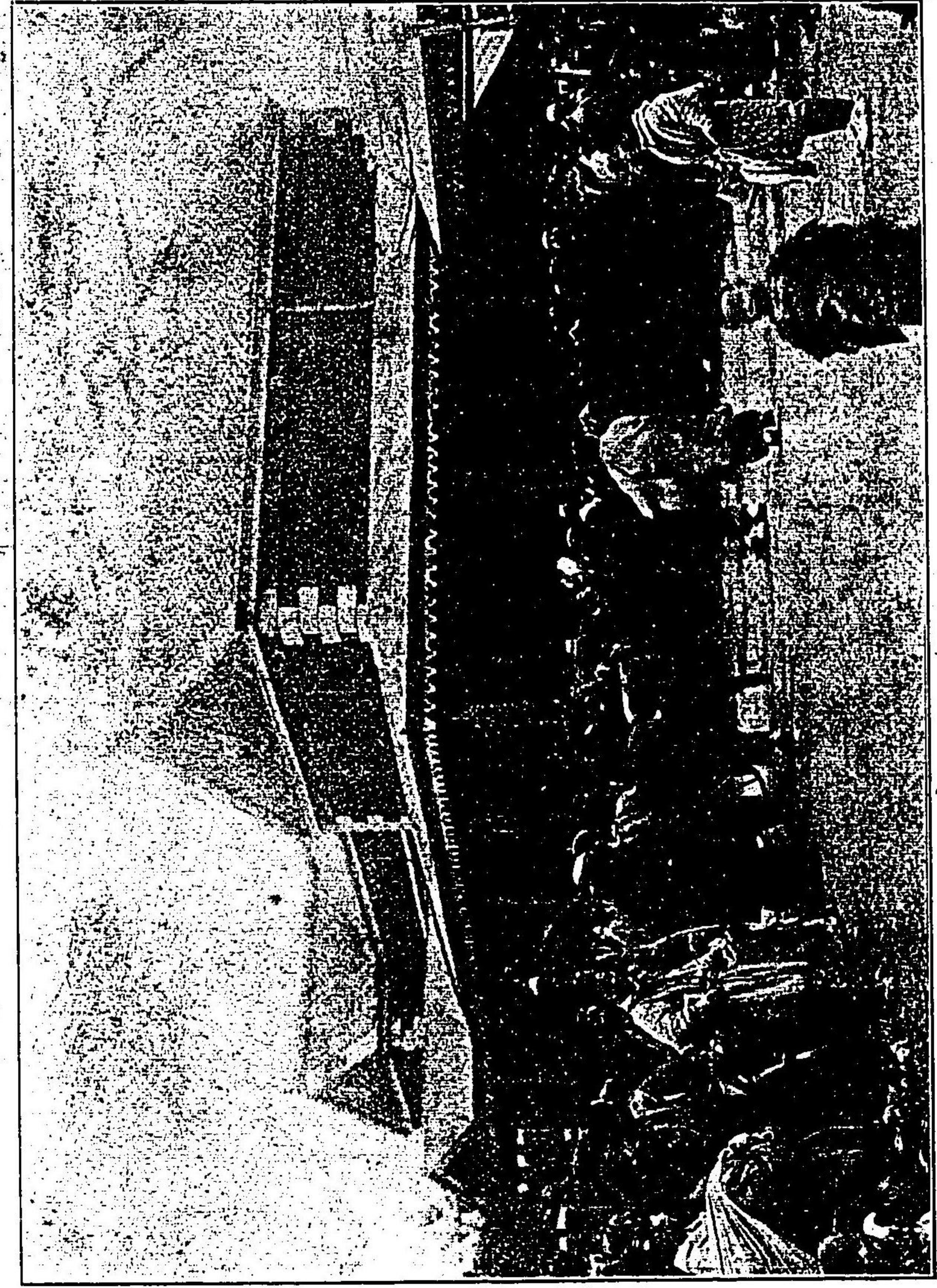
規則 何時何人も會員たる事を得
 納金五圓郵券代用一割増
 納一ヶ月三十錢一ヶ月前
 納一ヶ月三十錢一ヶ月前
 納一ヶ月三十錢一ヶ月前

東京市神田區今川 小路二丁目三番地

第 十 三 卷 四 月 一 日 發 行

大日本理科通信講習會

附言 本會講習期限中に三回の試験を執行し修業證書卒業證書を授與す第六卷の爲め第一卷以降各科目に就き臨時試験問題を提出したり新に入會せんとする人の便



難波停車場ノ景

登錄商標
 廣河入
 おりふ下 定價 貝入二錢
 罐入五錢
菊の花かま
 押し物や裏の紙を透かしつたもの
 下と裏の二の佳品に入選 廣河入と目録も
 多量の配合いふはまふれは其より教都と
 して 糖心菓の作りは菊の花かまと一な
 作りをしてすけしきりの日経つて中も常々
 廣河入の中すけしきりの中すけしきりの中すけ
 され用てゆめありやふしきり用られよきめとる
 かやつとせよとすけしきりやふしきりの中あり
 美穂小間物商 和歌山市ぶらくり丁
 川廣本舗

常齒牙及口中諸病
 驚キハス
 特效アリ

鯉印川廣齒磨

今回賣弘ノ廣告
 費ヲ投スル代リ
 大景品當リ物壹ダ
 スノ内二個以上封入進呈仕候

景品 金銀アルミ指輪
 全時計用磁石
 郵便切手
 其他珍物色々
 定價 大箱入 五錢
 木器入 六錢
 大罐入 拾錢

髮油製造商
 萬小間物
 和歌山市ぶらくり丁
川廣本店
 紀州有田郡湯淺町
 川廣支店

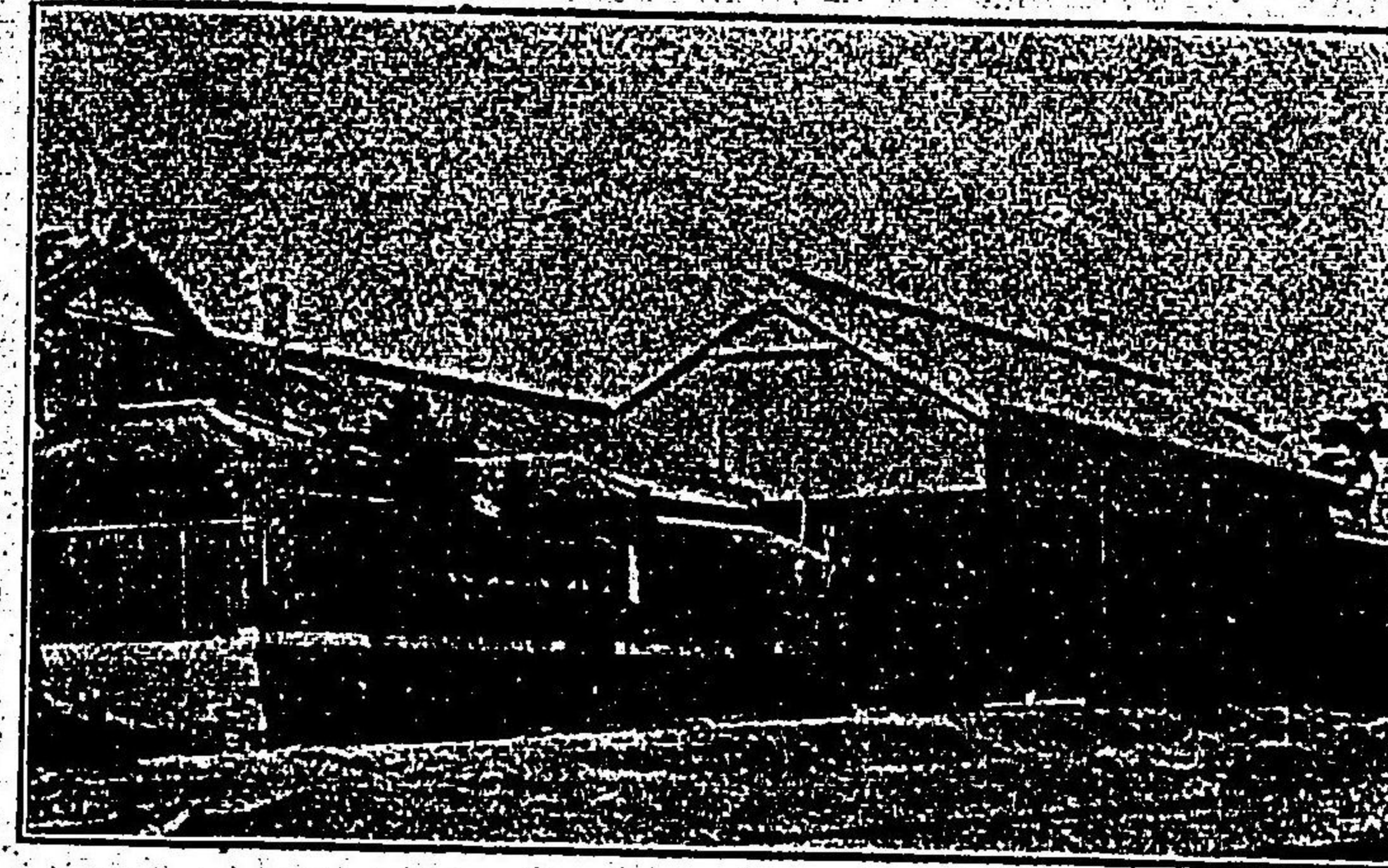
陸軍衛生用品



帝國軍艦高千穂御命銘
釀造發賣元
南方常楠商店
紀州和歌山



(上卷) (中葉) (下卷)



樽詰 瓶詰

清酒 紫密 蘇柑酒

Brewed From Rice. Sake.

釀造發賣元

南方常楠商店

紀州和歌山市

G. Minakataki Wakayama Japan.

目今支店又ハ代理店ヲ設置シタル地下ノ如ク猶進メテ特約代理
店ヲ設置セントス御通知アラバ商規則ヲ送ルベシ
東京。大阪。神戸。名古屋。高松。丸龜。琴平。今治。高知。久留米。
佐世保。若松。直方。小倉。門司。馬關。大分。鹿兒島。三重。仁川。

(上卷) (中葉) (下卷)

有田屋は縣廳裁判所公
園地へ近く至極便利の
場所にして坐敷は内川
に臨み眺望頗ぶる宜し
く俯しては流れも穩か
なる内川の舟歌手に取
る如く聞え仰げば遠山
近きかめも飽かぬ風
光座に入つて來るなど
精神保養には此上もな
き好場所なり



（下町上四）

席 貸
會 席 御 料理

和歌山市北ノ新地東ノ丁

四 美 館

（下町上四）

席 貸 乙

和歌山市十一番丁
風 月 庵

(下卷上表六)

會 席 御 料 理

和歌山市雜賀町

九 橋 樓

宮内省御用品 陸軍御用達 青山御所御用品

食糧罐詰製造所

食糧罐詰罎瓶製造販賣所

商標  本店

和歌山縣和歌山市寄合橋西詰
中村清次郎

商號 角清支店

南海鐵道和歌山北口驛停車場前
中村清次郎

褒賞下賜

京都府博覽會ニ於テ
東京水産共進會ニ於テ
第三回内國勸業博覽會ニ於テ
第三回香川縣品評會ニ於テ
第二回水産共進會ニ於テ
關西聯合共進會ニ於テ
富山縣博覽會ニ於テ
第四回内國勸業博覽會ニ於テ
第二回水産博覽會ニ於テ
第二回全國五二會品評會ニ於テ
和歌山縣五品共進會ニ於テ

有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功
有 功 功 功 功 功 功 功 功

近來偽造ノ麗品ヲ販賣スル者アリ能々弊店ノレツテ(紀)印御熟覽ノ上御購
求アラシキヲ奉希望候

(下卷上表七)



登録商標

河一番香

此香は使用を忌む
 けしき土産進物
 用いたれは違当の品
 有作の神くさる相一三程有り
 中受顧の能奉祈り
 和歌山市住吉橋北浩
 實樹所を
 全国到處所の
 古田秋芳園
 小間物店にありては本店へ直接申上りませう

男子用
 女子用
美術小間物商
 儀式用婦人装飾品一式

自家製造品
 つばき油 (香油)
 花かつら
 紀伊名産
 びん附油
 和歌山市
 住吉橋
古田商店



男子用一式
 女子用一式
 多少の不揃
 中受顧を祈る
美術小間物類
 和歌山市住吉橋北浩
 古田吉兵衛商店

紀州名産御土産品



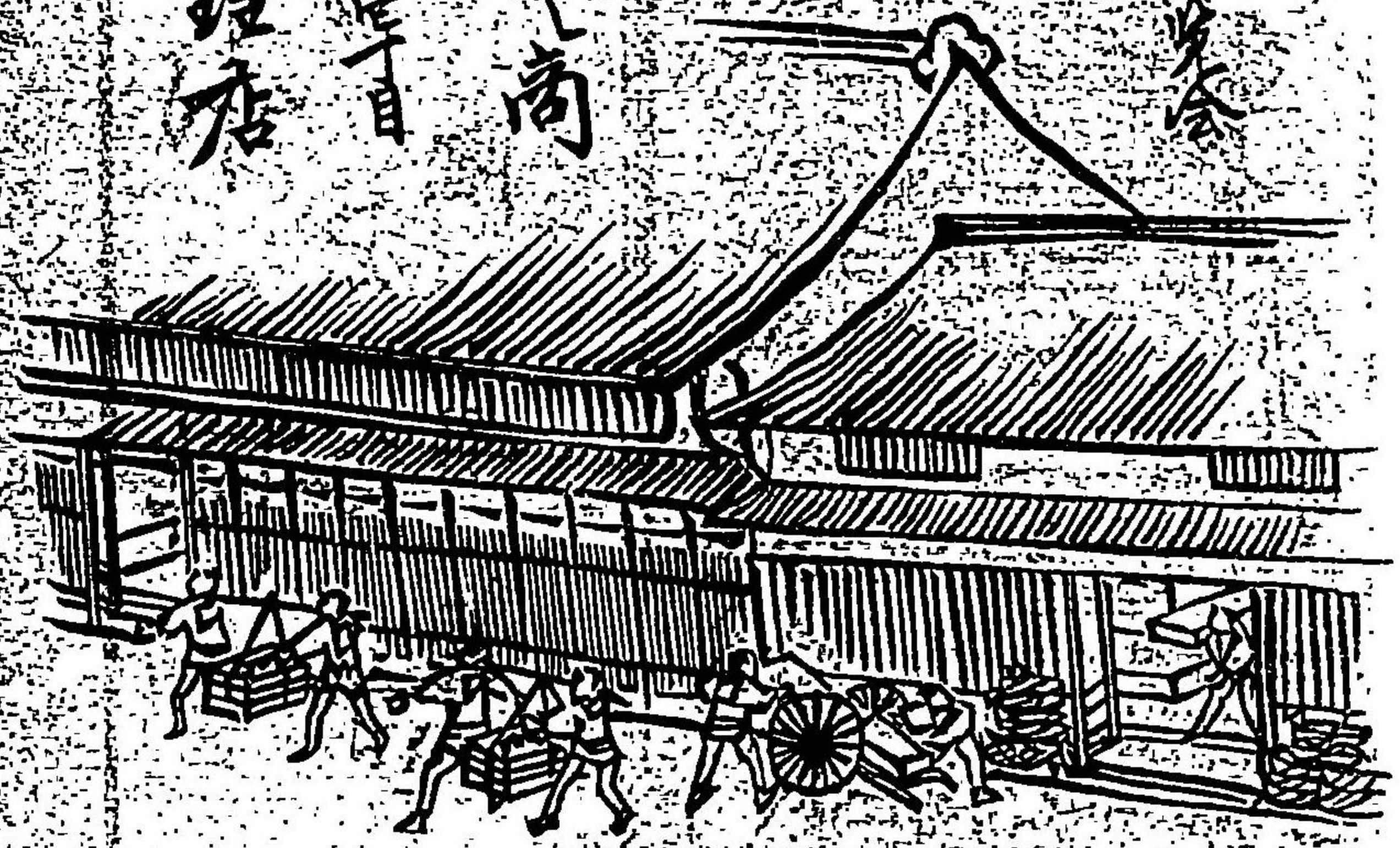
びん附油製造販賣之廣告

其他上等きんだしびん附油
各種御注文ニ應シ可申候

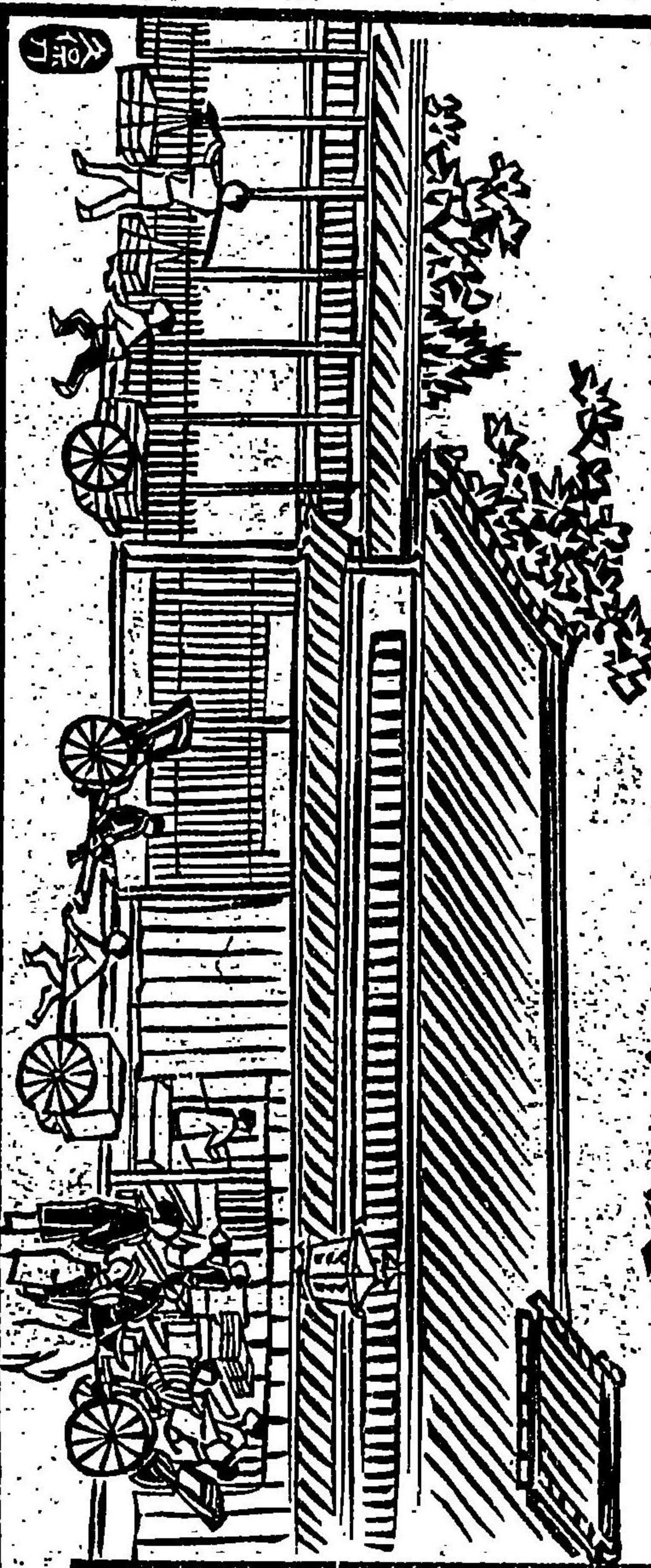
登記商號 廣田伊助
和歌山市大橋東詰



第三回内閣勳章授賞
賜有勳章等類
小納産考
全場有以
小魚破つけ
天鹿漬あめ
和歌山産物
和歌山通一丁目
魚吉料理店



菓子商 和歌山 駿河屋 本店



菓子商本家駿河屋

本家 駿河屋ハ北口驛ヲ距ル
 僅ニ拾五町ニシテ即和歌山市
 ノ中央駿河町ニアリ開業以來
 三百餘年ヲ經タル老舗ニシテ
 殊ニ專賣品煉羊羹ハ累世ノ經
 驗ニ因リ一種獨得ノ妙アリ久
 シク貯藏ニ耐ユト云フ又和歌
 山遊覽ノ土産トシテ進物ニ輕
 便風雅ナル名所菓子等種々販
 賣ナサス猶顧客ノ便利ヲ計リ
 京坂各地ノ支店ニ於テ菓子切
 手ノ引換ヲモテ



紀伊國名産芦柄團扇は弊店の製造品にして其由来は我先代某が舊藩

主徳川齊順卿に勤仕の頃君公の命に依り種々考究之末之れを發明し初めて製造せしものにて大に御感

賞を蒙り爾來年々製造し御用品となりしものなり維新の后はこれを

營業とし専ら當品製造に従事し年々其販路を擴張し大に江湖諸君の

賞用を蒙り殊に第三回内國勸業博覽會に於て褒賞を賜はりまた神戸

聯合共進會よりは木柶をも下賜せられたり當品中和歌浦八景を畫け

るもの又は五色の色取をなせるもの、如きは何れも別製上等品にして

て歲々地方進物等の需用に應じ製造しつゝ、わが故に今や氣車全通の

便を以て當縣に來遊せらるゝ諸君は我國物産芦柄團扇を必ず御購求

おしん事を希望す

和歌山縣 和歌山市

新通七丁目十三番地

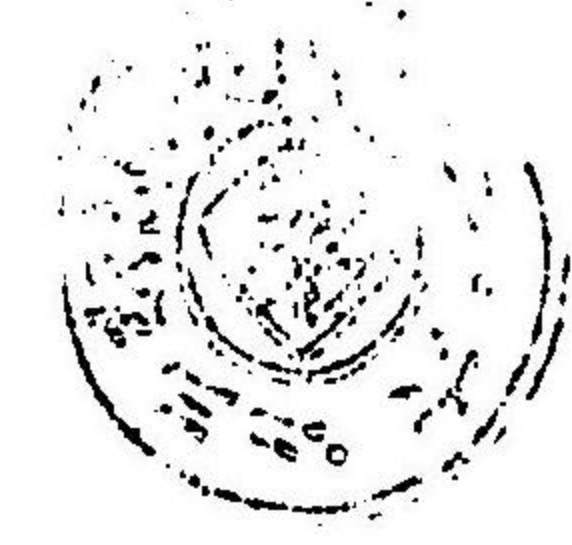
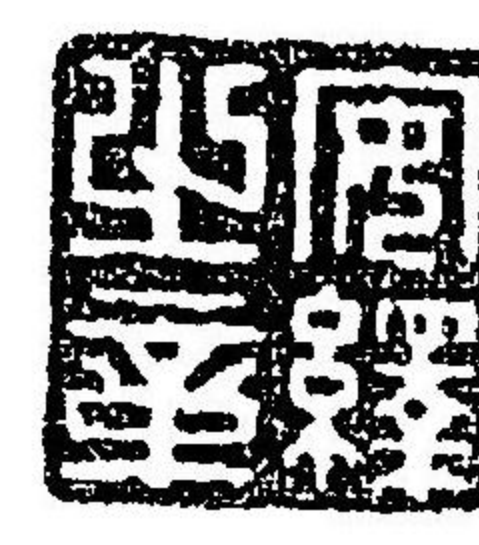
製造元 池端 藤之助

轉瞬之間
濟名



勝

成齋老人頌

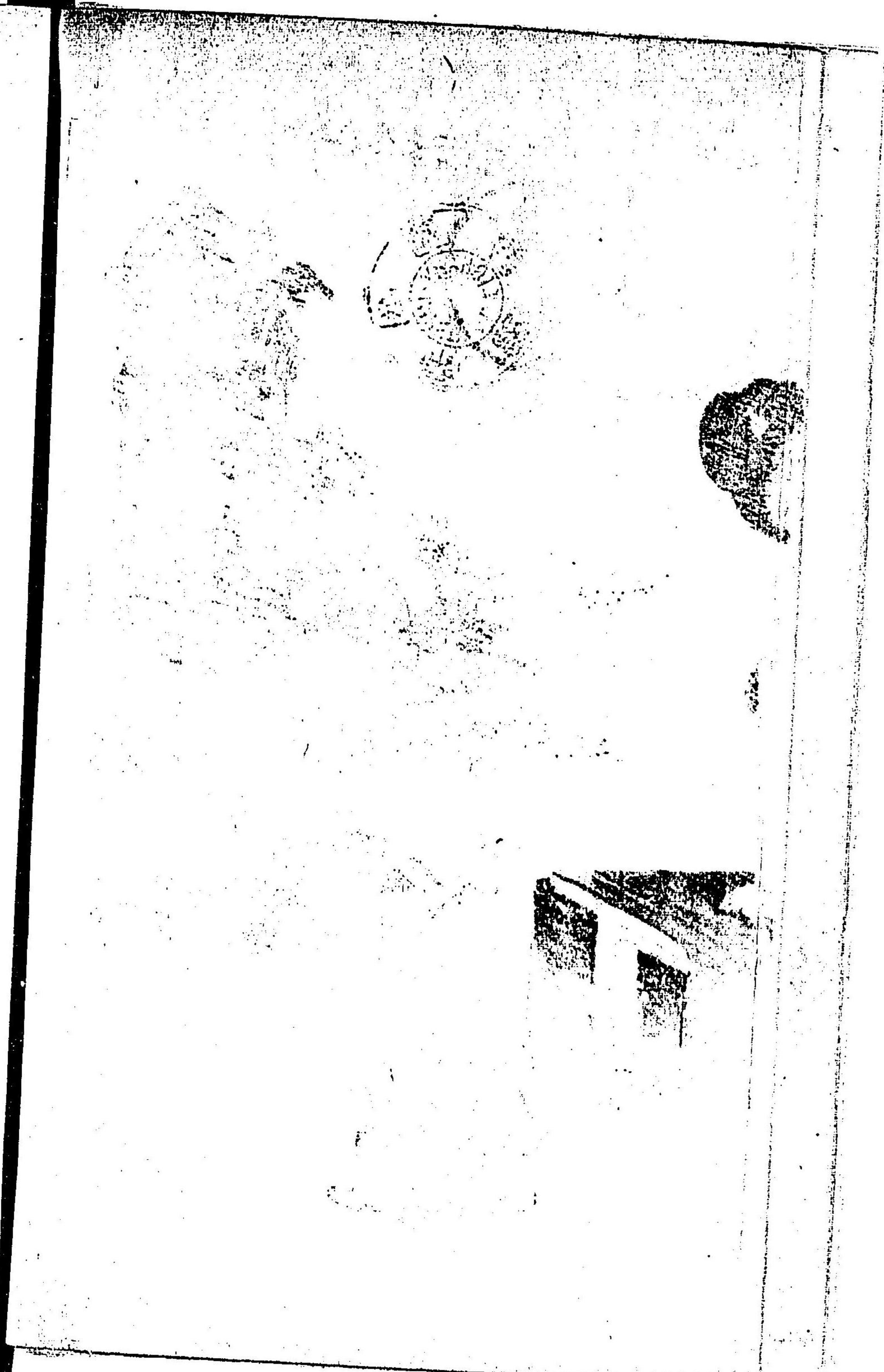
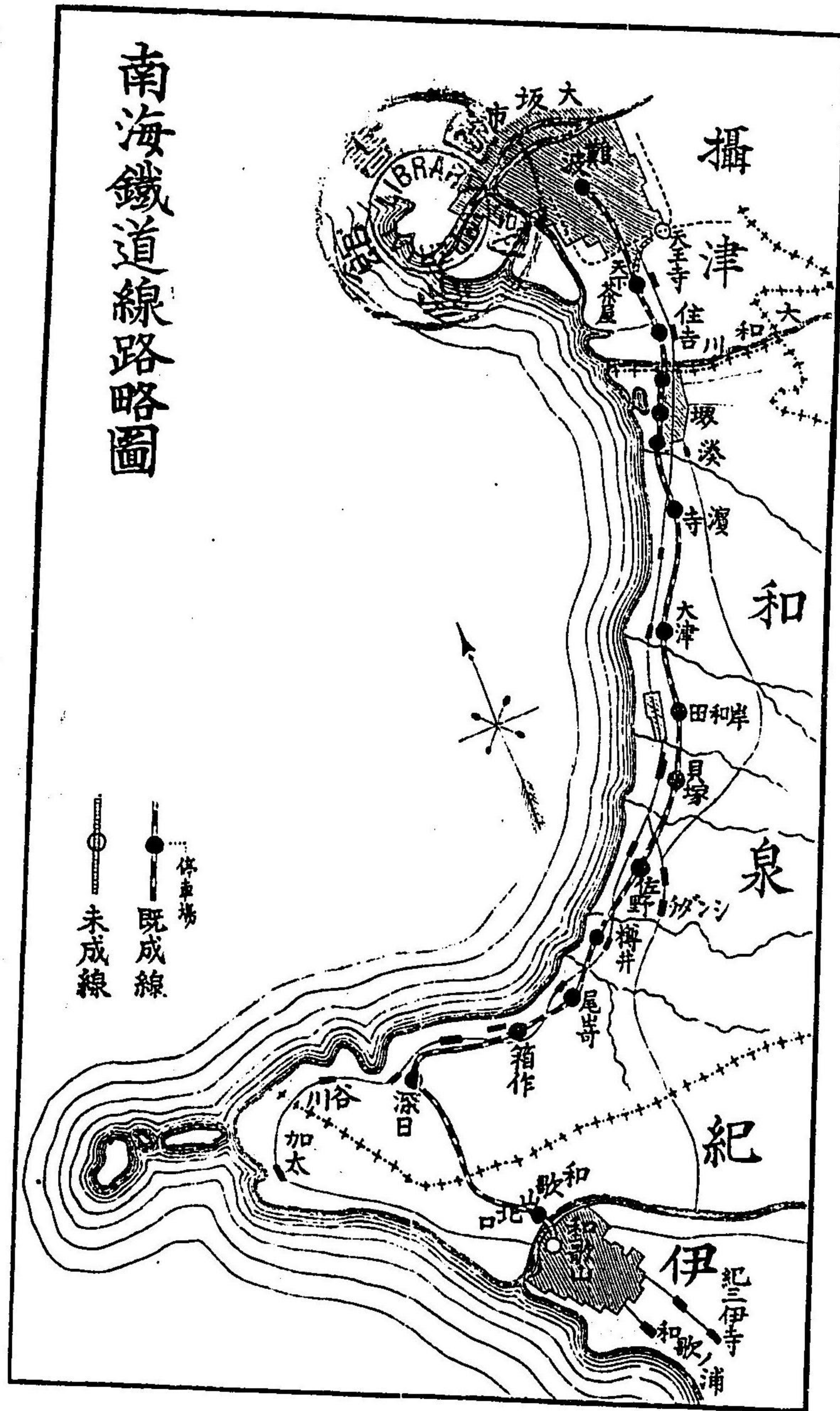




千代子茶室
何處風光如

永清

南海鐵道線路略圖



總目録 (上卷)

緒書	總目録	録
南海鐵道の位置.....	緒書.....	一
大阪.....	南海鐵道の位置.....	三
道頓溝.....	大阪.....	四
劇場及び俳優.....	道頓溝.....	八
千日前.....	劇場及び俳優.....	一〇
五花街.....	千日前.....	二
法善寺及自安寺妙見寺.....	五花街.....	四
二ツ井戸及津の清の岩松一帯の帶地.....	法善寺及自安寺妙見寺.....	五
高津社.....	二ツ井戸及津の清の岩松一帯の帶地.....	七
高倉稻荷.....	高津社.....	七
生玉.....	高倉稻荷.....	九
産湯清水及小橋里、胞衣塚.....	生玉.....	九
舍利寺.....	産湯清水及小橋里、胞衣塚.....	一〇
紅葉寺.....	舍利寺.....	一
四天王寺.....	紅葉寺.....	二
天王寺公園.....	四天王寺.....	二
阪松山一心寺高岳院.....	天王寺公園.....	八
清水.....	阪松山一心寺高岳院.....	九
増井清水.....	清水.....	三
	増井清水.....	三
		四
		四
商業俱樂部.....		四
珊瑚寺.....	商業俱樂部.....	四
月江寺.....	珊瑚寺.....	五
隆泉寺及齡延寺.....	月江寺.....	五
吉祥寺.....	隆泉寺及齡延寺.....	五
菫新梅屋敷.....	吉祥寺.....	五
桃谷.....	菫新梅屋敷.....	六
眞山山.....	桃谷.....	七
圓珠庵.....	眞山山.....	七
家隆卿墳及伊達自得翁墳.....	圓珠庵.....	八
陸奥伯の墳.....	家隆卿墳及伊達自得翁墳.....	一
廣田神社.....	陸奥伯の墳.....	四
今宮.....	廣田神社.....	四
水津大黒天.....	今宮.....	五
難波木津市場.....	水津大黒天.....	六
瑞龍禪寺.....	難波木津市場.....	六
難波午頭天皇.....	瑞龍禪寺.....	六
大阪鐵道淡町停車場.....	難波午頭天皇.....	八
玉造.....	大阪鐵道淡町停車場.....	八
豐津稻生社.....	玉造.....	九
森の宮.....	豐津稻生社.....	九
網島.....	森の宮.....	九
	網島.....	〇

上 卷 目 録

大長寺	五〇
櫻祠	五一
源八渡口	五一
水道の水元地	五二
福島天神祠	五三
逆櫓松	五三
野田の藤	五三
竹林寺	五四
炭住吉神社	五四
源光寺	五五
名柄川	五五
長柄橋蹟	五六
長柄川渡口	五七
鶯塚	五七
鶴瀨寺	五七
崇禎寺	五八
天満神社	五八
天満菜蔬市	六一
桂木山大融寺	六一
八軒屋	六二
造幣局	六三
堂島米穀取引所	六五

商品陳列所	六六
郵便電信局	六八
鮎の松	六八
梅田停車場	六九
梅田電信局	六九
西成鐵道	七〇
郵船通運二會社支店	七〇
曾根崎新地	七〇
露天神社	七一
北野天神社	七一
堀川戎神社	七一
北野凌雲閣	七二
中の島公園	七二
澁江の納涼	七二
三大橋	七四
大坂城	七六
博物館	七七
商店の集合	七九
高麗橋	八〇
大阪株式取引所	八一
御幣神社	八二
浪花館	八三

總 目 録

津村御堂	八四
難波御堂	八五
上難波仁徳天皇の神社	八六
坐摩神社	八六
順慶町	八七
心齋橋通	八七
商品會	八八
名物案内	八八
三津八幡と三津寺	八九
四橋	八九
新町橋	九〇
新町	九一
阿彌陀池	九二
堀江の遊廓	九三
松島の遊廓	九三
雑喉場	九六
安治川	九六
瑞賢山	九七
天保山	九七
深標	九八
大阪府廳	九九
居留地	一〇〇

河口波戸場	一〇一
大阪商船株式會社	一〇一
大阪築港	一〇二
種々の案内	一〇三
有名の旅館	一〇四
有名の料亭	一〇四
川魚料理	一〇五
鶏肉店	一〇五
西洋料理	一〇六
牛肉店	一〇六
精進料理と天麩羅	一〇六
四季遊散の茶屋	一〇七
寄席	一〇七
落語寄席	一〇七
落語家	一〇八
軍談定席	一〇八
講談師	一〇九
女淨瑠璃定席	一〇九
女太夫	一〇九
其他雜種寄席	一〇九
俄師	一一〇
商業工業兩會社	一一〇

上 卷 目 録

銀行	一三〇
案内者口上	一一一
眺望閣	一一一
阿倍野神社	一一二
安倍野	一一三
小町墳、經墳、播磨墳、葦草墳、松出墳	一一四
王子の社	一一四
天下茶屋停車場	一一五
天下茶屋天満宮	一一五
紹島の森	一一五
名物和中散	一一六
天下茶屋公園	一一六
聖天山	一一八
天下茶屋村	一一八
兼好古蹟	一一八
住吉停車場	一一九
住吉神社	一一九
同名物	一二六
住吉神社年中行事	一二六
茶店	一二九
林茶庵古蹟	一二九
吾彦	一三〇
吾彦の觀音	一三〇
新家町	一三一
住吉公園	一三一
霞松原	一三二
小町茶屋	一三三
灘波屋の笠松	一三三
住吉神輿火祭所	一三四
新大和川	一三四
大和川停車場	一三四
大和橋	一三五
堺市	一三五
堺停車場	一三七
戎島	一三七
七堂ヶ濱	一三八
並松町	一三八
高須	一三九
高須稻荷	一三九
高須の遊廓の迹	一三九
經王寺	一三九
神明の社	一四〇
西木願寺別院	一四〇
善長寺	一四一

總 目 録

成就寺	一四一
金光寺	一四二
寶珠院	一四二
妙國寺	一四三
殿馬場	一四六
菅原神社	一四六
東木願寺別院	一四七
向泉寺	一四七
如意の神社	一四八
熊野小學校	一四九
開口神社	一四九
名物大寺餅	一五一
海會寺井	一五一
冑社	一五二
宿院	一五二
飯匙の池	一五三
山の口筋	一五三
祥雲寺	一五三
方違神社	一五五
百舌耳原北陵	一五七
天王の森	一五七
天王山紅谷庵	一五八
大仙陵	一五八
履中天皇陵	一六〇
萬代八幡宮	一六〇
少林寺橋	一六二
乳守	一六二
臨江庵	一六二
龍興山南宗寺	一六三
海會寺	一六七
大安寺	一六七
穗穴寺	一六八
少林寺	一六九
旭蓮社	一六九
南新地	一七〇
龍神町	一七〇
榮橋	一七〇
堺港	一七一
旭館	一七一
貝細工	一七一
大濱公園	一七二
魚市	一七三
北大濱	一七四
吉川俊右衛門	一七五

上 卷 目 録

本市の産物	一七八	高石神社	一九七
三幅對	一七八	大津停車場	一九八
旅館	一七九	泉穴師神社	一九九
銀行と會社	一七九	藥師寺	二〇二
官衙	一八〇	國府の清水	二〇三
各名所へ人力車賃	一八〇	式内泉井上神社	二〇四
湊停車場	一八〇	五社惣社	二〇六
人口戸數	一八一	式内和泉神社	二〇九
名産	一八一	珍勢縣主居地	二〇九
一路山禪海寺	一八一	御館	二〇九
家原寺	一八三	和泉宮	二一〇
家原の城趾	一八五	葛葉神社	二一〇
似雲の示寂地	一八五	葛葉神祠記	二一一
蛭子神社と乳岡	一八七	聖神社	二一三
濱寺停車場	一八八	上原	二一四
濱寺公園	一八九	妙泉寺	二一五
大島神社	一九二	契沖の菑庵	二一六
和田の城趾	一九四	國分寺	二一七
和田新發意源秀の墓	一九四	横山莊	二一八
鉢峰寺	一九四	父鬼村	二一九
陶器莊	一九六	卷尾山仙樂院施福寺	二一九
千貫橋	一九七	阿彌陀山松尾寺	二二三

總 目 録

牛龍山大威徳寺	二二五	水積觀音堂	二五四
岸和田停車場	二二三	龍谷山水間寺	二五六
岸和田	二二三	鐵道馬車	二六〇
岸和田城	二三四	珍勢池	二六一
紀念碑	二三九	顯如の發穴	二六二
岸城神社	二三九	佐野停車場	二六二
蛸地蔵尊	二四〇	佐野	二六三
捕鳥部萬墳	二四二	佐野市塲	二六四
桑田寺	二四三	佐野松原	二六五
桑田池	二四五	佐野池	二六五
橘諸兄公の塚	二四六	妙光寺	二六五
光明皇后の塚	二四六	蟻通大明神	二六六
久米田戰塲	二四七	冠池	二七一
三好實休墳	二四八	近畿の浦	二七二
積川神社	二四八	樗井戰塲	二七二
牛瀧	二四八	兩將の墓	二七二
貝塚停車場	二四九	葛家中村氏	二七五
貝塚	二四九	熊取	二七五
金涼山願泉寺	二五〇	土丸城蹟	二七六
感田神社	二五二	火走神社	二七六
清水の大師	二五三	日根神社	二七七
長谷川桂山	二五三	比賣神社	二七七

上 卷 目 録

慈眼院	二七八
日根野城跡	二七八
茅渚宮菑跡	二七八
犬鳴山七寶瀧寺	二八〇
岡田	二九〇
樽井停車場	二九〇
樽井	二九〇
山の井	二九四
躰躰山林昌寺并に躰躰岡	二九四
砂川	二九五
海會宮菑跡	二九六
金泉山長慶寺	二九六
信達村	二九七
御所村	二九七
一乘山金熊寺	二九八
信達神社	二九九
疫神社	三〇〇
金熊寺の梅林	三〇一
男里村	三〇三
男神社	三〇三
男水門	三〇三
男森大明神	三〇四
尾崎停車場	三〇五
尾崎	三〇五
西本願寺御坊	三〇五
菟碓川	三〇六
菟碓河上宮菑跡	三〇六
自然居士禿倉	三〇七
波太神社	三〇八
捕鳥部萬邸宅舊地	三〇九
波有手村	三〇九
道弘寺の舊迹	三〇九
お菊の像	三〇九
貝掛村及び貝掛松	三一六
指出森	三一七
箱作停車場	三一七
箱作村	三一七
石工	三一七
田山稻荷	三一八
濱輪村	三一八
五十瓊敷入彦皇子御陵	三二〇
約船守墓	三二〇
黒崎	三二一
深日停車場	三二一

下 卷 目 録

深日	三二一
深日浦	三二二
深日行宮	三二五
吹飯城跡	三二五
加茂神社	三二五
國玉神社	三二五
彌勒寺	三二六
飯盛山	三二六
孝子村	三二七
橘逸勢父子墓	三二七
高山寺	三二九
下社寺	三二九
和歌山北口停車場	三二九
谷川村	三三〇
谷川港	三三〇
谷川船渠	三三〇
觀音崎	三三一
寶珠山光明寺理智院	三三一
鳳樹山金剛院興善寺	三三四
二宿觀音	三三五
小島住吉神社	三三五
木本峠	三三六
和歌山縣廳	一八
和歌山縣警察部	一八
和歌山地方裁判所	一八
和歌山區裁判所	一八
和歌山警察署	一九
和歌山郵便電信局	一九
和歌山縣病院	一九
和歌山縣第一尋常中學校	一九
和歌山男子高等小學校	二〇

下 卷 目 録

和歌山高等女學校	二〇
和歌山縣尋常師範學校	二〇
和歌山測候所	二〇
和歌山縣隊區司令部	二〇
和歌山市役所	二一
和歌山市會議事堂	二一
和歌山縣會議事堂	二一
和歌山縣監獄署	二一
和歌山憲兵屯署	二一
私立病院(神田、山縣)	二二
日刊新聞紙	二二
寫眞	二二
合資會社山崎銀行	二三
和歌山紡績株式會社	二三
株式會社紀州銀行	二三
株式會社和歌山銀行	二三
株式會社紀伊銀行	二四
和歌山電燈株式會社	二四
和歌山織布株式會社	二四
銀行兼和歌山倉庫株式會社	二四
和歌山綿子ル株式會社	二五
株式會社和歌山商業銀行	二五
株式會社紀陽貯蓄銀行	二五
和歌山印刷株式會社	二五
鹽津和歌山岡瀨船曳船	二六
株式會社四十三銀行	二六
紀州鐵道株式會社	二六
三井銀行和歌山出張店	二七
株式會社和歌山米穀株式會社	二七
株式會社和歌山貯蓄銀行	二七
南海絹糸紡績株式會社	二七
魚市場	二七
茶跳市	二八
和歌出島の魚市	二八
綿糸販賣店	二八
書林	二八
勸商場	二九
色染場	二九
芝居小屋	二九
旅館	二九
新聞雜誌賣捌店	三〇
花街(東原、橋南)	三〇
人力車差立(自由軒、通運)	三一
紀州子ル	三一

總 目 録

紀州醫附油	三二
奈良漬	三三
傘製造	三三
紋羽織木綿	三四
小魚酢漬	三四
花かつら(香油)	三五
密柑酒	三五
紫蘇酒	三六
蘆邊織(二名紀州子ル)	三六
蘆柄團扇	三六
煉羊羹	三七
饅飯	三七
洋食	三八
和料理仕出し	三八
吳服太物商店(山喜、大野屋)	三八
舶來雜貨店(菊地、宮嘉)	三八
寶藥	三八
蕎麥	三八
和歌浦せんべい	三九
岡公園	三九
東岡東館	四六
縣社岡の宮	四六
向陽山松生院蘆邊寺	四七
仙境山珊瑚寺	四八
鷲の森御坊	四八
忍冬酒	五二
朝棕神社	五三
鷲の森	五四
水門吹上神社	五五
男水門	五七
小野港江	五八
忘摩神社	五九
松龍山光明院普門寺	六〇
吹上	六〇
吹上神社壙	六一
吹上の白菊	六一
善曜山蓮心寺	六三
増上山仙境院護會寺	六四
今福神明社	六四
寶壽山光明寺	六五
白雲山報恩寺	六七
妙見山圓如寺	六八
常住山感應寺	六八
雜賀川	六九

上 卷 目 録

鹽竈	七〇
紀三井寺	七〇
宗祇殿	七四
名草山	七四
名草の瀧	七五
布引の松	七五
濱の宮	七五
琴の浦	七七
琴浦松縁	七七
根上り松	七八
愛宕山	七九
彌勒寺山	七九
現口石	八〇
矢の宮	八一
五百羅漢寺	八一
秋葉社	八二
龜遊巖	八二
鶴立島	八二
蘆邊寺舊跡	八二
宗祇の松	八二
蘆邊	八三
片葉の蘆	八三

蘆邊團扇	八三
雜賀の城迹	八四
和歌の入江	八四
妹背山養珠寺	八四
蘆邊茶屋	八五
三斷橋	八六
郭公山	八六
經王堂	八六
多寶塔	八七
妹背海苔	八七
窟の祠	八八
響洗岩	八八
獨整蟹	八九
玉津島神社	八九
箕供山	九三
岩根のすゝき	九六
妹背牡蠣	九六
和歌松原	九六
妙見山	九六
南龍神社	九七
東照宮	九七
和歌祭禮	九九

總 目 録

天満宮	一〇六
和歌浦	一〇七
東照宮御旅所	一一三
不老橋	一一三
浦の初島	一一五
芭蕉翁碑	一一五
日前宮國懸宮	一一六
鳴神社	一二二
權山神社	一二三
伊太祁曾神社	一二七
根來寺	一三一
全園	一三七
全什物	一三八
粉川寺	一三八
全法會	一四四
全縁起	一四五
全靈地靈跡	一五〇
全寶物什器	一五一
粉川町	一五二
慶徳山長保寺	一五三
南叡山大同寺法華院	一五五
鳴瀧	一五六

愛陽山知足院總持寺	一五六
總目錄終	

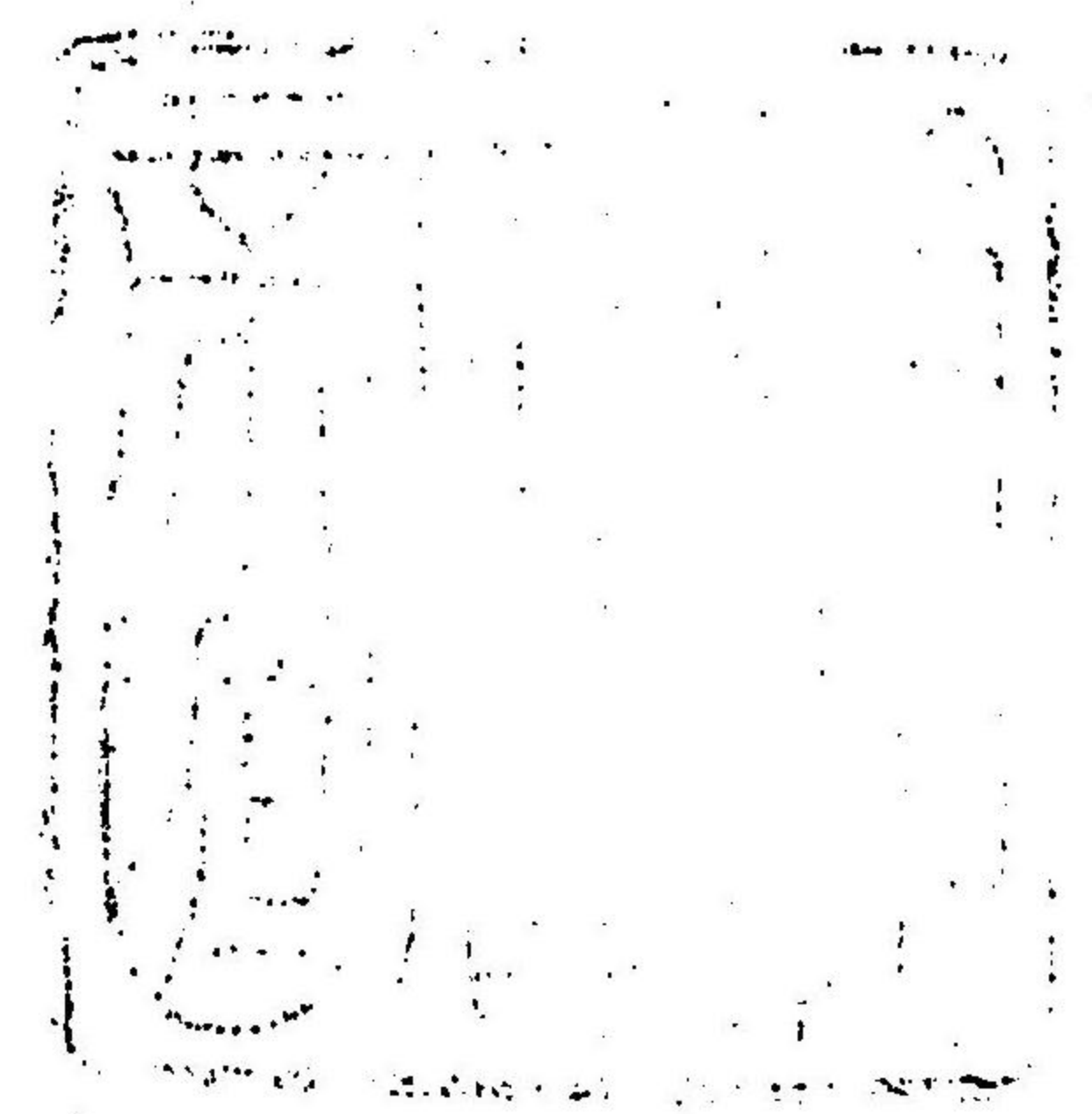
◎南^{なん}海^{かい}鐵^{てつ}道^{だう}旅^{りょ}客^{かく}案^{あん}内^{ない}下^げ卷^{まき}

案内者 宇田川文海口述

加田港

申^{まを}上^{しやう}紀^き伊^い國^{くに}に^い入^いれ
 國^{くに}は^は諸^{しよ}君^{くん}も^も知^ちら^らる
 東^{とう}は^は大^{だい}和^わの^の南^{なん}を^を抱^{かか}り
 海^{うみ}を^を隔^かて^て淡^{たん}路^ろを^をひ
 都^とは^は有^あ田^た日^{にっ}高^{こう}西^{せい}岸^{がん}東^{とう}牟^む婁^{ろう}南^{なん}牟^む婁^{ろう}北^{ほく}牟^む婁^{ろう}と^とい^いふ
 部^ぶ名^な車^{しや}を^を合^あ併^{へい}し^して^て海^{うみ}草^{そう}郡^{ぐん}と^とい^いふ
 川^{がは}加^か太^た黒^{くろ}江^え田^た邊^{へん}新^{しん}宮^{みやう}其^{その}人^{ひと}口^{くち}六^む十^{じゆ}一^{いつ}万^{まん}五^ご千^{せん}九^く百^{ひやく}六^む十^{じゆ}餘^よ人^{にん}其^{その}地^ち
 勢^{せい}吉^{きち}野^の山^{さん}脈^{みやく}東^{とう}北^{ほく}に^に來^きり^り熊^{くま}野^の高^{たか}野^の諸^{しよ}嶺^{りやう}と^とな^なり^り葛^{かつらぎ}城^{じやう}山^{さん}は^は伊^い都^と雲^{うん}山^{さん}
 那^な賀^が名^な草^{そう}海^{うみ}部^ぶの^の四^し郡^{ぐん}に^に跨^{また}り^り河^か内^{ない}泉^{いづみ}二^に州^{しゆ}に^に亘^{わた}り^り根^ね來^き古^こ佛^{ぶつ}雲^{うん}山^{さん}

先^{まづ}加^か田^た港^{こう}よ^{より}御^ご案^{あん}内^{ない}す^{する}る^るに^に當^{あた}り^り一^{いっ}言^{ごん}諸^{しよ}君^{くん}に
 事^{こと}が^があ^ある^る其^{その}は^は他^たの^の事^{こと}で^では^はあ^あり^りま^ませ^せん^ん此^{この}紀^き伊^い
 如^{ごと}く^く畿^き内^{ない}の^の南^{なん}に^に位^ゐて^て北^{きた}は^は和^わ泉^{いづみ}河^か内^{ない}に^に接^せし^し
 面^{めん}を^を西^{せい}國^{こく}と^と遠^{とほ}く^く相^あ對^{たい}し^し名^な草^{そう}海^{うみ}部^ぶ那^な賀^が伊^い
 阿^あ波^はの^の西^{せい}國^{こく}と^と遠^{とほ}く^く相^あ對^{たい}し^し名^な草^{そう}海^{うみ}部^ぶ那^な賀^が伊^い
 東^{とう}牟^む婁^{ろう}南^{なん}牟^む婁^{ろう}北^{ほく}牟^む婁^{ろう}と^とい^いふ
 又^{また}名^な邑^{いふ}を^を數^{かず}ふ^ふれば^ば和^わ歌^か山^{さん}湯^{たう}淺^{せん}粉^{こな}
 其^{その}人^{ひと}口^{くち}六^む十^{じゆ}一^{いつ}万^{まん}五^ご千^{せん}九^く百^{ひやく}六^む十^{じゆ}餘^よ人^{にん}其^{その}地^ち
 其^{その}は^は他^たの^の事^{こと}で^では^はあ^あり^りま^ませ^せん^ん此^{この}紀^き伊^い



又は一、小都會で、沖の方二三里の所に當つて、二つの島がある、南方を沖の島と云ひ、北の方の島と云ふ、之に神島を加へ、三島を惣稱して友が島、又は信が島とも云ひます、詳しい事は友が島の所で御案内いたしませう、地の島には何もありませんが、沖の島には砲臺がある、燈臺がある、淡路の由良にも要塞砲兵が置いてある、之を稱して紀淡海峡の要害といひます、此地は風光に富める上に、此堅固なる砲臺の要害を併せ見るのですから、壯快の觀と優美の念が一時に發動して、實に何とも云へぬ此地がします、案内者は五月十四日に當港に一泊し、其夜は一點の隈もなき、夏の月の、海波に映ずる景色と共に、砲臺を望み、友が島を見、取立ての魚の作身で、酒といひたいところですが、下戸の悲さ夕飯をした、め、あまり風景の面白さに夜の更けるも知りません、たが、翌朝は又、友が島の南端に當つて、大きな虹のかゝるのを見、快哉奇哉を叫ぶ間に、やがて風がマゼに吹變つて、白雨を降出させましたので、一夜の宿に晴好雨奇の兩景を併せ見る事を得ました、此地は避暑海水浴には尤も妙です、加太といふ名に背いて、蚊が少なふとさいます、海風は晝夜涼を送りますから春の潮干、秋の沙魚釣も宜い、此

の峰、大福山等連絡して、凡そ廿三里に蜿蜒し、就中龍門山は又の名を勝神山とも云ひて、紀州富士を以て世に稱せられ、又川流に至つては、熊野川中央に流れ、紀の川北境か注ぎ、西北は田野開け、東北は良材を出し、西南は密柑を培植し、海産物最も澤山、かゝる大國ですから、隨て名所舊迹も多く、夫を一々御案内申してゐたら、僕を換ると雖も足らずといふ次第ですから、今は和歌山近傍三四里遠くも四五里の間、夫も殊に世に聞ゆしもの——に止めてねきますから、何うか其れ思召しに願ひます。

諸加太港は海部郡加太村にあつて、芽海部の南部、淡路國に對つた一般着きです、此處は昔は名草郡でしたが、今は海部郡に爲つてゐます、此を加太浦といふのは誤りで、加太は驛の名で、昔は是より五六町の東の山の麓にあつたので、此地は元海中に在り、潮干に遠干瀉となる所故瀉見、又瀉見の浦とも云つて、日本に三ヶ所の退潮の名所です、昔から諸國の廻船の船が、りする爲め、商家旅店軒を併べて、頗る繁昌の土地で、すが、近來は加太山の宇深山といふ處に砲臺が出来て、常に兵隊が屯し、又四國へ通ふ旅容の多く成つたので、格別賑やかになり、戸數一千以上

港の名産は、鹽海鰻のひしこで至つて美味、裙帶菜、貝類などです、和歌山の柴田素堂の句に「松風や薄着になれし和布賣」能くその状態を述べました、案内者の見た目では、之を書に喩へますと、和歌の浦は圓山流、清雅ではあります、逸致に乏しく、此港は狩野派、霸氣はあるかも知れませんが、奇趣に富んでゐます、且東西の大關、世人若も和歌に重きを置いて、加太を軽く見れば、眞に風光を見る目がないのです。

友が島

又の名を靱が島とも、俗に之を筈が島とも云ひます、古名は妹が島、此島は役の行者が始めて足跡を著した縁に依りて、以前は聖護院の配下の修験道の行場に成てたり、又衆人も舟で島めぐりをして、其勝景を弄んだのですが、今は砲臺を置れて、容易く人の入る事を許しません、或る點から云へば、可惜仙境を封鎖して、雅人の目に觸れさせないのは、眞に遺憾のことです、前にも申した通り、此島は地島沖島神島の三つを總べたので、今略して其形を申さば、地島沖島は鳥の翼を張たやうな勢で、警へば左右の眉が人の面にある如くで、神島は其眉の上に黒子を添へたや

うに、西南の方に浮出てゐます、此島の梗概は舊紀藩の文學川合春川君が、候命に依りて書た記文に詳らかですから、左に掲げてその勝景を御案内いたします。

友島記

海部西邊有友島。多怪巖詭石奇卉異艸。古傳以爲神仙窟宅。役小角修道所也。余少有丘壑癖。欲一遊之。或以官事羈。或爲風雨阻不能果。志今茲冬十月有公命探島中奇賞。與二三寮友發舟牛渚直達友島此日也天晴風和氣色如春。一碧萬里波瀾不動。如行帷席上如有物引。乃知天吳海若有所助備愉快甚矣。遂得窺其秘窮其蘊。島三斷而浮。曰地島曰沖島。曰神島。謂之地島者以距海岸不遠也。周廻可十里。樹唯松菴蔚蒙籠。潮氣起下則見一片青翠冲天而懸。沖島在其坤位。二島相距甚狹。故潮水擊怒雷震百里。海波之險舟人比諸鳴門。地島沖島爲張翼勢若雙眉。然神島側居西南。爲眉上一點。地島有牛首赤松崎赤砂磬鼓匡金崎眠巖之諸勝。然無大異觀。其奇絕特在沖島。未達彼岸望之湧出波間如欹牆者爲虎原。一片石三十仞。其廣三之一半以下。累々乎爲回字。爲積

環。踏以登則可以容足跟。一腳置而一脚緣。漸踏且進。若荷儂承鯛半以上無皺如磨成。脚無可措手不得扳窮將哭。仰親先登者已極絕巖先鳴誇捷。余蛇行戈得及之。石而雕作友島五所禁殺生穢惡觀念窟序品窟閻伽井深蛇池劍池等字。是國初南龍公命李衡正所書也。字大可三尺飛動為鳳翥勢亦一奇觀也。少下左畔有穴徑可二尺懸而下得觀念窟。々廣袤可二丈。有碑在其中。道晃親王所書。筆力勁古雅致可愛。乃磨墨打之。西北嚮有口撥爾為巨獸喙。上圓青天下俯無底之淵。倚劍一嘯振大壑。爽然有揮斥八極之想。窟外有道由崖而作之。廣尺而外圯傾。就而視之。膽已落矣。履之背遂巡足二分垂在外。當比時也確禦冠射不得不磨。余乃股栗伏地汗流至踵。步不能進從前穴出。同行者嘲余為盜俠。余辟以強弩未力。崖之北畔上下為破裂狀者。曰圓怒濤噴雨水齧所致也。南下壹百五十步許。大石簌々林立海中。移舟上岸按蔓葛上十尋。巨靈一壁裂者為序品窟。其廣才可容人。其高摩肩欲仄以入則恢々乎有餘地。其始正黑左右摸索而進。神定而見物側于崖樹碑。題曰妙法華經序品第一窟。有懸石將墜不落有倒石礙于崖腹。熊經而上鶴啄而下。稍得出窟後。計可六十尺西南匯山壹百廿許步。得滿越地形島中最厚。故前後汎潮滿

則舟可越山所以有滿越之名也。一小山突起如駝背蒙。多石少壤不生餘卉。唯松樹數株環之可上。東北陞指播攝諸山鮮淡如畫僉聚掌上。蓋非以其高而所居無阻也。南下得閻伽井々陷今不存有碑記耳。自閻伽井達于神島二里而近。舟泛島之西邊而行。龍石峭立磊塊萬狀。起松下懸崖腹其翕然板緣而上者若竈曝。其奮然欲立而仰者若狗吠。其偃然相顧而儂者若漂母下疇。又如王仙子之羊李將軍之虎。攪幽之頃應接不暇。神島周迴三百許步。其西南岑蔚劍池在良位。土人傳言角仙得神劍之所。謂之神島者少彥名神祠故在于此。後遷諸粟洲。合祀神功皇后。云布浦與神島隔一帶舟過其間。有候臺備海防。南行一里大半里。得蛇潭。壑谷所注湛為潭。蛇虺之所蟠狸鼠之所敖。惡木毒卉亂雜塞蹊。欲探蛇穴者鄉導懇險隘難往乃止。過圓山東北轉倚累出海中者為海懶堆。海懶每遊其上。是為友島南界。南對阿之牟島西接淡之由良。使人寒裳欲涉。東折百許步得道風崎。山勢趨海波底皆石。峭巖呀起錯置若碁子似圓似臼似楹似劍似戟。游者若龍。企者若黿。若冠而坐。若揖而立。不可悉名狀。友島之奇觀至于此而極矣。昔時僧道風者愛其景居之故得名。鵲巢山有鵲巢于巖上。不懸不可下梯不可上。據險自王。避害周防。不特樂且貪亦

可謂智而黠者也。東北二百步得女濱。海石亦奇。然比之道風崎。則山稍平夷。石亦不踳。所以得女濱之名也。五斗崖亦多美石。石上選々生松。冬夏蔚然。大石數行屏列海波中。季倫四十里。錦步障亦可想也。從是北折取路。上山頗平衍。無奇石。得牧馬場。口中而馬入無異觀。乃上舟北行一里大半里。得蒲浦有深蛇池徑百許步。傳爲藏龍藪。惡聞笛聲。故遊友島者不齋簫管之具。若誤觸其怒則齧粉矣。有護摩場。役氏之徒。時來修法。有碑在池心。池多蒲艸。沮洳汚塗。履之則陷。驚步而進得達碑下。碑高丈餘。乃黑荷稍得打之。蓋友島之觀盡于此云。余嘗聞之故老之言。友島古曰苦島。神功后征三韓歸也。麻坂忍熊二王子。謀反拒后於住吉。后不得入。乃率舟師出南海。俄颶風作陽侯波起。蛟龍夾船桅折帆裂。不知所爲。乃祈于天曰我師可濟神其佑之。乃取船上蓋苫以投海。從其所流而往。止于神島。島有少彥名祠。后喜以爲神之所護也。名其地曰苦島。後後或爲靛島。又爲友島。蓋以方言相轉也。其曰妹島者亦以神后謂之乎。或曰以二島爲妹兄也。今茲吾公思友島之奇也。俾能書者寫真景又辱命臣衡爲之記。夫友島之顯于南海也。始於神后。盛於小角。而文其境者獨有南龍公。而紹其緒以雅馴其事

者又唯有今公也。季代之事先公也。以善書鳴于一時。衡不才辱以文學近侍左右日久。雖不能敵季氏之才幸浴右文之澤。私竊謂不復敢不謹以記焉哉。寬政戊午冬十月廿八日。奉命遊于友島。既歸紀遊事以上。

魚釣、突魚

此浦では、孔子の教へに従ふと云ふ譯でもありますまいが、釣して網せずで、網で取るのは釣の餌に遣ふ小海老ばかりです、漁夫二人小舟に乗り、一人は艪を押し、一人は竿もて釣る、案内者のまゝつた夏の始めころは、いさゝかおち、さばの類が多く取れるといふことでした。又イサシと唱へて、一艘の舟に一人の漁夫が乗り、一人は艪を押し、二人はモリを持って魚を突きます、今より五六年前までは、照燈を用ひて波を去づめて突きました、今ではガラスの底を穿めて小さな箱を用ひて、水の底を見すかして突くやうになりました、文明と共に漁業も漸次に進歩する事は是でも分ります、突いて取る魚は、蛸、貝、(あはひの類)かれひ、旅館の二階から、此釣魚突魚を見るのもなか／＼一興です、釣たり突たりして捕つ魚は、格別美味です。

社 神 島 淡 太 加
里 三 リ ヲ 場 車 停 口 北 山 歌 和



Awashima jinja, (Shinto shrine). About seven miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

拾遺、神社啓蒙等の書と大同小異、

すが、今當社の縁起の要を摘んで左に掲げねます。抑も當社少彦名祠と申奉るは神皇靈尊の御子にして、天質微妙にましますといへども、心性恢濶なるとは大海の溶水ざる所なきがごとく、命と力を戮せしめる、爰に大己貴命と中原の津洲を造り堅めたまひけるに、國々を巡りて是を碎平け、其土に應じて五穀を樹さしめ、草木を嘗て其能毒をさとし、療病の法をさだめ、更に鳥獸昆蟲の災を攘はんが爲に禁厭の法を傳へたまひ、遂に淡島に禁厭の法を傳へたまひ、たまひき以上古事紀、書紀、古語

加太神社

海部郡加太村、即ち加太浦の西南にあり、和歌山市より三里餘、古へは名草郡でしたが、今は海部郡に屬してわります。祭神四座、正殿は少彦名神、相殿左方は月讀命、大己貴命、右方は氣足姫命、社格は郷社、彦喜式神名帳に、紀伊國名草郡加太神社と記して、又扶桑略記に、延喜六年二月七日、紀伊國粟島神に從五位上を授く見ゆ、本國神名帳に、海部郡坐神從四位上粟島大明神とあり、四時の祭禮は、舊曆三月三日、四月八日、九月九日、十一月十三日、此社には祝詞舎、拜殿、神輿舎、神樂所、文庫、御供所、廳舎、雞樓門、御廩、御鑊、漿石、五倍子、挽石、(皇后)御齒を染めたまふ時、用ひたまふとも云ひます、潮石社前の鹽盤です、此石自然に凹むで潮の満干に從つて水が増減するといふ等があります、攝社中言神、祭神二座、名草彦命、名草姫命、俗に之を結縁神と云ひます、す、紀國造家譜に、第五世を名草彦と、又大名草彦命始め、名草郡を建つとあり、而て見ると此神は當國日前宮の神官紀國造の遠祖で、此名草郡を始め、開いた神です、此加太神社に就ては種々の説がござい

と申に、神功皇后自親三韓を征し凱旋ましけるに、忍熊王の謀反によつて、皇太子を武内宿禰に託し、木の水門より遠く日高の地にうつり避させたまはんとて、官鷄既に難波に向ふときしも、飛廉頼りに風を起し、陽候數々浪を掲げ、縹蕩して忽海路を失ひ敢て進むことを得ざりしがば、皇后親ら艦さきに立せたまひ、天神を地祇を仰て此船のたよらん方を導がせたまへやとて、宮をどつて海中に投じたまひ其流れさるまに、進ましめたまふに、いとも安々と漕つれて、遂に一つの島を得たり其宮のどいまりし島なるをもつて是を宮が島といふすなはち友が島の神島なり、皇后則ち島に上て望ませたまふに、一つの神祠あり是必ず前の危難を免かれしめたまふ御神ならめとて是を拜したまふに、則少彦名命にて予ましける、おぼろげならぬ神徳の冥助ありしことを深く感じさせたまひ、ことには此御神醫藥の祖神にましますに、皇后前に妊娠の御身に遠征あらせたまひしかば、山瘴海氣の毒つみて御分神の後遂に赤白の帶下にいたく惱ませたまひける程に、幸ひなる折なればとて親幣帛をどつて是をすしめ御祈願なしたまふに、靈験誓の聲に應ずるが如く、乍ち祠祝に憑て神託ありしかば、

則其御をしへに隨ひ藥草をこゝろみたまふに、御不豫立所に平癒ならせたまふ、こゝにあめて皇后御悦喜大かたならず、やがて韓國にて收物になしたまふ所の種々の寶奉納ましける、遂にめでたく皇太子に日高に會したまひ、反人忍熊王を誅して、皇統恙なく泰平の御代に復せしかば、いよ／＼神威を仰ぎて崇敬あらせたまひけり、其後十七代の帝仁徳天皇淡路島に遊獵なしたまひしに、三月三日の日を卜し、宮が島より新殿に遷し奉り、皇后の神靈をも合せ祀り(或説にあはしまの神とは此御神を合せ祭るによりて稱へし御名なりともいふ)、其餘二柱の御神をも齊き祭りて、一區四座とし、本の地と今の地とによりて加太粟島大明神とは稱へ奉れり(今の地とは加太をいふ本の地とは書紀に、少彦名命至淡島縁粟莖者則懼渡而至常世郷云々、是によつて宮が嶋をわはしまといふなり)、されば當社の御神は海路の風波を鎮め倉生病難はいふもさらなり、鳥獸昆蟲の災をさへに攘ひまして、殊には夫婦妹脊の守り子なき女には是をさづけ、安胎平産を護したまへば子なきものは當社に詣ふで、神主の宅にいたり人しれず茶碗を持かへるに、右のそでに入れば男子、左の袖に入れば女子をまうくといふ、衆人

の御神に、歷代侯伯の寄附たゆる事なく感應むかしに越えていちじ
 るし、御神詠にいわく
 我々の人の惱をなこめずは世にあはしまの神といはれじ
 今の世に、例年三月三日九月九日女子雛祭りの遊戯あることは、往古
 神功皇后てづから少彦名命の御神像を作りて當社に奉納なしたまひし
 より事起り、其後仁徳天皇の御宇神託によつて天下婦女幼兒の病苦
 を攘除のため、宇禮豆玖物とて雛がたを製してこれを翫遊ばしめたま
 へり、また天兒といへるも少彦名命の御神像にして、これをまつるこ
 と雛遊びの巻に見たり、秘歌
 あまがつのあしへそめにし神慮あはれとは見よあなし子のため
 以上は社家の秘説です、當社に現在の神寶は實に澤山なものです、一
 枚舉に違ありませんから、其中尤も貴重な物のみを左に掲げます
 縁起一卷絹地、撰者不詳、享保十四年寶鏡寺密理豐親王筆、外題「加太
 淡島神社縁起享保十四年伏見二品兵部卿貞建親王筆」、書「貝合并雛遊紀、
 撰者不詳、明曆三年神主從五位備後守如照筆」、古文書拾一通、鏡三面
 (内一面神功皇后奉納)、太刀焼刃直、裝具、地金、金色無地、無名寸法

二尺四寸五分、神功皇后奉納)、刀銘宗近、寸法二尺、大内義弘奉納、
 兜(大塔宮護良親王奉納)、太鼓徑一尺六寸、兩面獅子を描き、胴に唐草
 の模様を描く、神功皇后奉納)、八咫瓊曲玉一聯曲玉四顆管玉七十顆水
 晶玉一顆各糸を以て綴る、古來神殿に秘藏す、少彦名神の御衣裝の飾
 りといふ傳へ、干滿珠(或如意珠とも云ふ、神功皇后奉納玉)、(古來神庫
 に藏す、由緒不詳)、綾巻物茶色、長二尺九寸、神功皇后奉納)、奇石(或
 は靈石と稱す、由緒不詳)、神像木質、三体、神名不詳)、雛其數百を以
 て數ふ可し、徳川家代々奉納、男女共大きき尋常の人に少し小さき位、
 機關を施して起居自在なり、四季の衣裳備はり、時々着更るやうして
 あり、其他小さきもの數を知らざり、餘は略す、
 此邊猶名所舊迹がございしますが、夫は略して、是より三里二十三町、彼
 の頼山陽が「幾樹青松夾道堆、遙看城堞樹間開」の詩句の間を経て、
 和歌山に至る。

和歌山市

は縣の西北部にあつて海草郡にあります、徳川親藩の舊城市、東西二十

町餘、南北二十八町餘市坊四百餘、戸數一萬三千二百九十二、人口五萬五千三百十三(明治三十年一月調査)、南海道第一の都會、市内を分ちて宇治、内町、番町、廣瀬、新町、吹上、港の七部としてあります。

京橋

は本町一丁目より番町に架りてあります、此橋は市内の中央であつて里程は之れを元としてゐる、近附里程は左の如し

○大阪へ十七里四町

○紀三井寺迄一里廿一町卅間

○日前國懸社迄三十五町

○高野山迄十二里五町

○粉河迄六里十七町三十間

○和歌ノ浦迄一里二十町十七間
○加太粟島迄三里廿二町四十間
○山東伊太祈曾迄二里廿三町廿間
○根來迄四里十八町

其他は略します。

和歌山城

は市の中央虎伏山に在る、豊臣秀吉本州に討入國土を平げ、弟秀長を和

和歌山 城 山 歌 和
和歌山北口停車場 丁四十



The Castle of Wakayama. One mile from Wakayama-Kitaguchi Station.

是より官衙病院學校等を御案内いたしませう。

泉、紀、の三國に封じ、命じて城を茲に築しむ、老臣桑山重晴工事を監督し、天正十三年三月に起工し、年々を越て成る、以後紀藩鼻祖南龍公入國して、更に經營普請し大に面目を改む、降て弘化二年雷火天守閣を燬く、幾くもなくして再築の功成る、現今存する處の天守閣則是です、當時は頗ぶる壯麗を極めました、外圍は總て取拂ひ昔日の觀なれど、今尙天守閣翠松の間に聳け、昔日の規模を想像せしめます、當城は四方樹木が繁茂してありますから、寫眞の探影頗る困難を極め、漸く其一方面のみを寫しました、

和歌山縣廳

は西汀町に在ります、明治二十一年一月祝融の災に罹り、同二十二年三月再築の工落成したのです、總建坪五百六十九坪七合五夕あります。

和歌山縣警察部

は縣廳正門より入つて左に在ります、明治二十九年春茲に新築移轉したので、摸造の洋館です

和歌山地方裁判所

は舊城の東二番町に在ります、十數年前に新築したる和風の高樓であります。

和歌山區裁判所

は三番町に在りて地方裁判所と相背後せり、登記事務は當所内にて取扱ふて、居ります。

和歌山警察署

は十一番町(京橋南詰)に在ります。

和歌山郵便電信局

は十一番町(京橋南詰)にありまして小包郵便物も取扱ひます。

和歌山縣病院

は七番町に在り、明治初年創設し、漸次進歩擴張しましたが、明治十六年十二月三十日火災に罹り、其以來益々規模を大にし、明治二十九年地方議會の賛同を得て一層の擴張を得るに至りました。

和歌山縣第一尋常中學校

は和歌山城跡に在りまして、元城南岡山に在つたのを明治二十二年三月此地に移したので、校舍は舊主徳川茂承侯より、本縣學資金として寄せられたる金額の内を以て新築したのです。

和歌山男子高等小學校

は七番町二番地にあります。

和歌山高等女學校

は七番町二番地に在り、明治二十四年三月創立、以來長足の進歩をなし、現今生徒の數百五十名の餘あり。

和歌山縣尋常師範學校

は真砂町(岡山)に在り、女子部も此隣接地に設置してあります。

和歌山測候所

は男の芝町吹上寺境内に在ります。

和歌山聯隊區司令部

雜賀屋町東町にあります。

和歌山市役所

は西汀町縣廳正門を這入た右手にある、現今七番町二番地にあります。

和歌山市會議事堂

は和歌山高等小學校講堂を借用して居りますが、當時右の市役所の接續北にありませす。

和歌山縣會議事堂

は一番町元植物試驗場を借用してありますが、目下改築中です。

和歌山縣監獄署

は小松原通り壹丁目久野丹波守邸跡に在ります、明治十二年の頃傳法町より移轉したのです。

和歌山憲兵屯署

は元寺町二丁目(甫齋橋西詰)にあります、次に風變りの營業を御案内いた
しませう。

私立病院 (神田、山縣)

神田病院は雜賀屋町に在り、土地高燥で病院には適當、院長神田瑞穂氏
山縣病院は屋形町四丁目に在り、院長は醫學士山縣有恒氏、曾て和歌山
縣病院に長たりし人、明治二十三年四月職を辭して茲に私立病院を開設
したのです。

日刊新聞紙

和歌山新報は明治二十五年八月の創立、十二番町和歌山新報社より發刊
し、紀伊毎日新聞は明治二十六年四月の創立、八番町和歌山實業新聞は
明治三十年三月初刊にして、元寺町一丁目にあります、和歌山商要日
報は十二番町にあります。

寫眞

八番町の柴田杏堂氏尤も著名です。次は銀行會社を御案内いたしませう。

合資會社山崎銀行

は三木町堀詰に在ります、明治十八年五月の創立、資本金八萬圓です。

和歌山紡績株式會社

は傳法橋南の丁壹番地に在り、明治二十年九月の創設、漸次社運隆盛と
なり、現資金六拾萬圓、器械はリソグーミユル等合して壹萬千〇二十八
の錘數、製造年額は參拾四萬參千貫餘、販路は當地及び大阪にて、職工
男女八百名餘あります。

株式會社紀州銀行

は明治二十九年七月新通四丁目に創業、資本金五拾萬圓、支店は郡部に
三ヶ所在ります。

株式會社和歌山銀行

は駿河町に在り、資本金貳拾萬圓、明治二十八年三月の開業、市内に支店壹ヶ所あり。

株式会社紀伊銀行

は十番町に在り、資本金參拾萬圓、明治二十八年三月の創立なり。

和歌山電燈株式會社

は畑屋敷松ヶ枝丁六番地に在り、資本金八萬圓、明治廿九年四月の開業であります。

和歌山織布株式會社

は傳法橋南の丁三番地に在り、資本金參拾五萬圓、明治廿五年二月の創立、現今製造する物品は、専ら支那、朝鮮及び内地に販賣、男女職工五百八十名餘、大阪西區江戸堀南通壹丁目に出張所があります。

銀行兼營和歌山倉庫株式會社

は十二番町九番地に在り、資本金參拾萬圓、明治廿六年六月の創立、郡部に支店壹ヶ所あり。

和歌山綿子ル株式會社

は新中通三丁目二十番地に在り、資本金拾五萬圓、明治廿九年二月の創立、此社は製造せずして既製のものを購入し販賣するを業として居ります。

株式會社和歌山商業銀行

は本町壹丁目壹番地(京橋北詰)に在り、資本金貳拾萬圓、明治廿九年二月の創立であります。

株式會社紀陽貯蓄銀行

は米屋町六番地に在り、資本金五萬圓、明治廿八年五月の創立なり。

和歌山印刷株式會社

は十二番丁十番地に在り、資金壹萬四千圓、明治廿九年二月の創立なり。

鹽津和歌山間漁船曳船

は和歌山鹽津間の曳船は日々四回づゝの航海、水上三里、内川一里半、海上一里半、乗船料拾貳錢、本店は吹屋町に在ります。

株式會社四十三銀行

は十一番丁壹番地に在り、資本金壹百萬圓にて創立は明治十一年十月、同行は最初資本金貳拾萬圓、第四十三國立銀行と稱したのですが漸次擴張して今日の資本となり、廿年三月一日營業満期となつて株式組織に改む、支店は東牟婁郡新宮町を初めとして、縣内に九ヶ所設立してある。

紀州鐵道株式會社

は目下創立中、此線路は和歌山を起點とし、和歌浦、紀三井寺を経て、海草郡黒江町に達するもの、資本金參拾五萬圓、創立委員長は千田軍之助氏。

三井銀行和歌山出張店

は本町二丁目に在り、明治廿四年四月の創立、現主任辻僊吉氏。

株式會社和歌山米穀株式綿糸取引所

は十二番町に在り、資本金七萬圓、明治廿六年十二月十三日の創立なり

株式會社和歌山貯蓄銀行

は駿河町濱に在り、資本金三萬圓なり。

南海絹糸紡績株式會社

海草郡中之島村(和歌山接続)に在り、建築既に成り目下器械据付中、やがて開業との事です。

魚市場

東鍛冶屋町、南大工町等に官許市場が在り、近海漁業地より來り集る魚

類常に積で山を成し、賣買頗る繁昌なり。

菜蔬市

萬町、田中町に在る、春は若菜の初市より冬は牛蒡の終り市まで、四季折々の青物たゆる時なく、近郷近在より輻輳、魚市場に省らぬ繁昌。

和歌出島の魚市

は百五十年前以來の舊魚市場、尙一層の盛大を謀る爲め、本年之れを合資會社に組織を改め、高井貫一郎氏、業務擔當者と爲る。

綿糸販賣店

總糸は紀州の産物、今は變化して紡績綿糸となり、彼の紀州ネルの材料として欠く可からざるもの、其綿糸の販賣店は瀧野米吉本町三丁目竹中源助三木町等尤も手廣く取扱ふ。

書林

和漢書籍店は内町新町湊等に數軒あり。

勸商場

元寺町一丁目に在る、地方の産物を初め種々の物品を陳列販賣して、諸人に便利を興ふるもの。

色染場

紀州ネルに欠く可からざるは色染です、其工場之重なるは、十二番町に在る良色染兄弟合資會社、九番町に在る和歌山色染所、共に機關を据付専ら綿ネル業者の供給を爲して居ります。

芝居小屋

元寺町一丁目に在るを紀國座と云ひ、三木町に在るを大黒座と云ふ。

旅館

數多ある中にて、尤も名のあるは、本町三丁目正木貞次郎、本町四丁目

の前田静七、同一丁目の小早川伊助、十三番町の前島武雄(有田屋)等です。

新聞雑誌賣捌店

本町一丁目書林津田源兵衛、和漢洋書籍は更なり、内地新聞雑誌にして、凡そ販賣せざるものなし。

花街(東廓橋南)

市内に二廓ある一を東廓と稱して北の新地及圓福院町に在る市の東隅に在るを以て此稱がある、往時より妓樓が茲に在りて新内と云ふ、併し街路曲直狹隘、眞の廓を爲しません、現今の席貸業者二十五戸、藝妓六十名餘、廓中第一の妓樓を四美館とす、此館は元紀州藩御用商人大和屋五兵衛、當時の勘定奉行金澤某に費用を借りて新築し、別荘となしたるもの、故に築造は頗る結構、維新後變じて席貸となり二樂庵と稱し、其後喜望亭と改め、今の四美館の名は明治十二年頃改稱したものです、又一を橋南と稱して十一番丁に在ります(京橋南詰に在るを以て此稱あり)、本廓は明治六年名めて開いたのです、此地は元丸の内と稱し、片面は内川に接

して彼の竹垣城の名稱ある竹垣のあつた土堤の跡、現時席貸業三十二戸、藝妓の數十餘名、當廓第一の青樓は風月庵、料亭は於福亭、玉子豆腐製造を以て名がある。

人力車差立(自由軒通運)

十一番町自由軒事九鬼彌兵衛、及び本町一丁目内國通運會社代理店―次は名産名物―

紀州子ル

和歌山縣特有物産を以て世人の知らるゝ紀州ネルの起源は、明治初年に在りて、其創製考案者は、縣下日高郡出身の瀬戸十助氏、同四年に至り稍完全なる物を製する事を得て、始めて大阪兵部省へ上納したるところ、同省に於ては之れを毛出し木綿と名稱せられ、同六年に至り紀州ネルと改稱し、頻りに販路擴張を謀り、東京近衛局、海軍省、熊本鎮臺等へ見本を提出し、採用せられました、海軍省より沙汰來品を以て使用されし被服地を、綿布にての模造を試みよとの沙汰

が、幸ひなる哉、然れども其機具のなかりし爲め種々苦慮をして居ました
が、幸ひなる哉、然れども其機具のなかりし爲め種々苦慮をして居ました
直ちに該所に至つて精密なる検査を遂げ、圖面に寫して歸國し、木製に
て之れを模造し、一種輕便なる器械を發明し、専ら製織して遂に今日あ
るに至つたのです、其の功勞決して没了すべからず、現今和歌山市及海草
郡に製織する者、最近明治二十八年中の統計に依れば、實に百十九萬四
千二百六十四反、此價格三百八十二萬千六百四十四圓八十錢、販路は東
京、大阪、名古屋、仙臺、函館、其他各地方及び、又清國、朝鮮等に輸
出するもの、年と共に多きを加へ、現在製造者は一市一郡にて三百六十
戸、最も盛大なるは和歌山市十二番町青山松助の工場、製出高三萬反内
外にて、此商買高十五萬圓餘であると、之れに繼ぐものは同市小野町一
丁目六番地三村榮吉の工場、是は一ヶ年製造高二萬反價格八萬圓餘、此
兩氏共に博覽會にて褒賞を受領せしこと數回です。

紀州鬚附油

本品は安永年間の創製、其以前は他國より輸入したるもの、當時粉川屋、

岡崎屋、福島屋等諸家の丹精苦心の結果、遂に本品を製造することを發
明し其原料たる木蠟、種油共に他國に比して善良なるを以て隨て品位も
好く、大に高評を博し、遂に天下紀州鬚附の名を知らぬ者無きに至りま
した、現今尤も世に聞ゆるは、木挽町粉河屋こと山崎孫兵衛製の白梅香
三國一、新通四丁目福島屋こと島村富次郎製の芙蓉香、岡崎屋こと坂上
傳太郎製の尾上香等、其他廣田伊助、井關某等も盛んに製造してゐます。

奈良漬

紀州産物の一つとして其名高く聞はてゐます、此の起源は元祿年間本町
五丁目新屋事江川八左衛門の祖先は、造酒業たるを以て、年々漬込を爲し、以
て投入試みたところ、一種特別の美味あるを以て、年々漬込を爲し、以
て來小西瓜のみならず、種々の野菜を漬け、而も追々改良に手を盡した
め、大いに販路が開けました、明治初年江川八左衛門は不幸にも家財を
失なへるに、本町五丁目の宮崎傳兵衛、同家の製法を譲り受け、益々改
良を施こせしに依り、今は海外にまで輸出するに至るやうになりました。

傘製造

本町九丁目に在る、維新前までは家並に此職を以て業としておましたが、今日では數へる程になりました。

紋羽織木綿

紀州名産の一ツ、那賀郡地方に製織して、當市に出荷するもの少なからず、現今にては綿子の盛大に趣くと共に紋羽は減少の傾です、昔は此紋羽を足袋にして諸國へ賣出したものを見ましまして、左の狂歌がありま

「足袋にして行かぬ地もなし國々へ紀州紋羽のはけ口ぞよき」

小魚酢漬

古くより紀州の産物として其名高く聞ゆ、昔は樽詰として販賣したと見えて、或人の口吟に
「釣竿のはしにかゝりしをさあ魚漬喰にして酒の餌さなり
又此狂歌に依て見れば、樽に口を明け夫より箸をいれて、直接に出して喰ふことを得たものと思はれます、去る明治十七年四月、港本町一丁目

中村清次郎が壘詰を發明し、大に販路を擴張し、又博覽會、共進會、等にても褒賞を得たること其數少なからず、此外西の店岡田儀兵衛も近時製造販賣をしてゐる。

花かづら(香油)

住吉橋北詰小間物商吉田吉兵衛、多年丹精苦心の結果、漸く發明販賣を始めたもの、原料は柿の實を以て製し、之れに數多の薫藥を調和し(西洋香氣を交へず)實に精撰佳良の香油です、目下續々京阪地方へ販賣してゐる。

蜜柑酒

港紺屋町一丁目、南方常橋の醸造發賣するもの、本品は同縣の特産物たる有田の蜜柑を以て製造するのですが、是は始め有田郡の人松下莊次郎、十年一日の如く苦心研究し、遂に明治十七年素志を貫徹して發明製造したのです、甘味芳香怡も生果を嘗むる如く、然るに半途松下家産を重ぬるに従ふて醇良の度を増す一銘酒です、

蓋盡し、常橋の亡父彌右衛門資本を助けて醸造せしめたるが、其後莊次郎も彌右衛門も共に幾干もなく病死したれば、今は常橋の専有品となり、京阪地方へ販賣すること實に夥多しいものです。

紫蘇酒

は紀州の名産の一ツ、之れが製造の起元は數百年の昔にして詳なること知ることも能はず、現今は寄合町宇治田六右衛門及び港紺屋町一丁目南方常橋等の醸造するもの、其額二百石内外の僅少なれど、本酒は腐敗の恐れなく、風味も好良にて而も芳香に富み暑中の飲物には頗る適當のものです。

蘆邊織（一名紀州子ル）

三木町綿子ル商富田八次郎、數年前より改良に苦心し、遂に小巾着地となし之れを芦邊織と稱し、専ら製織す、携帶には至極便利。

蘆柄團扇

新通一丁目池端藤之助の製造にかゝる、此團扇は同人の亡父彌太近、舊藩主の小姓役勤務中、粉川團扇に擬して更に一步を進め、丹精して之を作り、其骨竹の如き頗る精良なるものを撰み、用紙は伊豫國より特別に仕入、製品は年々藩主にのみ獻納してゐましたが明治四年廢藩の後、専ら營業として弘く販賣することになりました、今に用紙は伊豫産を用ひてゐる、第三回内國勸業博覽會に出品して褒賞を得ました。

煉羊羹

の製造元は駿河町駿河屋事岡本善右衛門、同家は元山城伏見より出で、慶長、元和の頃官命に依つて駿河に轉じ、又和歌山に支店を設け、屋號は鶴屋と稱せしも、憚る所ありて駿河屋と改め、代々菓子を製してゐる、開業以來殆んど三百年、明治初年までは御賣のみで小賣はしなかつたさうです、今の煉羊羹は製造始めてから茲に一百年なりと。

鰻飯

は雜賀町(表橋北詰)九橋樓事戸塚清次郎。

洋食

は十三番町集雅亭鈴木庄兵衛。

和料理仕出し

は廣瀬通り町二丁目魚吉事小川清次郎。

吳服太物商店(山喜大野屋)

はぶらくり町山喜事道津喜兵衛、本町二丁目大野屋事奥田平七等なり。

舶來雜貨店(菊地宮嘉)

ぶらくり町菊地万藏、本町二丁目宮本嘉平次等。

賣藥

有名なるは寄合町の阪上傳太郎

蕎麥

本町一丁目岡徳そばと云へば誰れ知らぬ者なし、開業次來二百年内外といふこと

和歌浦せんべい

は米屋町ぶらくり町菓子商錦花堂主人金原彌五兵衛が數年前より發賣するもの、表に和歌浦の八景を印して、至極高尚優美、其味ひも佳良、罐詰にしてあるゆゑ、携帶にも便利、次は名所舊跡の御案内いたしませう

岡公園

は岡山の東岡山町にある、一名を天女山といふ、此地古昔は海岸であつて、今に浪打際の痕が残つてある、山の上に辨財天の社がある、故に天女の名があるのです、此山に登ると、弱山の城内が能く見ゆるので、要害の爲め止め山として、藩制の頃は庶民の登臨を許さなかつたのです、山の東の下に百軒長屋といふが、是は藩士江戸常府の者の勤番所でした、明治の初年に兵制を改め、獨逸風に倣ひ、歩兵第七聯隊を

和歌山公園ノ景



Wakayama park. One mile from Wakayam-Kitaguchi Station.

氏の撰にかゝる、南紀公園記を併せて

去る二十八年、山上更に、有栖川彰仁親王殿下の御筆に成れる、征清紀... 念標を建て、其前に二十七年、沖...

組織しました、其隊の屯營に充られました、其後間もなく還祿士族に... 南、諸役に、官軍として戦没せる、四百十一人の本縣士民の爲に、紀...

公園記、いづれも能く公園の趣を細叙して遺憾はありませんから、案内者の下手の長談義はやめておきます、寫真は公園の山上紀念碑のある所を撮影いたしました、

四役戦亡紀念碑側記

嗚呼盛矣哉。我和歌山縣兵之殉國難也。死佐賀役者五人。死熊本役者六人。死臺灣役者三十三人。死西南役者四百四十七人。四役合四百九十一人。佐賀熊本事起倉卒。臺灣外征。皆能應其機。毫無踟躇逡巡之色。至西南役。賊勢猖獗。八閩月而平。積骸爲城。醜血爲池。轉鬪百里。守死不屈。况如臨時徵募兵。奉命即起。奮然猛進。快戰而死。是雖由諸將督勵得宜。非勇故知義安能然哉。嚮者舊知事德川茂承。與陸軍大佐岡本兵四郎關迪教等。來謀於弔。大修招魂祭。以慰答其靈。又欲建碑以不朽之。使予任其事。圖縣士民聞之。爭輸金助工事。乃卜地於城南辨財天山。請有栖川親王書紀念碑三大字。歲時祀之。庶幾永終不墜。抑我縣赴役者前後幾千人。而存者亡者。幸不幸。不待言也。然自死者言之。得盡其分毫無所憾。自存者言之。望其碑想見其勇。不能無羨嘆之思焉。則是碑也。非獨慰死者。亦可以益勸獎我縣士氣矣。此則是碑之所以建也。因紀其由。刻諸石。以樹于碑側。

明治十六年九月

和歌山縣令從四位勳三等 神山郡 廉

征清紀念標建立記

吁嗟是我。和歌山縣軍人征清紀念之標也。伏惟明治二十七年八月。天子震怒。有事於清國。煥發宣戰大詔。親爲大元帥。進大纛於廣島。皇師渡海。戰必克焉。攻必取焉。天戈所麾。莫不風靡。清國知其終不可敵。乃派使臣割地償金。以請和平。越明年五月。事平而清將。在臺灣者。尙煽動凶徒。敢拒王命。乃出舟師海陸進剿。撫降逐頑。盡十月。方就廓清。凡斯十萬。貔貅鞠躬。致命櫛風沐雨。祁寒酷暑。不顧萬死者。豈非天皇陛下。霄肝之所致乎哉。此役也。我和歌山縣之軍人。而立偉功。以受顯位。錫名爵者有矣。曝屍原野。灑血溝壑。以死者有矣。或罹瘴氣。爲島鬼。以斃者有矣。其境遇雖不同。而所以竭力於國者。皆一也。我輩八十六人。爲之唱首。謀建紀念之標。縣下衆民。競相贊襄。釀金助工。因請彰仁親王書征清紀念標五大字。純銅爲標。嵌以金字。建諸辨財天山上。與佐賀熊本臺灣鹿兒島四役戰亡紀念碑相並。相峙。以傳之。不朽而今。而後歲時。舉紀念之式。上以奉頌天壤無窮之皇德。下以表彰軍士丹碧之遺績。庶幾以慰藉義勇之靈。足使縣民奮勵於式乎。是月功竣。乃記厥由。以勒之。

明治二十八年十二月

從四位勳三等 沖 守固撰並書

岡公園記

岡公園辨天山舊址也。初元和中。德川賴宣封於紀伊也。諸士第宅環繞山麓。而辨

天山秀乎其中。一登焉則城內可俯視也。以故藩制不許登臨。維新以降第宅頽敗。鞠為茂草。而辨天山草樹彌茂。灌莽彌深。終為狐狸蛇蝎之窟矣。明治十三年舊藩主德川茂永縣令神山郡廉及陸軍大佐岡本兵四郎諸人。視吊佐賀熊本臺灣西南四役殉難者。為建記念碑於此。相地興工。草樹去而奇石出。灌莽除而清泉迸。自是縣民稍有遊覽於斯者。十七年縣令松本鼎等又於山下設亭榭以為遊息之所。及二十七年縣議始請於官以辨天山為公園。併山下亭榭付屬之。地在岡山之東。國史云。

聖武天皇神龜元年幸玉津島造離宮於岡東蓋斯地也。命曰岡公園者所以用古名也。然有公園之名而未嘗有公園之實焉。去載予又欲於山巔建我縣討清軍人紀功之標。詢之一縣吏民。同聲一辭莫不贊襄者焉。於是園工又大作而公園之實始完矣。蓋山勢雖不甚高而樹木蒼然。以深導山之餘浸以為坡池。因山之凸石以為丘阜。惟要去榴翳以就修潔。不以人工而破天然。老松古柏有深山之氣。奇花異草有幽谷之美。其廣可以逍遙焉。其樂可以盤桓焉。而前臨古城則想念封建將士尙武之形况。左顧岡山則欽仰往古帝王右文之氣象。近誦紀念碑禍則知國家三百年養士之有素。則凡遊於斯園者非特花晨月夕俯仰徘徊以養生也。而其於願望之間養氣者亦不鮮焉。

和歌山縣知事從四位勳三等 冲 守固撰

明治二十九年夏

南紀公園記

信 夫 祭 撰

園有三道。由南而來者先長鉢後巖石。由東而來者先巖石後長鉢。而幽靜可掬者特在西道。入門數步夏屋渠々。曰岡東館。鄉飲酒處。右折巨巖蟠岫。然如大象伏地。艸木叢生。纒通一逕。仰見粉壁。樓屹立乎茂林叢樹中。紀之舊城也。使人發桑滄之感。左崖蔚蒼。如不可窮。行數十步。左踰坂至山巔。巖石以為基礎。建長鉢。銅質苔鋪。題曰征清紀念標。隔標又建崇碑。一品親王熾仁公書。側記西南四役事。故縣令神山某撰。簡淨可誦。園外則沃野數里。稻田麥畝。遠山吐雲。近山吸靄。蜿蜒迤邐。余企足四顧。望東京於雲際而不見。自笑類兒童。降山而南。巖石層疊如立屏障。稜角者圓滿者直方者。忽而怒猊。忽而蟠龍。忽而咆哮。使米襄陽見之。其狂顛何如也。樹皆生自石罅。倒生豎生。聳衝天者。垂曲者。葉又黃者。紅者。綠者。點綴其間。如絕好文字。絢爛動人。借無飛瀑噴水。鼓舞之者也。行數十步。巖石刻山壽仁人德水清廉士風一聯。字十寸有餘。南陽仁井田氏筆。南陽博洽能文。嘗著毛詩補傳三十卷。又刻山靜如太古。日長似少年。十字。大如拳。係伊藤蘭嶠書。蘭嶠仁齊先生第五子。筮仕本藩。子孫今猶現存。蓋南紀富於石。雖小園益庭。尙布置巨石。况此公眾所借樂。吾聞山水秀靈之氣。變為巨石。代為偉人。是以有若南龍公。有若祇南海。有若華岡青洲。莫不海內景慕焉。而今也寂然無聞者。豈山水秀氣盛於前而衰於後耶。抑人不自致也。并書問之石丈。系之以詩曰。

朝遊園暮遊園。暮烟朝靄消塵煩。雨粧淡晴粧濃。愛看石丈碧苔封。噫我愛山如愛婦。淡粧濃粧寄情厚。山亦有情紅潮頰。與為他妻為君妾。

東岡東館

は和歌山舊城の南、岡公園の中にあり、明治十三年、縣令松本
鼎氏、其他の官民有志者二百五十餘名の發起に依りて建築が成つたので
が、其位置公園の中に在りて、四面の風光好れば、春秋冬夏を論ぜず、來
り遊ぶ者が頗る多いで、此公會堂も中川審六郎外三氏の所有名義で有
たのを、二十七年に縣廳に寄附を願ひ、因りて縣會は公園の附屬とする
事に決しました、其建築壯大華麗、市中第一の大廈です。

縣社岡の宮

は岡公園の西南に當る片岡町にあり、往古は此邊を岡と云ふ、乃ち
續日本紀に、神龜元年冬十月辛卯、天皇紀伊國に幸したまふ云々、戊戌
離宮を岡の東に於て造る云々とある、其離宮の遺址で、祭神は刺田比古
の神を祀るといふ古來より傳へなれど、其神定かならず、本居宣長古事
記傳を著し、其十の卷に大屋昆古神の事を説ける條に、名草郡の刺田
比古社は、刺田大神には由なきかとの説をなせしより、今は其説に従ふ

もの多し、刺田大神は、大己貴命、五十猛命、大屋津瀬姫命、抓津姫命
などの母神、刺田若比賣の父神にて、此國にしづまりまさん理りある神
にわたらせたまふ由です、尤も延喜式神名帳にも其名を掲げられ、舊和
歌山藩有徳院殿より代々の君公の尊信も厚く、由緒ある神社です、攝社
は八幡宮本社西にあり、同氷川神社、末社は、稻荷、天満宮、辨財天
春日、神樂所は本社前にある。

向陽山松生院蘆邊寺

は、同じく片岡町にある、宗旨は古義真言、本尊不動王座像長二尺五寸
智證大師作、脇士愛染明王弘法大師作、同十一面觀世音理源大師作、抑
も當寺は元讚州八島檀浦の洲崎にあつて、仁明天皇承和九年開山、智證
大師密法修行の際、不動明王示現あつて、眞言の奥旨を授けられたので、
大師隨喜のあまり、其報恩の爲に自ら丹精を凝して此像を彫刻しました
が、大師の父宅成、喜捨の巧徳を起して本堂伽藍を造立し、其後清和天
皇貞觀七年當山を官寺に成され、元暦二年源平合戦の時兵火に罹りまし
たが、本堂は不思議に災ひを免れ、乾元元年八月當國和歌蘆邊の浦に堂

宇を移し、天正の兵亂を避けて、名草郡山東黒岩村に移りしが、領主淺野幸長公入國の日、再び現在の地に移され、其後徳川頼宣公信仰ありて祈願所となり、維新後は無祿無檀となりしも、朝廷其由緒を思召されて明治十七年保存金壹百五十拾圓を下附されました。

仙境山珊瑚寺

は和歌山市上鷹匠町にある、曹洞宗、以前は海士郡の和田村にあつて、三五寺と號したのだが、天正中に桑山法印當地に移し、中興の開祖南陽和尚に珊瑚の珠數を寄附し、珊瑚寺と名を改めたのです、此の珠數今に傳へて寺の什物としてある、此寺の鎮守信尾稻荷は、有名の流行神、安産の守札を出す、參詣人常に絶す

鷺の森御坊

此本願寺の掛所は、鷺の森堂前町にあります、境域一万三千九百九十二坪、本堂は東に向ひ、堂宇の美麗壯大、當市内に冠たるものです、本尊の阿彌陀佛(長二尺三寸、作は詳らかでありませんが、寺傳に依りますと、

の本尊、兵亂の騷擾に焼失せたるより、此御坊の



Saginomori (Buddhist temple) and Asakura Jinja (Shinto temple). Close to Wakayama-Kitaguchi Station.

其以前に安置して有る彌陀の像は、大阪石山御堂

本尊を彼所へ移し、其後は空位であつたのを、有名な門徒鈴木孫市、同國榮谷の八幡宮の祠に、古來秘めおける靈像を移したといふ事です、太子堂(聖徳太子を安置して、本堂の東にある)、對面所本堂の北にある、莊嚴願る美麗、御主殿對面所に續いて立てある、棟札に大谷本願寺末寺、賀庄宇治御坊御主殿、天正二甲戌二月廿八日、願人四方同賀、大工藤原朝頼、堺村彦右衛門尉と記してある、此御主殿造立の時、總て大阪で切組で、船で運送したといふ事、唐門(四足門で頗る壯麗)、茶所(唐門の北にある)、元禄五年島孫右衛門の寄附、鐘樓(唐門の西にある)、鼓樓(唐門の東にある)、集會所法會修行の時、僧侶の會合する所、他屋(諸國より勤番の僧の旅坊、境内に三區、外に三區ある)、抑當御坊は宗祖親上人相承第十一世顯如上人の創立、最初當國海部郡冷水浦の喜六大夫といふ名の、文明八年第八世蓮如上人に値遇して、其宗義を隨喜して徒弟となり、名を了賢と改め、己が屋舎を道場となし、其所にて上人に法を説かしめ、自畫の眞影と九字十字の尊號、及び裏書とで書添へ與へられました、是が今尙當坊に傳つてある、二尊の御影です、永正四年實如上人、此道場

を其後同郡黒江村に移し、後又天文十九年に證如上人、再び和歌彌山に移しましたが、其舊跡は今尙現存してあります、終に永祿六年二月顯如上人、此宇治郷鷺村の地に移し、天正八年大阪御堂を開院して、此御堂に移往すること凡て四年、順て當御坊より京都へ登られたのです、元和四年六月廿一日の雷火、寛文十二年十二月四日の火災等にも此坊恙なきことを經て、そのまゝ現存してあります、彼の天正十年五月十一日織田信孝丹羽長秀が二万の大敵の圍を受け、顯如上人僅少の門徒と共に必死の防戦を遂げ、たま／＼織田信長公明智光秀の爲に弑せられしを以て、必死の窮厄を免れ、鈴木孫市兄弟始め、門徒一同、歡喜のあまり跛躄をし、たのは、則ち此御坊です、世には鈴木孫市の跛躄と云ひますが、跛躄をしたのは、弟の孫六です、孫六前日の軍に勇猛なる働きして、片足を鐵砲にて打貫れましたが、信長公變死の報を得て、嬉しさのあまり、痛手をも忘れて片足をひきずりながら扇を揚げて跳りいで、あらめでたや、よろこばしや、法敵亡びて宗門の末廣がり、千秋樂と云うたひかなでたので、門徒一同之に和して踊つたのです、此時信長變死の事を注進したのは、巖に接し玉川の合戦に崩れて成てゐた、紀州藤白の門徒龜井六郎です、

創立以來一回も回祿の災ひに罹らず、殊に顯如上人此地に於て、此の必
 至の窮厄を免れて、めでたく開運ありしを以て、無雙の舊跡、南海第一
 の靈場として、門徒の尊崇するもの頗る道理あることとす、此寫眞は御
 坊よりはずかひに、朝棕神社を掛けて撮影しました。

忍冬酒

御坊を案内する序に、一寸一口申上げます、此忍冬酒は驚森御坊の裏門
 前酒屋源次郎の家に製するところ、其の味ひ甘辛相半して香氣高く、一
 種の佳品、以前は紀藩より禁裏、幕府へも献上のあつたものださうです
 北村源次郎大夫殿に一夜泊りて色々御馳走ありければ
 あひかたき忍冬酒をば猪口にうけ又は御坊の鐘もきこえつ 貞柳
 さつき十八日驚の森御坊の朝時にまゐりて
 むかし／＼すゝめは(すゝめすゝめ)が今は原文に依る)られたる驚の森
 も四方にはびこる今はどうとや 同
 手迹うちふるひ／＼も酔狂のあまりそこはかどなく口ずさみかきつ
 けはべるものならじ(貞柳享保十七年五月此家に止宿のをりからに詠せ

朝棕神社

しどころなりとて眞蹟今に傳へて此家に藏せり

は御坊北町の西にある、世に之を驚の森の神社と云ふ、祭神一座、大己
 貴命(延喜式神名帳に、朝棕神社、本國神名帳に、從四位上朝棕神社とわ
 り)、攝社一基子守神、勝手神、相殿、本社(東に立てある、寛弘年間修
 造の棟札がある)、末社一基は天照皇大神、本社(東にある、一基は八幡
 宮、一基は天満天神、金刀比羅宮、相殿、一基は中津奥神、一基は宿荷
 大明神、一基は多賀大明神、八百萬神、八雲神、相殿、御供所(本社)の西
 にある)、神樂所(本社)の前にある、廳舎舞臺共に本社(南にある)、例祭四
 時の祭あり殊に舊暦六月十五日、六月十五日は夏祭と唱へて、殊に繁昌
 を極めます、サテ、大己貴命を當社に齋き祭る其縁起を、當社の傳へに
 依て、摘要んでお話しませう、抑も大己貴命は素盞鳴命第六世の神
 孫にわたらせたまふ神代卷には稻田姫の生みたまへるやうしるしあれど、
 社傳のおもむき古事紀の傳へに能く合ふてゐます、此命の國家に大功の
 あはします事は、葦原色許男神、八千矛神、宇都志國玉神など、尊崇の

意を寓せる多くの御名を有ちたまふにても知らる、命八十神の兄達と稻
羽今の因幡國の八上媛を婚ひたまひ、則ち戀の争ひより、兄達の怒りを
受け、既に命も危くましませしを、辛くも死れて此紀の國に來り、大屋
昆古神(伊太祁曾)の神の別名に身を寄せたまふ、此縁起に因て後に祠を爰
に建て齋きまつり、朝標神社と稱へ奉つたのであり、此社を朝標と
稱ゆるは、命此地に逃れ來たまひしに、天色尙明けわたらで物の色さへ
辨へざりしゆゑ、其地を指して朝暗と號けたまひし故、今に夫を用ひて
あるとのこと、此の如く神代よりして鎮りたまふ御神なれば、上代には
朝廷の尊敬尤も篤かつたのですが、今は此邊の産土神として崇められて
おはします、本居宜長翁當社に詣で、朝標にまふで、御前に枝さし世
にことなる松のたてるを見て、「といふ端書して、左の和歌を詠れました
此松今尙繁茂して神徳と共にいや榮々に榮えてゐます。

鷺の森

宇治卿の總名ですが、土人の口碑に、大古此地に圍繞三百尋もある柵の

樹があつて、其樹の梢に白鷺が栖をして、遠くから望めば、深雪の降積
む山のやうであつたが、是が森の名の縁で起る所だといふ傳へがありま
す、前に大阪の名所を御案内する時、玉造森村森宮の名は鷺の森といふの
が正しいとまうして、日本紀の推古天皇が鷺を難波に飼はしめたとまふ
故事を引いて、其地を夫に推當、本願寺の御堂が此邊にあつたゆゑ織田信
長公と和睦して紀州難波に退去しても、尙舊名を呼んで鷺森御堂と唱え
るといふ、攝津名所圖會の説を引いてまきました、鷺の森の名はその
以前より紀州に在たとすると、名所圖會の説は誤りのやうですから、序
に一言のへおきます。

水門吹上神社

は小野町にあり、水門は、祭神御見蛭子、吹上は祭神大己貴命なり一門
の中に兩社並び立ちたり水門の神大古は和田鶴の島に祀られ、中古は吹
上の神と同じ所に祀られました、慶長年間兩社共に此地に遷座成た
のです、此神福神とて諸人の信仰厚く、小野町の蛭子々々とのみ唱へ
て、遂に本社の名を云ふものが少くなりました、祭禮は毎歳一月の十日

九月十八日の秋祭りにては餅投げの式がある。十一



Fukiage Jinja (Shinto temple), Wakayama. About one mile from Wakayama-Kitaguchi Station.

の秋祭りを始め、六月十八日舊六月廿三日の夏祭事。

和歌山縣北山町車場三十一丁ノ社

月二十三日の火焚祭り、孰も非常の賑ひと極めます。未社は祇園午頭天王、住吉大明神、出雲神、子守神、勝手神、伊勢兩皇太神、少彦名神、諏訪明神、紀船守神、以上相殿、本社、東にある、八幡宮社、熊野神社、稻荷三社、天満宮、籠山社相殿、鎮守社(祭神不詳)、舞臺、御神樂舎共に神前に在る、雄の芝其來由は左の李梅溪の碑文に見ゆ、梅溪の父眞榮は朝鮮の歸化人、梅溪は父眞榮が當國にて娶れる妻の生める所であります。

雄芝碑銘

海部郡宇治港、昔建顯國社合祭蛭見神余生此郷嘗聞此地蓋五瀬命雄詔而薨之處因名男之芝志波俗用芝字社邊開阡陌也名曰雄之町今爲小野案古事記神武帝南方廻幸到紀國男之水門而詔負賤奴之手乎死爲男建而崩故號其水門謂男水門也陵即在紀國之籠山也校之日本紀大同小異也今以古事記爲據遂告祠官邑長別立一區封上蕃艸石以局焉余故勒片石以壽于無疆

寛文九己酉歲六月二十二日

梅溪李全直建之并書

男水門

此港は古の男の水門であつて、日本紀古事記に見ゆる、神武天皇東征の日兄五瀬命、長髓彦の矢に中り、男詰りして崩りたまひし、城の水門、山の井の水門は即ち此所なりといふ、案内者は巖に和泉の男の水門の所で、五瀬命の崩りたまひしは、同所ならんとの説に従ひたれど、考の爲め此一説をも申してねきます、當市の歌人古屋菅賢翁の、小野港江の歌を得たれば、端書と共に左に掲げます、翁は本年八十一の高齡ですが、其妻あや女は本年六十九、共に今尙壯健でせらるゝとは誠にめでたく羨しい人々です

小野港江

八十一翁 古屋管賢

朝もよし此木の國小野港江は掛まくも恐き大和の國畝火の山に神つまらます皇大神の兄み彦五瀬の大神の東ンがしの御軍にいたぐしに腦ませたまひ泉の國ちぬの海より是の小野港江に御船をよせ雄たけびさりましし地なりとて宮柱ふとしきたて御跡をしも殘こし伊達社の大神と尊稱し奉り御かくし所は是より東なる籠山といふに御陵を嚴かになし奉りたり春の頃此港江を見めぐりていにしゆよしといひて吉野よ

く見しみよし野の山高く瀧の川内よりれたきち瀬早く二十里あまりを經これの小野港江に流れ來て海にいはれ春ことには若船の水さして登るだにめてたきに絶ゆることなく杉の大木を筏に造りいやつきくにし下すこそあさもよしこの木の國の幸なりけれ
雄たけびし小野港江の春かすみたつやいふせき余波ならまし
大かたの春をあつめて港江にくだすよし野の花いかだかな
けふはしも吉野の花を見てやこん船よりさきに川のぼりして

志摩神社

は中の島にある、此邊の生出神で、例祭は舊六月十五日、夏祭、舊九月廿九日は秋祭、十一月十二日を火焚き祭りといふ、祭神一坐、中津島姫命(又の名市杵島姫命)延喜式神名帳に、志摩神社、本國神名帳に、正一位志摩神とある、續日本後紀に仁明帝承和十一年己酉十一月朔辛亥、紀伊國從五位下志摩神に正五位下を授け奉る、文徳實錄に、嘉承二年十月乙丑志摩神に從四位を加ふ、三代實錄に、貞觀元年甲子年正月二十七日、從四位下志摩神に正四位を加ふ、三十七乙未年七月十七日從三位を授け奉る、同十七乙未年七月十七日從三位を授け奉る、

け奉る云々とあり、相殿大己貴命、少彦名命、火焚神、攝社(藏)王權現、祇園社、當社の創立は太古にして今は分りませんが、中古明德四年正月足利三代將軍義滿、社殿の荒廢を嘆いて再興の命を下し、應永より天文の間に造營全く落成、輪奐壯嚴頗る神威を添へました、天正十三年三月より四月に至る、此地維賀一揆のため戦場となり、本社末社共に兵火に罹り、今の社殿は當時の五が一にも當らないそうです。

松龍山光明院普門寺

は有田屋町にある、土人上の觀音といふ、宗旨は古義真言、本尊聖觀世音弘法大師作、大師堂大師の像作者不詳、阿彌陀堂、地藏堂、鎮守社阿伽石、觀喜天社など境内にある、當寺で尤も名高いのは連理の松是は南龍公御殿の御庭前の松を移したといふ傳へ、高さ十丈、株の廻り四間、枝東西二十五間、南北十五間に伸び、實に當市屈指の名木です。

吹上

是は紀州で名高い名所で、古歌にも夥多詠んでございしますが、今は和歌

山城の西南をさして云ふにどいまり、判然とした場所はありません、砂山といふ小さな岡があります、是も遺迹の一つだといふことです、此吹上の濱といふは、西南の風の烈しく吹く時は、白砂を高く吹上げて、一夜の程に一所に吹あつて山を爲し、又暫時が程に吹散らして元の平地となる、乃ら常に風が真砂を吹上げるに依て、吹上の濱といふ、此地は昔より月の名所に敷へられ、清少納言の枕草紙にも、濱は吹上としるされ、宇都保物語(吹上の巻)、西行の山家集などにも見えたれど、桑田變心て海となるの習ひ、今は其餘さへもありません、吹上の小野、吹井の浦など皆同じ所です。

吹上神社壇

和歌の浦へ行く往還大嶋某の屋敷の庭に古松があつて、之を社地の印だといふ説がある。

吹上の白菊

一説に仁徳帝熊野行幸の時、此吹上に皇船をどめさせたまふれりから、

新羅國より五色の菊を献じ、其中の白菊を此濱に栽させたまふとありま
すが、其名のみあつて、其實は確かでありません、左に吹上、吹井、吹
上の白菊を詠める古歌數首を掲げて、諸君のお慰みに供へます

後拾 懐圓法師

新勅 前參議教長

續後 藤原基綱

南五 源資氏

雪玉 正徹

家集 藤原清正

夫木 寂蓮

夫木 讀人志らず

古今 菅原朝臣

雪玉 實隆

其他は畧します。 古屋菅賢

善曜山蓮心寺

は吹上寺町の南角にある、宗旨は法華、本堂(南龍公造營)、祖師堂(日蓮上人の像を安ず、日法上人作)、釋迦堂(本尊釋迦佛、行基作)、黒書院(こゝに安ずる鬼子母神は傳教大師の作)、其他鐘樓堂、位牌堂、子院などある、當寺の林泉は奇樹多く、風景美はしく、春は櫻花幽艶の色を呈して句ひ

濃やかに、夏は庭中の池の面に水草さきみだれ、秋は松林の月皎々とし
て、他にすぐれて明らか、冬は又雪の日の眺望もまろく、四季とも
に庭園の風光にとめるを以て世にその名高く聞えてゐます。

増上山仙境院護念寺

は是も吹上寺町の北側にある、宗旨は浄土、當寺は本尊の阿彌陀佛、脇
士の觀音、勢至の三尊に依て世に名高うございませすが、共に樞院惠信
僧都の作です、當寺は釋雲山意春和尚永正五年の開基、始めは常福寺と
號し、宇治郷の前島にありましたが、後松屋町に移り、和歌山城鬼門の
護衛として、名を護念寺と改め、慶長年中に廣瀬町に轉じ、寛永十七年藩
主の命に依て仙境山の麓の地に移つて、今の輪奐の美をなしたのです、
什物の二十五菩薩、源信僧都の筆、蜀江錦の五條の袈裟は、東照神君の
遺物、共に有名です。

今福神明社

は新堀の西の町にある、此邊の生士神にして二社並び立ちたり、其一社

は天照皇太神宮、攝社住吉、春日、八幡、大國玉命、猿田彦神、事代主
神、倉稻魂神等の諸神、其一社は豊受皇太神、相殿月讀尊、稚日尊、左
座一國一宮の神達六十四座、右座初源檀三十二神、萬寶檀三十二神、都
合六十四座、是を前後の俱奉神といふ、別宮末社秋葉、天満宮、金刀比
羅、富士淺間、祓殿等の諸神、袖摺松鳥居のもとにある、土人業平袖摺
松といふ、其由縁は分りませせんが、枝葉四方に垂れて、如何にも數百歳
を経ぬらんと覺しく、其姿蟠龍の如く、普門寺の連理の松と覇を争ふ名
松です。

寶壽山光明寺

は鹽屋村にある、宗旨禪宗黃檗派、本尊千手觀世音座像長一尺二寸五
分、昆首羯摩作、惣門、佛殿、方丈、開山堂、庫裡、浴室、齋堂等に至
るまで、額、聯、も、獨漉、悅峰、圓通、悅山、心越、高泉等、黃檗諸
高僧の筆、字々筆々、妙を究め神に入らざるなく、龍驅り虎跳り、一見
人をして快哉を叫はしむ、諸堂の建築も明の遺風を存して面白く、雅
士の一遊を試むべき道場です、開基は圓通禪師、元祿七年の造建、禪師

の傳は貴い節がありすから、つひでに話いたしませう、禪師は黄葉
獨湛和尚の上足、始め書を北山の碧岩寺に讀み、尋いて和佐の茲光精舎
に潜れ、専ら禪理を工夫し、一旦大高氏の家で、忽ち心華煥發し源底に
洞徹し、大晤を得ると同時に、乃ち三つの大誓願を發しました、一は闕
外に出でること五年、一は諸國を偏歴すること十年、一は一切藏經を閱
すること十年、こゝに於いて居を南嶽禪林寺に移して、將に此願ひを満
んとするありから、南龍公より召れまされたが、左の一句の偈
僧窓深鎖謝寅緣不測卑名到貴筵清代只今湖海靜莫驚野水白鷗眠
を口占して之を謝し、三大誓の願ひを滿て、當寺を建立の後、元録十五
年秋閏八月、亞相光貞卿の命に依て、城中に往て陞坐問答をされました
詳しくは圓通語録について御覽あれ、祇南海が禪師か贈つた詩があります
から、つひでに目にかけます

秋日過光明寺贈普白和尚
三十年前曾識君不圖今復挹清芳機鋒灑水千江月瓶鉢歸山一馬雲霜葉時
兼巢鳥下煙鐘晚帶木魚聞自羞宦海頭都白何日青山謝世氛

白雲山報恩寺

は吹上仙境山の西南にある、法華宗無本寺、本堂本尊多寶首題釋迦、脇
土上行四菩薩、及び四天王、脇檀左方高祖日蓮大菩薩、衣子長三尺、
作不詳、寛文十一年九月草創の時之を安ず、同右方、瑤林院殿尊牌、
御靈屋位牌堂、鎮守三十番神祠、鐘樓堂以上本堂の西南にある、祖廟
并歴祖廟共に本堂の南にある、瑤林院殿御廟中門の正面にある、御成御
門是は則ち表門のこと、寺町通り下馬石の西にある、當山の起立結構を
たづねるに、紀藩の初祖南龍公夫人瑤林院殿寛文六年正月廿四日、江戸
に於て掩粧ありたるを以て、遺骨を奉じて當城の南吹上要行寺に納め
したが、二代光貞卿母公追福の爲め、幕府に請ふて要行寺の地を收め、
新に當寺を創建し、瑤林院殿の菩提所となし、經宗の碩徳日順上人を撰
んで開山導師を命じ、永世無本寺當國第一の大刹と定め、寺領若干を寄
せられたのです、かゝる由緒の寺ゆゑ什寶も澤山ありますが、其中の二
三を申し上げませう、高祖の消息四幅、日親上人本尊重朝遠三幅對曼陀羅
大小二本、吉宗公自筆和歌、光貞卿自筆提婆品并に畫、宗直卿自筆法華

經、養珠院殿消息、瑤林院殿詩歌、開山紺紙金泥大本尊并に歷祖本尊、古哲本尊數幅、大涅槃像巾壹尺三寸、長二丈八尺狩野興益筆、表裝古錦、瀨、藩侯寄附、日蓮大士作大黒天神、赤柳檀立像釋迦作不詳、弘法大師墨跡、陳子昂墨跡、其他書畫は枚舉に遑わらずです。

妙見山圓如寺

は同所にありまして、報恩寺の附屬です、本堂三寶諸尊、祖師大菩薩、鬼子母神、十羅刹女、を安置してある、作者不詳、妙見堂妙見大士を安置してあるが、其長三寸五分、軀に金甲を穿ち、双手神劍を杖き、兩足龜蛇を踏みたる尊容、靈佛の名が高い、傳教大師作の鬼子母神と、白檀の像、長五尺世に朝日の高祖と云ふて、信仰が厚い、日朗菩薩、長二尺六寸、日朝上人、尺八寸五分と共に安置してある、當寺は紀藩四代の君公頼職卿の母君、眞如院殿の御殿をそのまゝ移して造營したのですから結構な建築です。

當住山感應寺

は原見坂の南にある、宗旨は法華、本堂紀藩の初祖南龍公の造營、東照宮の神主が安置してある、又高祖日蓮大士の金骨寶塔が安置してある、鎮守七面大明神祠本堂の南にある、三十番神祠(東の山にある、南龍公の母公養珠尼公の造立)、鐘樓西山にある、此鐘は是又養珠尼公が、加藤清正十七回忌追福の爲め鑄たもの、經藏東漸庫の額は僧撰堂の筆、千佛閣安ずる所の像は、中正日護の作、本地院殿寢廟(後ろの山にある)、位牌堂(本尊立像の釋迦佛は惠心僧都の作、丈三尺餘、當寺は紀藩の始祖南龍公入國の翌年、日陽上人に命じて草創せしめし靈刹、日本三感の一つ、始めは城の東大橋の良新通一町目にありしが、其翌年養珠尼公今の地を相して再び之を移し、莊嚴美麗の一大刹となしたのです。

雜賀川

は又の名を和歌川とも漢層川とも云ふ、吉野川の下流であつて、西するを宇治川と云ひ、南に分るゝを雜賀川といふ、前に海灣を抱擁へ、遠近に神社佛閣を望み、咫尺に長汀曲浦を眺め、内外の海上に白帆常に浮び、其風光さながら繪の如く、此川尤も船遊びに宜しく、夏の夕の涼みは益

景ノ寺井三紀 丁八十二里一リヨ場車停口北山歌和



Kiimidera (Buddhist temple). About four miles from wakayama-Kitaguchi Station.

僧正の作、當國三十三所の一、

常行念佛堂石階の登り口にある、四時鉦

腹にある、宗旨は古義真言、西國第二番の札所、和歌山市を距ること一

里二十五町、本尊十一面觀世音開山
爲光上人一刀三禮の作、秘龕千手觀
世音爲光上人千手谷にて感得の靈像、
開山堂本堂の上にある、開山爲光上
人自作の木像が安置してある、二重
塔開山堂の南にある、本尊五智如來
長一尺五寸、作不詳、鎮守祠白山、
熊野、藏王の三神を安ず、二重塔の
隣り、經塚同所にある、爲光上人
般若經六百卷を書寫して納めてある、
札納堂本堂の前にある、西國三十三
所の觀世音を安ず、鐘樓堂名高き古
鐘は今紛失して所在を知らず、借い
かな、大師堂弘法大師を安ず、尊容

を狩るべく、秋の月は生石峙より出て波に映じ、銀色三千界の景色あり
又釣船、網船、鵜狩船など、とりくりに遊客の好みに應ずれば、川狩又
は翫水の人四季に絶せず、詩客歌人の吟咏も澤山あります

水畔樓臺映落霞 石欄人影過橋斜
伽羅山上塵纖雨 飛濕仙娥廟裡花

和歌の浦や入江の蘆のかりそめに見てやかへらし波の上の月
菊池溪琴

蛤も拾ふてくるやしとみかき

素雄 古屋あや女

鹽竈

は三葛を重にし、紀三井寺、和歌等の名産、他所に比類なきまで其味ひ
佳好、味噌醬油を作るに用ひて尤も可ろし。

紀三井寺

は、紀三井山護國院金剛寶寺が本名で、紀三井寺は通稱——名草山の半

の聲が断ない、三瀑布(南にある)は楊柳水、本堂より少し下、南二町餘の所に、楊柳觀音の御手より涌出してゐる、中を清淨水といふ、表門の阪の傍にある、胡瓶觀音の御手より涌出する、北を吉祥水といふ、本堂の北三町にある、大士の徒衆吉祥天女の管るところ、二王門兩脇金剛力士、大佛師法印運慶の作、禁殺生碑石(二王門の下にある)、書は李梅溪筆法、勇勁見るに足る、應同樹本坊の境内にある、開山爲光上人の遺物、四季に落葉せず、花無くして實を結び、他に移せばつかぬといふ(一珍木)、本坊護國院(内佛本尊不動明王、弘法大師作)、書院庫裡等は、桑山果報院の建立の額がある、又淺野左京大夫再興の額がある、本堂は建立以來凡そ三百年、山門は四百年、此寺にて建築の尤も見る可きは山門です、佛像は本尊の觀音大士と、本坊の本尊、不動明王、殊に案内者をして感嘆せしめたるは、運慶作の二王尊、その勇壯偉大、優に鎌倉美術の真相を伺ふに足る、塔中が澤山あるが、夫は畧します、其他の古迹は千手谷本堂の良の方五町の所にある、爲光上人觀音の像を感得した所、龍燈の松(千手谷の中程にある、例年陰曆七月九日、龍燈が上るとして、今尚諸人當寺に群集す、此夜を千日参りといふ)、當寺の開山爲光上人は、唐の代宗の

時の人、吾邦光仁天皇の御宇寶龜元年に來朝し、普く海内の靈區を探り、遂に此地を相して一大刹を建立し、白衣大士の靈場として今に傳ふ、當山の勝景、和歌吹上の全景を一眸に收め、和歌山城の天守、鹽竈、農家田圃市街、あらゆる風光を弄ぶことを得るのみか、遠く淡路島、苦嶋、阿波の鳴戸をも望まれて、實に南海第一の壯觀、殊に本坊の書院より望めば、和歌の浦、手に探る如く、多くの名所一々に數へられ、この浦の景色は、此寺に登りて始めて其勝れたるを知るを得ると云ふも妄言ではありませぬ、かゝる勝景の地ですから、古人の吟咏もかず、こゝにま

遊紀三井山

祇南海

天下三十三福地。此山亦是古靈場。潮音和梵遊洋濶。林樹起洞花雨香。昌國一燈傳聖德。翠屏三井讓清涼。威神巍々金剛窟。幸闡光明秘密藏。見あぐればさくらしまふて紀三井寺。素はせを。鳥啼くや沖のけしきもさくら時。

當寺の縁日は、陰曆正月三ヶ日及び十八日、同三月十八日、同七月九日、十日、和歌山市始め各地方より參詣群集して、非常の雜踏を極む、當寺の寫眞は本堂の正面より探影しました。

宗祇阪

は當山の裏阪 紀三井山下空大にやすらへば宗祇の故事ねむごろにおしゆ 宗祇にもめぐり逢けり遅ざくら はせを

名草山

は紀三井山の物名 萬葉 名草山事西在來吾戀千重一重名草 目名國 無名 風雅 名草山とるやさかきのつきもせず神わざしげき 紀俊夫 ひのくるまの宮

名草の濱

は布引村より毛見の浦までを云ふ、名草の浦も同じところなり

夫木 はかなくやけふの子の日をすぐさまし名草の

濱に松なかりせば 清 正

柴 しられてのかひや名草の浦にほすみるめを 順徳院 よその袖にかけつゝ

布引の松

は布引村にある、羅山文集にも其名見ゆ

うちいでし玉津島より詠ればみどり立そふゆのびきの松 豊臣秀吉

濱の宮

は毛見村にある、當村の産土神、例祭は陰曆九月廿三日、祭神二座、一

殿天照大神、一殿日前國懸宮、攝社中言神、(此神を地主の神と云ふ)、末社天満天神、蛭子神、神樂舎本社、北にある、御腰懸石玉垣の内小祠に、いつきまつれり、天照大神の御舎の下にありし石なるゆゑ、此名がある、此名草の濱の宮は、上古崇神天皇の御世に、天照大神の御靈を大和の笠縫邑に齋祭りしが、尙も其宮の好らん地を求めたまはんとて、豊鋤入姫命に命せて、國々を見めぐらしめたまひしに、同じ御世の五十一年四月八日、遂に此濱の宮に遷坐し、三年の間鎮座りまされし後、紀の國造御田をすゝめまゐらせしゆゑ、今に於て國造家の所務に歸したのです、又日前國懸の大神——此兩神の事は名草郡大宮村日前、國懸兩宮の所で詳しく述べます——は始め當國加太浦より木の本を経て、琴浦なる岩根に之を齋祭りてありましたが、其後豊鋤入姫命が天照大神の御靈を奉じて、こゝに至りたまふ時に同じく此地に移りたまふたのです、其後天照大神は吉備の名方濱宮に移りたまはるに、兩大神は尙も此地に止り、終に龜仁天皇十六年秋月村なる今の万代の宮に移りたまふたのです、かゝる由緒ある神社ゆゑ、古昔は社頭も嚴麗に在りましたが、天正の亂に鳥有りに歸しました、然れどおぼろげならぬ大御神の迹といめたまへる所な

れば、森の木立ものふり、砌の巖苔蒸して、其神ふりたる体裁の見たるに、茅茨きらざる宮居の簷は、薄朴の昔しのばしく、尊くもかしこくもそいろに感情を催されます。

琴の浦

は毛見崎より舟尾の境までを云ふ、此地の砂石のこらず紫白にして他の色なく、こゝを歩めば波の音と松の風と自然と琴の音があるので此名がある、妻白蟹はこの邊の名物です。

新勅 春風に浪のしらぶる琴の浦かもめのあそぶところなりけり 仲 正

琴浦松縁

繫松千古縁參雲。浦得松風琴自聞。波底華鯨何處吼。無人試問洞庭名。是より徐々名高い和歌の浦を御案内いたします。

古屋菅賢 廬 南 海

和歌山歌山根上リ松ノ景
和歌山北口停車場一里十丁



根上り松

數十株あつたさうですが、今は僅に一二株を剩せるのみです、

Neagari Matsu (Pine tree). About three miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

後、のり松名が、相松、龜松、鶴松、現根、昔は、邊、町、郊、山、は、七、の、和、八、南、歌、

の爲に寫眞に撮影しておきました、和歌山城のあたりより此までを吹上といふ、今に一帶の砂地です。

愛宕山

は圓珠院瑞光寺と云ふ、和歌街道の松原の東にある、宗旨は天台、愛宕権現が山上に安置してある、防火の靈験ありとて、参詣の人多く、毎年陰曆六月廿四日は千日祭りとして殊に繁昌、山上の風景、西は蒼海漫々として阿土の二國眉の如く、眼下には吹上の浦、沖に釣する海士小船、汀に貝拾ふ賤の子まで一々見へ渡り、藤白の御阪、名草山、三葛の藻鹽焼く煙まで手に取る如く望まれます、今は山下に移して寺門の内左方にあります。

彌勒寺山

は愛宕山の南につづく峰を云ふ、林麓山彌勒寺の迹といふ説があるが定かでありませぬ、愛宕と共に絶景の地です。

狢口石

は同じ街道の彌勒寺山を離れた所にある、其形が狢の吼るに似てゐるので此名がある、題字は李梅溪の筆

雜賀崎

此地は漁業者の多く住める所、西南の方に鷹の巢といふ所がある、千尋の巖壁高く聳れて、下は不測の海に臨み、其峻嶮譬ふるに物もなく、海中より大小の石が抽んでゐますが、各々形容に依て名が設けてある、真南の方は煙波渺々目眩の窮る處、水天相接するばかり、初秋の頃よりいつも好事の風客こゝに釣をたれ、半日の閑をなぐさめる者が多いさうです。

鷹巢巖

は絶壁に依て隼鷹が巢を組むゆゑ、此名があるのです、其所に洞があつて教如が窟といふ、是は顯如上人大阪退去の後、新門主教如上人、尙大

阪に止まつていたゆゑ、信長の嫌疑を受け、嚴しく討手をかけられ、當地に來つて此洞に身をひそめた事があるゆゑだといふ、教如上人が此洞に忍ぶを聞いて、顯如上人が驚の森に身をひそめたる親鳥は鷹の巢にすむ子さへあそろしと詠れたといふ話もある。

矢の宮

は關戸村にある、雜賀莊二十一箇村の産土神、祭神一座武角身命、末社(住吉、春日、金刀比羅、兩宮、稻荷、拜殿(本社)の前にある)、駒留の松(さながら龍の蟠る如く、馬場一盃を蓋覆へり)、反鼻除の神札(神主の家より出す)、祭典は陰曆三月三日。

五百羅漢寺

は和歌津也村北三町にある、禪宗曹洞派、佛殿に釋迦を中央に安じ、其左右に五百羅漢を排置す、其像奇古です。

秋葉社

は羅漢寺の上の山にある、社傍に觀音堂、繪馬樓あり、防火の神として諸人の信仰厚く、風景好し。

龜遊巖

秋葉の鳥居の傍にある、形に依て名を設けたのです、李梅溪石上に三字を題せり。

鶴立島

羅漢寺の門前を云ふ。

蘆邊寺舊跡

鶴立島の邊と云ふ、法師谷、小町峯等の名所、此等の後ろにある。

宗祇の松 宗祇の瀬

松は甲崎の川端にある、瀬は宗祇吉原村に閑居して、王津島社へ百日參詣する際、干潮の時に歩行渡したところ、呼できすごわたしといふ祇子來渡の訛なり。

蘆邊

は和歌村の北の入口をすべて云ふ、昔は一面に入江の干潟であつて、蘆が生茂つてゐたのです、想ふに鶴立島より玉津島の邊までを指して云つたのでせう。

片葉の蘆

は和歌津也村の北の入口にある、是も蘆邊の遺跡、併し水の流れと風の吹き方に依て、蘆の葉の片葉になるのは、取てこゝには限りません。

蘆邊團扇

は同所の名物の一つ、柄は蘆を用ひ、五色の紙にて張る、華奢風流、愛す可し、併し、今では市中で製するものゝ方が世に廣まつてゐます。

雜賀の城跡

養珠寺山の尾崎を云ふ、鈴木氏代々の住居、昔は東の方に武家屋敷があつて、西は矢の宮のまへ、南北六七町は、市店が建ちあつたといふ。

和歌の入江

此邊の總名

妹背山養珠寺

は、同處にある、本堂(本堂三寶の靈像、高祖大士、養珠院殿の位牌が安置してある)、二天(持國、多聞、行基の作)、大黒天(日蓮作)、一切經藏(舊藩主頼職卿母君眞如院殿寄附)、持佛堂(此堂は養珠院殿の持佛堂、駿州より引移せしもの、本尊釋迦日護作)、書院(養珠院殿駿州におゐての御殿、乃ち臨終の時の居間、今虎の間といふ、書は土佐家の筆、吉野山の一景を移し、莊嚴頗る美麗)、林泉(南龍公の命に依つて作るもの、春は垂絲櫻幽艶

の色を呈し、夏は池中の杜若目もあやに咲みだれ、秋は千草の匂ひ濃やかに、冬は雪の詠め面白く、風人騷士往來常に絶す、思齊井泉(庭前にある、代々の藩主、此井の水を汲で養珠院殿の位牌に供ふ、銘は詩經の語に因る、妙見堂境内の後の山にある、本尊の妙見は南龍公の守本尊)、牛角石(養珠院殿の廟を、甲州本遠寺に築く時、岩を穿つて得たる美玉、常山の名物)、常寺は承應三年の造營、養珠院殿住居の御殿を、駿州より引移して造營したれば、其結構輪奐の美を極め、林泉幽邃の致を盡してある、今は廢して其跡に小さき一字を建たり。

蘆邊茶屋

昔は蘆邊屋、朝日屋の二亭ありて、萱葺の屋根に暖簾を垂れたるものなりしか、今は蘆邊屋の方は、巍然たる高樓となりて料理を専らにし、蘆邊の汐湯とて、海水を湧して來客の便に供ふ、朝日屋の方は、あしべ屋の別宅として、平屋にて面白き庭を構へ、昔の蘆邊茶屋の面影が殘してある、世と共に變遷するはすべての習慣なれば、實によんどころなき事と云へ、和歌の浦の風景の爲より云へば、此茶亭は昔の姿のまゝにして

あきたく思ふ、紀三井寺より見れば、殊に其感じが多い、半時庵淡々が「わかあし邊の茶やにて」と云ふ端書をして、「こなし歌ちるしほの花しほれ菱」といふ句があるが、昔の風流の様が想ひられる。

蘆邊亭欄目 石橋雲來

風帆收盡鳥飛還。名草山頭夕日閑。煙靄不理三井寺。塔尖倒蘸碧波間。

三斷橋

是は杭州西湖の六橋の面影があつて、結構頗る面白く、當時の建築としては手際なものです、此邊風光も佳絶で、何となく漢詩思の動くところ

郭公山

今は妹脊山といふ、併し昔の名に因んで、今も古人に都の痴漢と云はれた風流連中が、夏の始めには耳を聳て聞に行くところ。

經王堂

は三斷橋の東詰にある、碑石に梵語が彫てある、日護上人の筆。

多寶塔

は妹脊山にある、本尊の釋迦、阿難、加葉の三尊は、加藤清正朝鮮征伐の時の戦利品、且本尊の軀内に養珠尼公の靈骨を納む、唐門、瑞門、自然石階段、拜殿等がある、當山の寶塔は慶安二年日護僧都の開基、東照宮三十三回の追福の爲、幾許の小石に法華の題目を書寫せるを、太上皇の敕聞に達し、其信心を敕感のあまり、御震翰の題目を染させ、并びに公卿百官の所書題目石を贈らせられ、なほ又諸國より集來の題目石部數二十一万を乃ち寶塔の下に收められ、本藩の儒官奈波道圓、長田道慶、當山三世通玄院日演上人等に命じて、妹脊山の記を作らせられた、此寶塔建立の時、竹本丹後といふ人、海濱で一ツの奇石を得、人夫を集めて是を曳けども動かさず、其傍に同形の石がある、土人之を夫婦石といふ、若然ういふ事もあらうかと、双石を一度に曳せると、安々と曳得しゆゑ、衆人奇異の思ひをしました、依て雄石に御法號を刻んで、寶塔に安置し、雌石に妙法蓮華經の梵語を刻んで、山下に建てこの雄雌の石に

依つて名を妹脊山と改めたので、其以前は前にも述べた通り、郭公山と云つたのです、此山の全体を申せば、下に三斷橋を渡し、山の廻りは石を疊んで平地になし、山上には寶塔高く聳々、石段を下れば水樓がある、南は名におふ和歌の浦、東西は名草山、山水絶妙言語に絶た眺めです、祇南海が「地上何處無好山不如江南山水美山秀水明綵雲裏云々」と賞賛したのも、決して溢美ではありませぬ。

妹脊海苔

又の名を和歌海苔ともいふ、此邊の磯でとれるので、名物の一つです。

海苔舗

石橋雲來

何物奇香撲鼻來。春風戸々午簾開。明光浦似紫芝浦。有女如雲賣海苔。

窟の祠

は上古玉津島の神、祭禮の時神幸ありし御旅所の迹

興洗岩

堺市名產煙草庵刀

各國博覽會優等賞牌受領



一弊家製造煙草庵刀各地方ニテ切味無比高評ヲ得々切
一弊家製造紙裁庵刀切味ハ飽迄保證仕候也

葺庵刀製造業

葺庵刀販賣問屋

大坂府下堺市綾之町西壹丁

商號

石割作左衛門



製造所
販賣所

長 淺 香 長 藏

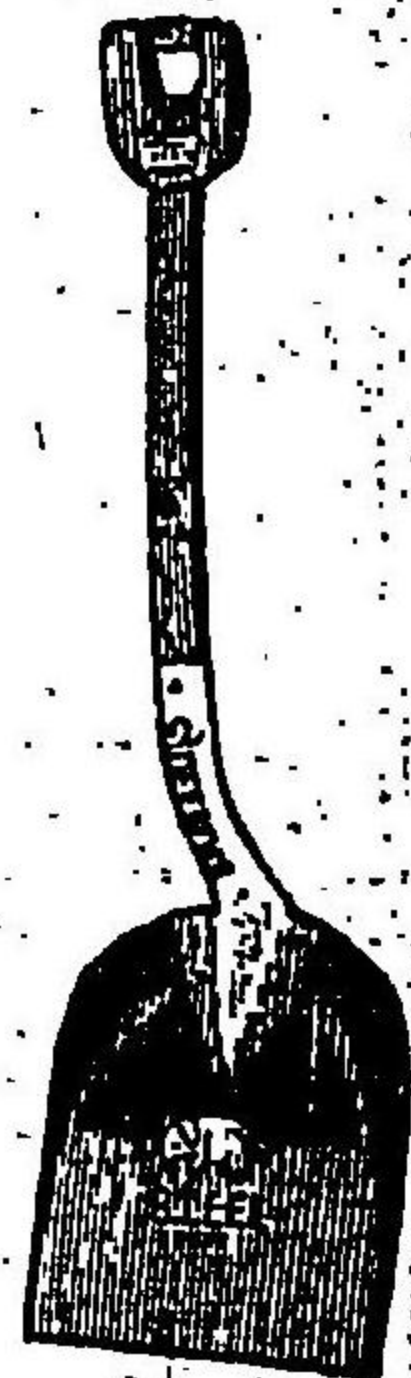
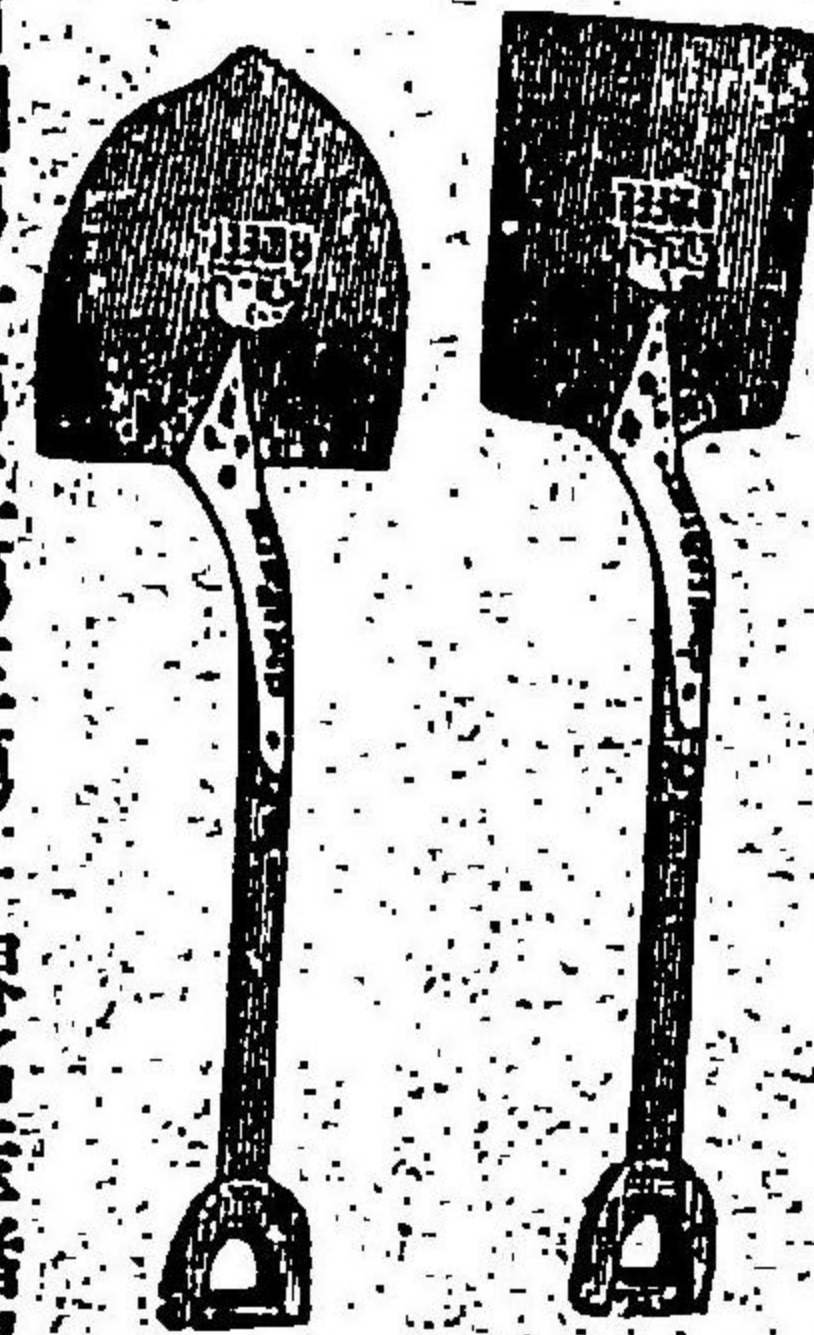
度器製作修覆
鑄物 鍋釜製造
鐵板 鍋釜製造

大阪府堺市錦之町

石炭用スコップ類正鋼製 其他各種



土方用シヤ
ブル類正鋼
製其他各種



内國第一第二第三
四博覽會有功進歩賞
牌及各地品評會ニ
於テ賞狀ヲ賜フ

堺名産諸凡物舶來模
造品鐵道鑛山要品ス
コップシヤブル及土
方用品製造販賣商



浅 香 本 店
大阪府堺市綾之町
電話百五十三番

弊工場ニ製スル
最改良
特有製
品ニシテ
質無比
廉ナルハ
特色
誓御可申候
リ定御細三依
間象印ニ御注
乞象印ニ御注

下巻中表二〇

貯蓄預金

(利息百圓 = 日付壹錢六厘五毛)

大坂市東區伏見町三丁目
(電話東五七七貳番)

大阪貯蓄銀行

(存款中表四)

一 貸付金
 貸付金及手形割引
 担保品ハ確實ナル價
 証券倉庫會社ノ預券等
 又商業手形ノ割引ハ精
 々相勵キ可成低廉ノ歩
 合ニテ御相談可致候

頭取 鴻池善右衛門
 副頭取 外山善備
 取締役 平瀬龜之助
 山崎吉郎
 平井安三
 越前直三
 矢野嘉七

(電 話) 大坂市南區太左衛門橋筋八幡筋角
 南 出 張 所

京 都 支 店
 京都市下京區鞍馬町通四條上ル

(電 話) 全市西區岡屋橋筋新町南入
 西 出 張 所

西 陣 出 張 所
 全市上京區大宮通今出川角

(電 話) 全市北區天神橋北詰貳丁北ノ辻角
 北 出 張 所

松 原 出 張 所
 全市下京區東洞院通松原角

(電 話) 全市西區本町三番町妙見前角
 本 田 出 張 所

口述

各位益々御安康奉賀候儀、當院御引立之御餘光ヲ蒙リ日々隆盛ニ赴候段奉
鳴謝候儀、尚一層御進仕會席御膳并ニ宿泊共左之直段ニ改正仕御便利ヲ專
一ニ仕候間、舊ニ倍ノ陸續御來車奉願上候敬具

改正直段表

會席御膳	金五拾錢
並御膳	金廿五錢
辨當膳	金廿錢
宿泊料	金七拾錢
御滞在	金八拾錢
御滞在	金壹圓
御滞在	金七圓
御滞在	金五圓五拾錢
御滞在	金四圓
御滞在	金三圓
御滞在	金二圓
御滞在	金一圓

潮湯并ニ割烹御旅館

濱院
海濱院

其他鮮魚割烹御好應調進

濱院
公園地

芳 香 醇 良

釀 造 發 賣 元

大 阪 府 堺 市

大 塚 和 三 郎



BEST JAPANESE

賞 牌

受 領

宮 內 省

御 用 酒

KINRO

金 露 印 改 良 日 本 酒



各 國

大 博 覽 會

(下卷中第六)

春駒印寒吟造
酒本日

SAKKE
HARUKOMA

BREWED FROM RICE.

品用御省内宮

TRADE MARK

標商録登



元賞競造釀

市親府阪大

社 會 名 合 井 鳥

番拾界 號番話電 シンカイリ 報略報電

TORIIGONEIKWAISHA

TORII & BROTHER'S SAKE BREWING CO.

SAKAI NEAR OSAKA JAPAN

廣

注

英社釀酒を米佛西の諸外國に於ける萬國大博覽
會を始め内國勸業博覽會共進會等へ出品し其審
査せらるゝ也毎小優等の地位を占め名譽ある褒
賞を受くる事殆んど二十四蓋し酒質の精醇なる
と嗜好諸君の眷顧と相待て得たる結果なれば蓋
醸製の改善を怠らざる此茶譽小背かざらん事
を期せしむ信篤の御愛顧何らざる事

醸造發賣元

大阪府堺市甲斐町西二丁

鳥井合名會社

(電話堺十番)

吟造日本酒



大日本酒造會社

(下卷中板十)

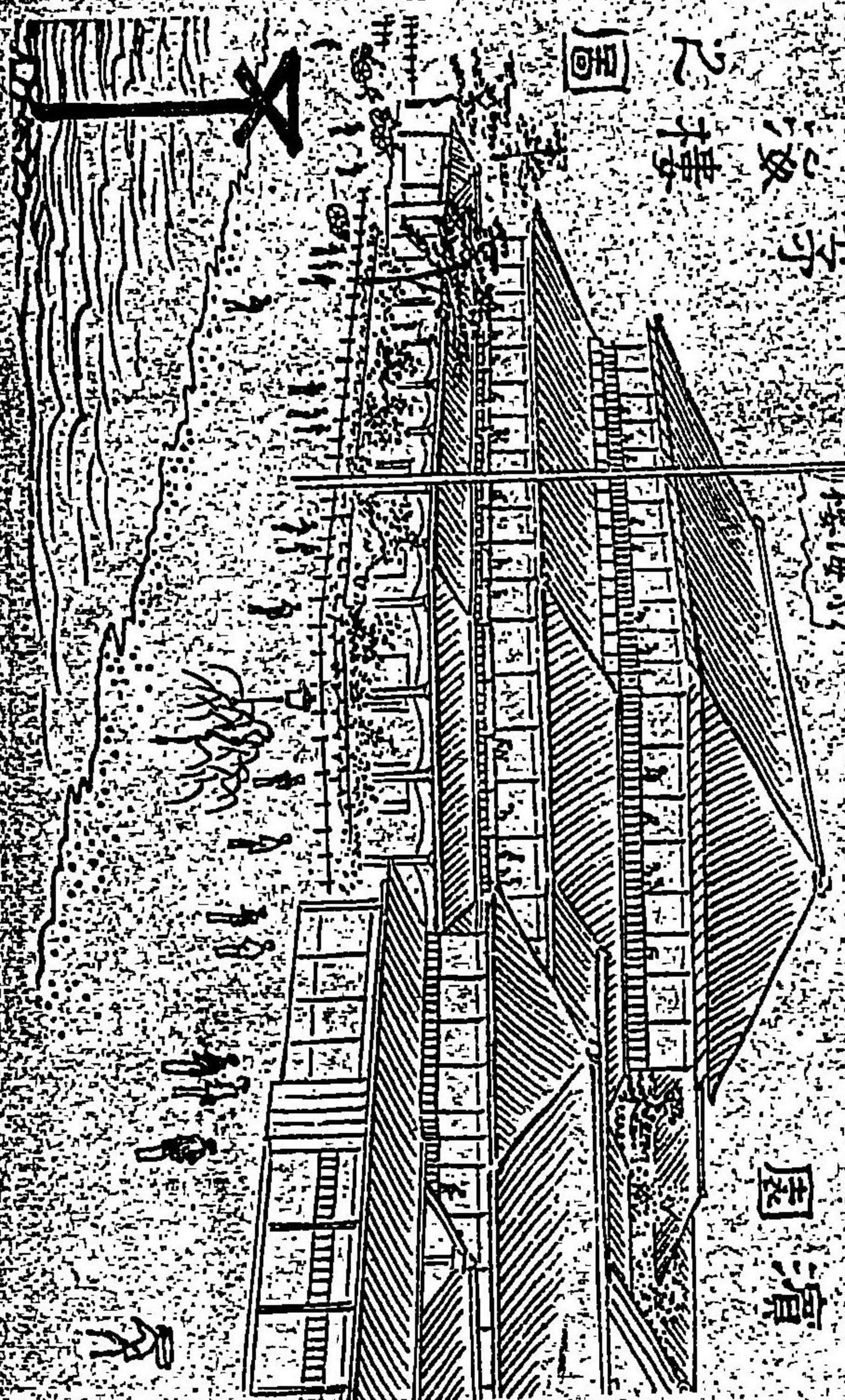
御料旅館

御遊來の程奉待上候

大壇
之
地

煙海

波
之
圖



行發日五回一月每

史學界

定價一部拾六錢
五部五十二錢
十部五十二錢
● 拾壹圓

東京帝國大學
史學會編纂

史學雜誌

定價一部金拾錢
六部金五拾五錢
十二部一圓拾錢

社會學研究會編纂

社會

定價一部金拾錢
六部前金五拾五錢
拾三部前金一圓拾錢

弊社發行
の各雜誌
は總て
金に非
ば發送せ
ず郵券代
用は必ず
一割増

東京市神田區裏神保町
富山房雜誌部
會社資

(六三〇一 局本 號番話電)

(下卷中決十二)

窟の前の江の中にある。

獨螯蟹

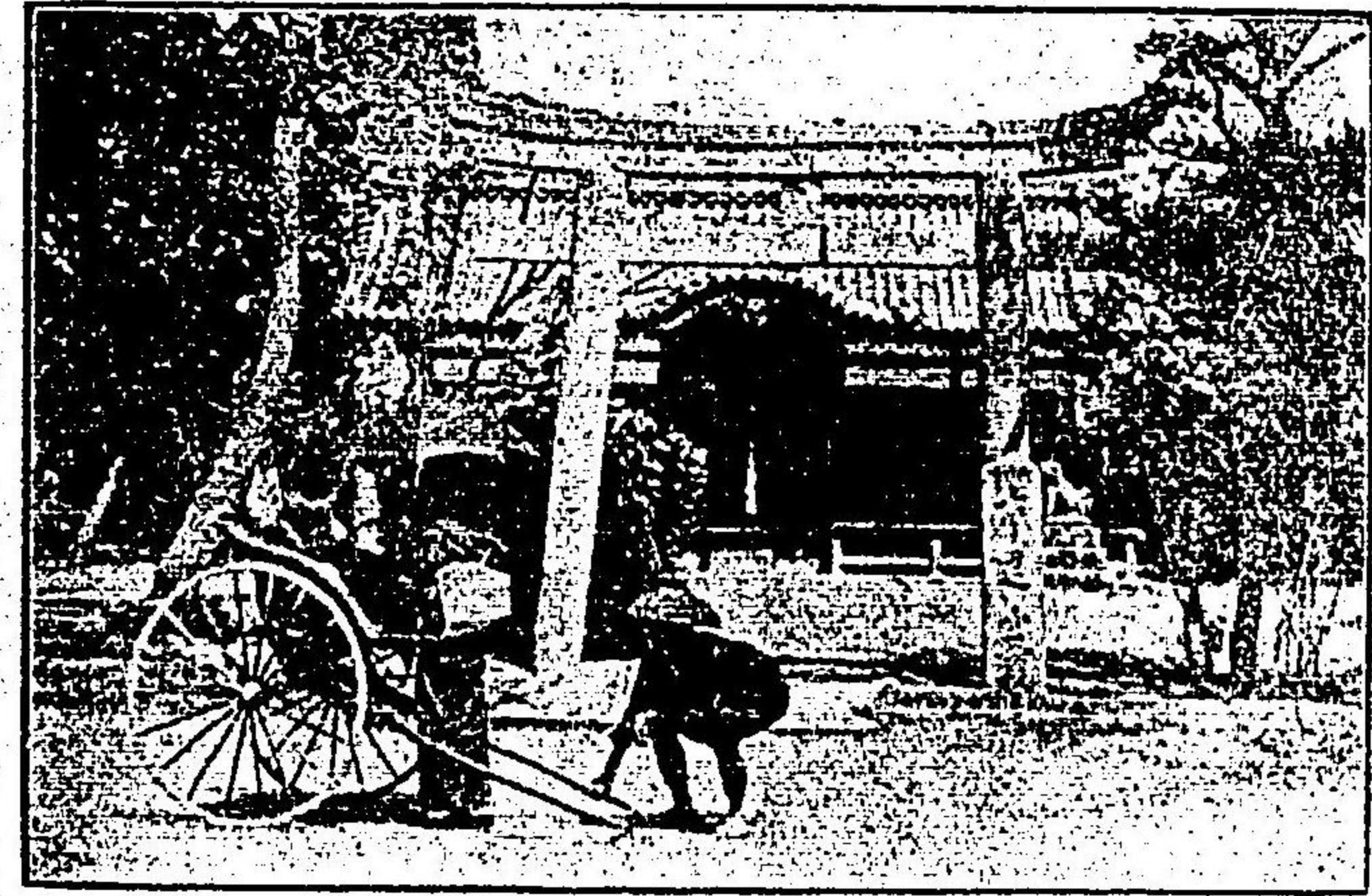
この濱邊にある小蟹をいふ、色白く片瓜至つて大きく、人の足音すれば穴に入る。

玉津島神社

は同所の北にある、祭神は神功皇后に神明光浦の靈を配して祀る、拜殿
（今は無し、目今再建の計畫中なり、昔は紀蔭皇祖南龍公より寄附の三十
六歌仙の額を此に掲げありしが、二代宗直公之を愛惜し、保存の事を神
職に命ぜられたので、今尙社務所に珍蔵してある、圖は狩野與甫、歌は
堂上方の寄合書、書畫共に優美、神樂舎神輿は明和中近衛關白殿下の寄
附、寶庫（禁裏御所）御代々御法樂の御詠歌御奉納、石磐双基（正徳四年靈元
上皇御奉納）同（承應四年）御寄附、當社の寫眞は鳥居前より探影しま
した、此玉津嶋を詠める古人の歌、赤人、人磨始め數百首の多きに及び、
實に枚舉に遑あられぬは、今は総て探らす、僅に雲來翁の詩と千廣翁の歌

和歌の浦や渚にあさる蘆鶴も雲井にあそぶこゝちこそせめ
 社の祭神鎮座の本線舊記の傳への是と徴すべきものなく、
 類廢祭式の斷滅年久かりしを、紀藩の鼻祖南龍公之を嘆き、
 を造營し、拜殿及び神庫をさへ建立され、更に祭典の儀式を興
 が爲め、聖護院宮二品親王に依て、其旨に命じて祭禮の式を撰
 ば、皇史に載する所の、玉津嶋の神の故事數條を拔出して下し賜
 其以來例歳三月九月の二の卯日勅使を降され、祭典を執り行
 にしより、春秋二季の祭禮此時より始まる今に於て、陰曆三月
 の卯の日、盛んなる祭典を執行れます、上皇古今集御傳受のこ
 たまふ御樂の爲、御製の和歌三首、及び公卿の詠歌四十七首、
 十首の和歌御奉納あらせたまふ其後、元天皇、光格天皇、仁孝
 製奉納の事あり、神威も共に四方に輝くことになり、是は南龍公
 の色を増し、神威も共に四方に輝くことになり、是は南龍公

和歌浦玉津島神社
 和歌山小口停車場一廿七丁



Tamatsushima jinia (Shinto Shrine), Wakanoura.
 About four miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

事みてる日なりければ朝まだきより廣前に
 仕奉りけるに物の音ども

高冠想見映清波粉壁朱欄當面
 多一自翠華停此地玉祠千歲祭
 仙娥
 玉津島
 みが、なん我君が代の光りよ
 りいつる言葉の玉つしまやま
 天保十三年十二月玉津社
 に掛巻も長き大御製を納
 奉らせ賜ふことありさる
 は古今集傳らせたまふ故
 なりとす是によりて七日
 間神事あり廿三日には其

のみを左に

の功德のいたすところ、神人合体とは此事でせう
浦霞 寛文四年六月初日 玉津島奉納
おもふろに霞も晴て玉津しま光にわたる和歌の浦人
後西院上皇御製

明和元年六月初日同上

海邊霞 玉津島入江のかすみうちなびき春待にたる和歌の浦人
靈元上皇御製

曙花 玉津島かすむ入江の春はいさいひしらぬ花の明ばのゝいろ
同

寛政九年十一月廿二日同上

海邊霞 たちかへり昔にかすむたまつしま入江の波の春のあけぼの
仁孝天皇御製

天保十三年十二月十七日同上

浦霞 和歌の浦や春とつのかむあしの葉のみどりそへても立かすみかな
光格天皇御製

縁松 たまつしま入江の松のわかみどりめぐみくらぬ年をかさねて

千鳥 住の江の松風さそふとも千鳥和歌の浦はの波になくこそ
同

諸此お社の神を衣通姫といふは、元より正史に據る無く、全く無稽の説
であつて、神功皇后を齋ひ奉れるが正しい説です、古より住吉と同じく、
十三日を神祭の日とし、卯の日を以て衆人の参拜するもの、是一つの證
です、又此處を玉津島とすんで讀むはあやまり、玉津島とにどつて讀む
が正しいです、元は玉出る島を略したのですから。

奠供山

は玉津島神社のうしろ手の山、一名を躰山、又土人はどの山ともいふ、
是が聖武稱徳兩帝の行宮をおかれし、望海樓の古跡であるとの傳へ、一
時荒廢に屬してゐたのを、天保壬辰秋九月、重ねて道を修し、山上に曲
欄を設け、春秋の二季こゝに祭典を擧ぐる事になりました、紀藩の儒員
仁井田好古が、藩主の命に依りて撰んだ、奠供山の記を刻した碑が、山の
登口に立てゐる、夫に詳しい事が書いてあるが、ツマリ——續日本紀に、

聖武帝神龜元年十月幸紀伊國至海部郡玉津嶋頓宮留十有餘日。云々。詔曰登山望海此間尤好不勞遠行足以遊覽故改弱濱名爲明光浦宜置守戶勿令荒穢春秋二時差遣宦人奠祭玉津嶋之神明光之靈——とある、其聖旨を遵奉する意味を記したので、此奠供山に登つて見ますと、四方開豁、實に和歌の浦の全景を見つくすことを得るばかりか、更に他の方面の風光をも弄ぶことが出来て、實にも聖武の帝の勅語につゆ違はず、此間尤も好しく、遠行を勞せずして、以て遊覽するに足り、又此浦の名を明光浦と改めに成たのは、眞に恐多い事ではございませぬが、實に感服の至りに耐へません、此帝は篤く佛法を信じ深く美情に富み給へば、風光を愛でたまふも亦格別におはしなして、阿はあきらかの阿、光はか、やくの加をとつて、阿加となし、明朗のころを以て正字を用ひ、故に美名を賜つたものと恐察し奉りますが、如何さま、海内に風景の地も澤山ござりますすけれど、此浦の景色ぐらゐ、海山を始め、寺に社に、城に、藪屋に、あらゆるすべての景色好く調ひ、而も四方開豁、明らかに、朗らかに、光り輝いてゐる所は恐らく他にございませぬ、後年當國の詩人祇南は千載不易、此上に一字を贅する事も出来ませぬ、

海が、山秀水明、此浦の景色を贊嘆しましたも、やはり此意に他ありませぬ、案内者も随分饒舌家の方でございませぬが、此山に登つて此浦の全景を見わたした時には、只嗚呼明光浦々々々々より外、一句一語も吐くことが出来ませんでした、此山に登つて一望して後、夫から紀三井寺へ行くて願つて、いよ、此浦の景の美をつくす事が出来、人に依ると、和歌の景は、紀三井寺から見る方が好いといふ人がありませぬが、夫は恐らく此山へ登らなさいで、評でござりませう、眞に和歌の景色の美を盡さうと思へば、此山と紀三井寺と、双方より見くらべなければなりません、此山に登らずに和歌の景を批評しては、夫は片目の評とまうさなければなりません、第一聖武の帝に對しても恐入る事です、祇南海は、東南山水、美、末有若明光、惜哉數千歳、奇語無一章と憾み、伊藤蘭圃は、美景令人屢擲毫と嘆いてありますが、あまり和歌の景が潤過ぎ好過ぎて、筆にも繪にもつくせないので、敢て詩人畫客の罪のみではありませぬ、嗚呼、明光浦々々々、此案内記を書きながら、心は山秀水明の間をかけるい

岩根のすゝき

は本社の前にある

玉津島岩根のすゝきはに出てまねけばかへる和歌の浦波

源 兼昌

妹脊牡蠣

此所の名産、其味ひ甘美

和歌松原

は天満宮のほとりより、玉津島邊までの松林を云ふ、今は東照宮の鳥居前に古松があつて、枝を垂れ葉を重ね、一望幾霜雪を経ぬらんと想はるゝが、はその松原の遺木、土人は之をさがり松とまうします。

妙見山

は玉津島のうらての山、昔は妙見の社があつたのですが、今は石の鳥居のみ残つてゐます、併し陰曆八月廿一日に法會は懈らず。

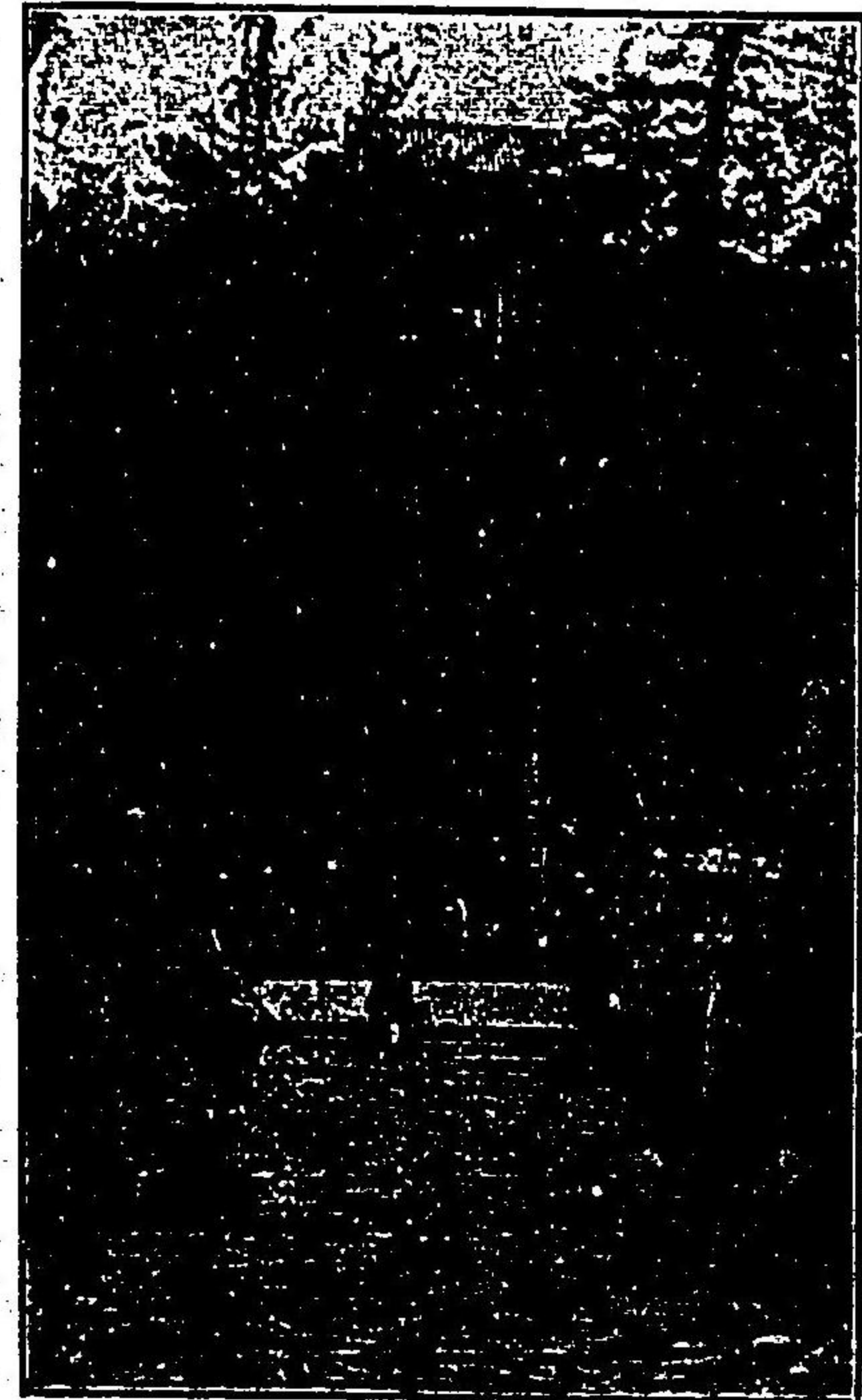
南龍神社

舊の雲蓋院の迹を清めて、明治六年新に社を立てたので、社格は縣社、祭神は紀藩の眞祖、徳川頼宣公、公の事歴は世に明らかですから、今更喋々其の辨は弄しません、東照公の御子の中でも、秀康公に續いての不出世の英傑、士氣を奮興し、風俗を改良し、教育を播布し、産物を増殖し、紀州を改造したと云つても宜しい位の功勞、和歌山縣の今日の繁榮は、一つは此公の力に依るといつても過譽ではありますまいから、縣社と崇め之を尊ぶは、實に當然の事です社前に碑を建つ、舊藩主徳川茂承卿の文にて、長英の書なり。

東照宮

是も同所の西の山上にある、俗に之を和歌の御宮といふ、祭神は源家康公、當社は元和六年庚申の年の造營、比叡山大僧正茲眼大師の開山、以前は神佛混交であつたのですが、維新後佛を廢せしと共に、社殿の趣を異にし、いさゝか、寂寥の感を懷くやうになり、殊に廢藩置縣の後、

和歌山北山口停車場一里七丁ノ宮



Tōshōgū (Shinto Shrine), Wakano-ura. About four miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

東照宮の三字額を掲ぐ、日光宮守澄親王筆、御橋欄干に擬寶珠がある、

社地の御案内、社のみを申すこと、東に六間、西に六間、南に三間、唐門(本官)の前にある、

修覆も十分に届かぬ故、や、荒廢の色とあびました、神官の盡力、縣民の信心共に篤いので、漸く維持の法も立ち、殊に案内者の参拜した時は、大祭の敷日前でありましたので、營繕掃除共に行届き、一層神威を増して拜まれました、東照公の功蹟は今更云ふまでも無きことあらば、

是は下野日光山の山菅の橋を摸したもの、頗る壯麗、石の華表銘に曰く東照掲日、華表劉石、維明維堅、萬世垂跡、那波道圓の撰する所、書は再建の時祇園南海が筆を採る、當社の結構を詩的に形容すれば、龍より山上に至るまで、石榮左右に立併び、朱の玉垣奥深く、林樹の積翠に映じ、一段の幽邃神威の尊さを添へ、天下希有の靈區、寶殿は山上に建られ、櫻花は二荒山より移し栽て、幾春か變らぬ色香を占め、華表に添へる松樹は、和歌松原のむかしを殘して、千秋の翠の色今尚深し、寶物は東照宮御縁記五冊、青蓮院宮高純親王筆、土佐將監光規畫、其他太刀類武器類種々ある、寫眞は石表の内より正面の石段と樓門をかけて探影したのです、祭禮は毎月十七日、陰曆四月十七日は大祭、九月十七日は山の麓にて相撲興行、四月の大祭は天下三大祭の其一つ、左に改めて御案内いたしませう。

和歌祭禮

余等案内者の一行は、五月十七日を卜し、日前國懸の兩宮、龍山神社、

伊太神曾神社、根來寺、紛川寺等の有名の神社佛閣、其他の名所舊迹を
 巡覽するの筈でありましたが、其前に當つて、明日は十八日、陰曆十七
 日、東照宮の大祭、此和歌祭は天下三大祭の一つに數へらるゝ壯觀である
 に、殊に案内者の役目の上から云ふも、拜まざるを得ず、見ずんばある
 可らず、然らば目的の巡覽をば、つとめて明日の午前十時までに終へ、
 すぐ人力車を飛して引返し、午後の一時までに和歌に至り、其望を果せ
 んど意を決し、豫て祭禮拜見の儀を東照宮の神官に申入れ、棧敷の用意
 をしておき、十七日の未明に、腕こきの車夫のみを撰んで、和歌山市を
 出發し、翌十八日の午前十一時ごろまでに、辛うじて巡覽の目的を遂げ
 「おくれたり、急げ」と車夫を勵まして和歌へ走つけしは、午後の
 二時、真に危どい處で、祭禮を拜觀する事を得、多年の望みを遂げまし
 た、先づ和歌村全体の景況を申せば、東照宮の御山の麓より御旅所まで、
 棧敷を一面に懸け併べて、參拜の人四方より群集し、大阪堺等に元より
 四國中國よりも舟車の便に依て見物に來る、誠に錐を立るの地もなく、
 都鄙の老若、遠近の貴賤、袖を聯ねて帷とし、裝を翻して幕とし、所謂
 十人十色の各自の粉粧其雜沓たる有様、筆にも言にもつくせません、棧

敷の体裁は、細九太の柱、青竹を十字に渡し、屋根は薦を被せ、青蘆で
 垣を結び、軒に松枝を釣下げ、一種異様です、一軒六人づつ拾錢より二
 拾錢まで、さて行列の第一に練て來たのは赤母衣の騎馬武者十騎、
 此赤母衣は、和歌山市中の呉服商から近年寄附したもの、唐縮細
 うらつき、騎馬武者の中に、巻煙草をくゆらしてゐたのがあつた、
 モルトケ將軍も思ひ出されてれかしかつた、第二は獅子、頭一人、尾三
 人、第三は牡丹の花車、七八より十二三までの稚子多勢附添ふ、今日を
 曠れと粧束たる、美しくも亦愛らし、又之に離子屋臺が添ふて、十五
 六の美しくしい娘が多勢離子する、第四は柳、路々で參詣の人に折られ、
 柳は名のみ、ほんの幹ばかり、第五は乙女、第六は神劍、第七は長刀振、
 屈強の男大勢、黒の手甲脚半白のシャツを着し、綿の犢鼻褌を穿ち、所
 作と唱えて長刀を振る、或は順に或は逆に、果は頭の上に、之を揮ふこ
 と、縦横自在、其技實に絶妙、多くの中で、絲髪奴の十七八の小僧、殊に
 好く振りました、人に問へば市中の由緒ある人の子、高等科二年生で、
 學校でも優等生である、此長刀振り、母衣廻し、棒振りなどは、一
 年の蓄故を積んで、今日一日の晴に用ゆる事の事、その用意困苦思ふ可

似てゐるから、好事家をして、又その衣着の古雅、且之に用ひし切の結構な
 ること、好事家をして、又その衣着の古雅、且之に用ひし切の結構な
 な太鼓をさし、荷ひにして、二人の稚兒が左右より叩くのです、其叩く撥
 手の姿、一種異様、之に擬したものを警護の役人が澤山持てゐて、所望す
 る人に分けてくれます、災厄を拂ふと云つて、第十一はさくら、擡り、是
 も巧みにすつて面白く、第十二は餅花、餅花をもち、十七八の娘、あしに蟹の
 模様、衣裳をつけ、塗笠をかぶり、餅花をもち、拍子に合して餅搗く真似をする、
 も亦頗る古雅なもので、第十三は餅搗、屋臺の上に臼を置き、妙齡の
 婦女、疋を凝らし、片手に杵を持ち、拍子に合して餅搗く真似をする、
 多勢の警護、一様の赤い投げ頭巾に、一様の衣裳、手に餅搗く真似をする、
 ついで、ある第十四は、面被、又、は、面被、又、は、面被、又、は、面被、
 夫に應ぜし形容して練て来る、面、の、奇、なる、形、の、雅、なる、尤、も、好、事、家、の、
 目を喜ばすもの、以前は百面の名に背かず、其數百あつて、衣裳も之に
 適へる由なるが、今はその半五十面ぐらゐと思はる、夫さへ昔の面は足
 らで、衣裳も新に補へるよし、昔の面は皆作物と思はれて、その相貌と
 り、に活けるが如く、衣裳の切れもすべて結構のもので、ソレ、

しです、第八は母衣、是も屈強の男、大なる母衣の前に青竹に白幣つけ
 たのを負ひ、やはり所作と唱えて、順に、逆に自由自在に躬を廻し、其
 早きこと見る目もくるめく計り、同行の者の中に、尤力自慢の某、其
 母衣をかりて試みに脊負ひしに、立つことさへ能はざりき、其重きこと
 ねして知るべしです、然るに之を負ふて順に逆に水車の如くに廻る、其
 人の力量と熟練、兩つながら驚に耐ゆ、是が警護の人々、黒の腹がけ、
 黒の手甲、脚半、赤の特鼻、警護の人の中に、麻上下つて、黒の腹がけ、
 つた人があつた、ボンチ繪、其儘、誰も笑はぬ者はなし、第九は唐船、龍
 頭、鑼首、上に鳳凰をわく、此周圍に垂れた切れ、以前の結構な織物
 であつた、之を擔ぐ人足の衣裳、腰より上は無地、下は舛形、の模様、古風
 どです、之を擔ぐ人足の衣裳、腰より上は無地、下は舛形、の模様、古風
 な面白、こしらへ、第十は笠、大傘、大傘、大傘、大傘、大傘、大傘、大傘、
 傘の上、鶴が、おいてあつた、さうですが、其、鶴、は、何、時、の、間、に、か、道、山、に、飛、歸、
 つてしまひ、今は傘ばかり残るも哀れ、母衣廻しにも劣らぬ、絶技、實に案
 内者を驚かし、ました、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、子、
 此、田、樂、の、棒、振、り、に、

匠が凝してゐる。○第十五は甲兵、多くの甲冑武者、白の四半に朱にて印をかきしを脊におひ、練てくる。○第十六は相撲、裸体に羽織を着し、廻ししたる相撲が多勢練てくる。昔は紀藩の抱への何山何浦と呼べる。今立派な相撲が揃つて來ることゆゑ、なかく壯觀でありましたらうが、今は近在の漁夫農民の自稱力士が出て來るのゆゑ、勢も揃はず見すばらし。○第十六は神馬浪の模様、仕丁を着、烏帽子を冠り、長録、長刀、袋片を持てる人々多勢附添ふ。○第十七は伶人、いづれも赤傘をさし、せ、數名の樂人、おのゝ手に樂器を持ち、合奏しつゝ練て來る。其樂の巧拙は知らず、装束の古雅なるに目を奪てました。○第十八は神官三人、いづれも黄色の装束で馬に乗る、二人の隨身隨ふ。○第十九は神輿、何分數の多い事でごさいましたから見のこしたのもあるかも知れません。此の外に美しくしい女の子に、縮緬の衣物幾つか襲ねさせ、白ひろうどに金糸で立派な縫ひをさせ廻しをさせ、縮緬の切れで鉢巻させて、練り歩かせるのを數十名見ました。夫に麻上下を着けた男が、赤母衣に兜の前立をつけたのを手に捧げて附き添ふておました。時に依ると冠せる爲と思はれます。一寸變つた風俗のやう見うけられました。——

の囀を耳にし、今年始めて目にしました。聞たより見たは又格別、古雅な中に勇武の氣象が見え、長刀振り、棒振り、面被り、唐船の如きは、二百五十年前、亂より治、武より文、質より奢に移らうとする。徳川初世の風俗を目前に見る心地、實に結構な御神祭、心ある人はいふに及ばず、心なき人たちも、涼車の便を得らるゝからは、是非に一度は拜觀すべきもの。和歌山市の好古家某の曰くは、今の神祭と昔の神祭はくらべものにはならぬ、彼を和歌祭と見られては、却て此土地の辱です。舊藩の時の事を思へば、あまりの相違で、涙がこぼれるゆゑ、我等は廢藩後イナ近年の神祭は見たことがないと、左も口惜しげにまうされまし。たが、我々案内者の目には、今の神祭さへ結構であるに、徳川氏全盛の時、何程の結構でありましたらうか、想ひやるにもあまりありません。例の伊達千廣翁の歌を左に——

和歌祭のねりものをよめる中に雜賀踊
左日鹿野や渚によするさくら渚おともさやかにうちわたりつゝ、
保侶武者あまた併行を
母衣かけしそびら重げに見ゆるかな君が千とせやこめてねふらむ

天滿宮

は東照宮の御宮の西の山に隣る、正殿昔公を祭る、拜殿歌仙の繪馬が掲げてある、圖の筆者は詳らかならざれど、設色用筆共に優麗、書は三藐院殿筆、玉津嶋社の歌仙繪馬に比べて、勝るとも劣らざる名品、此うして風雨に晒しておくは實に惜しいもの、是も別に保存の法を立て貰ひたい、牛の畫樓門を入て左の廳の西側の桁にある、畫の下に、貞享五年四月九日、鹽見小兵衛政誠と書いてある、此小兵衛は京師の人當時の詩繪の名人、牛の畫は尤も得意であつたのです、同じ廳の東の桁にも牛の畫がある、是は上に京の字を題して「戀しくば我も見かへる京の字を、田舎にさすな墨うしの顔、田舎氏書と書いてある、筆者は判らんが是も畫、社傳に依れば、當社は關南天滿宮と稱して日本三聖廟の其一所謂紫の宰府、京都の北野と、當社を合せて云ふ、菅公筑紫左遷の途中、波を此浦に避け、見佐理津流、伊爾之倍馬天母、玖也之幾者、和歌吹浦能、浦之安氣本乃」と詠じられ、其後橋直幹宰府より歸路の折柄、此浦を過て神蹤の昔を追想し、竟に此地に寶殿を營築し、神靈を勧請し奉つ

たのです、此事は詳しく西行上人の撰集抄に載せてある、天正の兵火に社頭總て烏有に歸したが、慶長十一年時の領主淺野幸長ふたゝび之を新にしたり、今の社殿が則ちそれである、其事は慍窩先生の重建和歌浦菅神廟碑銘に詳に書いてある、羅山文集にも此聖廟の事を記して、左の詩がある

菅氏家風儒者宗、靈神今古仰遺蹤、西都北野南濱浦、三處祠堂一色松、

和歌浦

今は西南に出嶋浦がある、古は此洲がなく、一面の干瀉であつたのです、此浦は東西廿餘町、江水洋々、浪松の色濃かに、蘆邊の田鶴、波間の千鳥、見るもの皆面白く、東を望めば名草山金剛寶寺、屋氣樓の如く衰微の間、莊嚴を輝かし、東南を眺むれば、生石が峰に連なりて藤白の御阪翠巒高く聳え、其麓には冷水浦鹽津浦の湊賑しく、出船入船の帆影、軒をつらぬる商家の様あざやかに、鹽屋の煙の風になびくさへ見え、西南を見わたせば、蒼海漫々、姥嶋雜賀崎北に突きいで、又一層の趣を添へ、其他初嶋あら磯にみるめ対る童男、千尋の底にあはび取る海士、汐

て目をあどろかせり。此一句にて全景の美を述べ、むさぼり見て、去ることを忘れて、つとめて又もどの道にかへり云々の語にて、いよく其奇、其妙を發揮して餘蘊なし、假令千萬言を費すとも此上に云ふ所なかるべし、和歌の風景も亦是に類して、一見平淡奇なきが如くなれど、仔細に翫味すれば、いよく奇、いよく妙、

(紹述文集)寶永己丑之歲八月九日周觀府城樓堞崇麗民物富庶南海之一都會也自府城西行一里計而有裏海有小嶋倚巖上有亭子可以觀海榜曰妹背山遂詣玉津嶋祠而觀和歌浦浦廻十餘里西面稍南長岡連阜左右環擁地嶋澳嶋峙于南姥嶋雜崎突乎北一碧萬頃片帆如梭風水相遇銀濤噴雪勢如萬馬蹴浪海南壯觀極於此矣近村有亭生齋酒肴而供客玩而共步退灘地浪花趁人珍貝魚螺螺山之類最多採而懷之遂上晉神祠并東照宮而歸云々

案内者曰く、東涯先生の文も亦簡淨雅潔、僅々二百に足らざる文字を以て、和歌の全景を細叙す、又是好文章、而して文中就も力あるの語は、海南の壯觀極於此矣の一語、其他は蛇足に近し、ツマリ何程能文の士も、此如き美景に對しては、総合的に賞することを得れど、解剖的に賞する事は難し

汲む賤の世わたる業までも、哀れを添へざるはなく、鎌倉の右大臣殿ならぬど、案内者をして、思はずも世の中は常にもかもなの嘆聲を發せしめました、此浦の景色は、前の玉津嶋奠供山の所でも、縷々述ておきませしたが、眞に是扶桑の勝地、とても筆舌の盡し得るところではありませぬから、只奇絶妙絶と叫んでよくとして、貝原益軒と藤愷窩の兩先生が、此浦の景色を見た筆記、イナ、感情を左に引いて、諸君が此浦の景を御覽の時の参考に供へます、一度行て御覽あつて、案内者の言の虚でない事と、恐多い事ですが、聖武の帝の明光浦と名けたまひ、祇南海が山秀水明と贊嘆した、その詔とその詞の眞をお探りに成るが宜しい

(貝原益軒南遊紀行)前畧—是より少し右の方へ行て漁人の町を過ぎ和歌のうらの海つらに出づ沖に地の島沖の島見ゆ和歌の浦は南をうけて入海なり—中畧—此浦の佳景聞しにまさりて目をあどろかせり、われ此景色をむさぼり見て海邊に躊躇し去ることを忘れてときを移せりつとめて又もどの道にかへり玉津嶋にいたる—下畧—

案内者曰く、先生の文、平淡、一見奇なきが如くなれど、能く翫味すれば、細かに和歌浦の美景をつくせり、此浦の佳景聞しにまさり

此やうな名所ですから、彼の人口に膾炙してゐる和歌の浦に汐満くればかたをなみ、あしべをさして田鶴鳴渡るの歌を始め、古人の吟詠が頗る多いが、併し千篇一律、左まで變つた節もありませんから、今人の詩文俳句を掲げて夫に代へます、つひで此和歌の浦のかたをなみの詞を、世に誤解してゐる人がありますから、子供衆の爲に一すかたをなみとは、瀉をなみと云ふこと、汐が満てくるゆゑ、干瀉がなくなり、たりぬし田鶴も蘆邊の方へなき行くさまを詠じたのです。片男波と云つて、寄て返らぬといふのは非です。先づ第一に、友人石橋雲來翁の詩と引とを載せまます、詩は勿論のこと、小引も亦能く明光浦風景を細叙して、其趣をつくし、之を明光浦の記といふも可なりです。次に伊達千廣翁の仲秋明光の浦に遊ぶの記を載せまます、翁は諸君も御存知、イナ、大阪の夕陽岡の處で御案内申した通り、故陸奥宗光君の父君、和歌知文の名手でございませすから、是又明光の浦の月夜の様を寫して遺憾なく、次に當時大阪第一の歌人中村良顯大人の和歌を載せ、次に和歌山市の人柴田素雄の句を載せまます

和歌浦

石橋雲來

萬頃、烟波、離碧山。橋姿、樓影、一灣々。未聞詩句酬佳景、載筆幾人過此間。南海名區有此鄉。嚴洲未必足稱揚。晚潮滿處煙雲絕。仙鶴飛鳴度浩洋。歌浦之地山水秀靈。伽羅山與名草山對峙。伽東羅北爲鏡山及妹背。而妹背山南有橋曰不老。此間極目皆水。萬頃一碧。烟巒霧島。漁莊蟹舍。隱見于其間。有二祠祀衣通姬命及東照公有寺曰大相院。曰圓珠院。曰養珠寺。皆絕俗幽靜。和歌村人煙殆一千戶。粉壁蘸波。朱欄映山。傳云神龜中聖武天皇駐驛處。余就蘆邊亭而休歇。亭在玉津島。祠前芭蕉翁碑畔。遠興紀三井寺對。眺矚絕佳。此地產海苔牡蠣鱒魚。香味皆清絕。

嘉永五とせといふ年の八月十五夜明光の浦に遊ぶ記

伊達千廣

八月の望の夜山川の清き月見むとて。舟をわかの浦にうかぶ。豊旗雲の入日の匂ひやうくにうすれて。月山のはにすみのほれば。眞砂地どほしろくして。鷗たちく蘆原風涼しくそよきて。虫の音とりどりなり。海は天空を吞て雲青波にまかひ。江は山陰をうかへて舟高ねをめぐる。妹背の臺は汀にたちて足一騰の宮を工むかことく。三井の山

寺は夕霧を穿ちて。海若のあらか浮ひ出るに似たり。こはやいにしへの
 の天皇。遠く行賜はすして遠くをしり給ひ。よしとよく見足はし賜ひ
 て。明き世に輝名をなむ賜はりし浦には有ける。こゝに思ふとち秀樽
 の甘酒うまらにのみ。吾人酔にければ。或は古へふりをうたひて。清
 き渚の玉をひろひ。あるは笛をあらして。雙立松の秋かせにすさふ。
 かゝるほどにいふやう。浦は多きを此浦まに。月は多きを望の今宵に。
 かくあひよろこひ相樂しむ事をし。言はなくやは有らんといふ。あ
 れ答けらく。古荒磯の玉藻を憐みて。奥津島おく深きこゝろをのばへ。
 蘆邊の田鶴を見さけて。若のうら／＼若かき言葉をつらねしは。山部
 宿禰あらずや。然してゆこのかた。千々の歌人此浦の光を競ふて。藻
 蘆草かき集めあへめや。然はあれと世降ち時うつりて。心いにしへの
 心になはす。詞上ツ代の言葉に及はす。ぬば玉の黒牛瀉あさき
 みうつりて。紫の名高き調得かたしといへとも。今や眞澄のかゝみさ
 ややく明けき御世にあひて。生る驗ある御民にしあれば。玉津島根の
 恩顧もて。いかてかゝにしへにかへさらん。波はむかしの波ならずと
 も。月は神世の光にこそあらめ。

奥津波昔を掛けて浦の名の赤きこゝろを月にみかゝむ
 いかにかそといふを。聞しれりや。聞しらすや。舟棚によりて酔臥ため
 り。三葛の碇絶々にきこへて月はわたつみの奥はるかにありぬ

若

中 村 貞 顯

和歌の浦やたづのをりたつかたもなし蘆邊を霧の海原にして

和歌の浦

菜の花の中に蘆屋のけふりかな
 穴まどひするや時雨のあしの蟹

同 素 雄

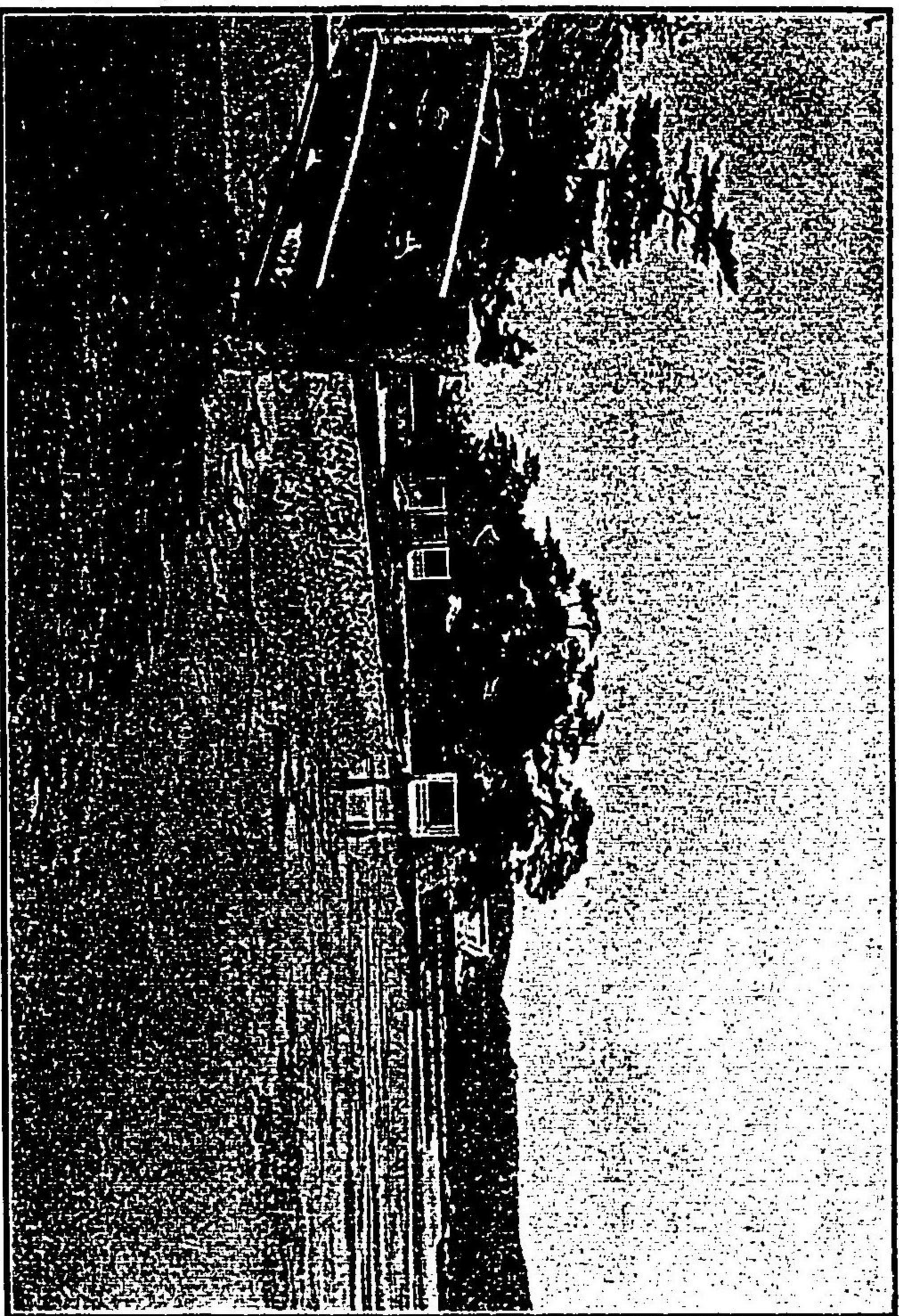
東照宮御旅所

は同所の洲先にある、毎年陰曆四月十七日の大祭に、神輿こゝに渡御あ
 らせたまふところ。

不老橋

は左にかゝる千廣翁の歌に依れば、天保年間紀藩にて、東照宮の御旅
 所つくりかへの時、共にかげられたものと思はる此橋の寫眞は此橋の詰

より妹背を壁で探影しおした



Furukyo, Wakanoura. About four miles from Wakayama-Kiaguuchi Station.

橋老不。所旅御宮照東

和歌浦なる東照宮の御旅所造りかへて不老橋
かけわたしたしける時
伊達千廣

君が世は老せぬ橋をかくるなり若のうら波わかかへりつゝ

浦の初島

和歌浦より眺望のところ、土人は沖の嶋といふ、同郡はぢかみ村の沖に
ある、左に引ける和歌に依て、其風景を知るに足る

續拾 みるまゝに浪路はるかになりけり霞めば遠きうらのはつしま
常盤井入道前太政大臣

紀の海や沖の波間の雲晴て雪にのこれる浦のはつしま

大納言重光

芭蕉翁碑

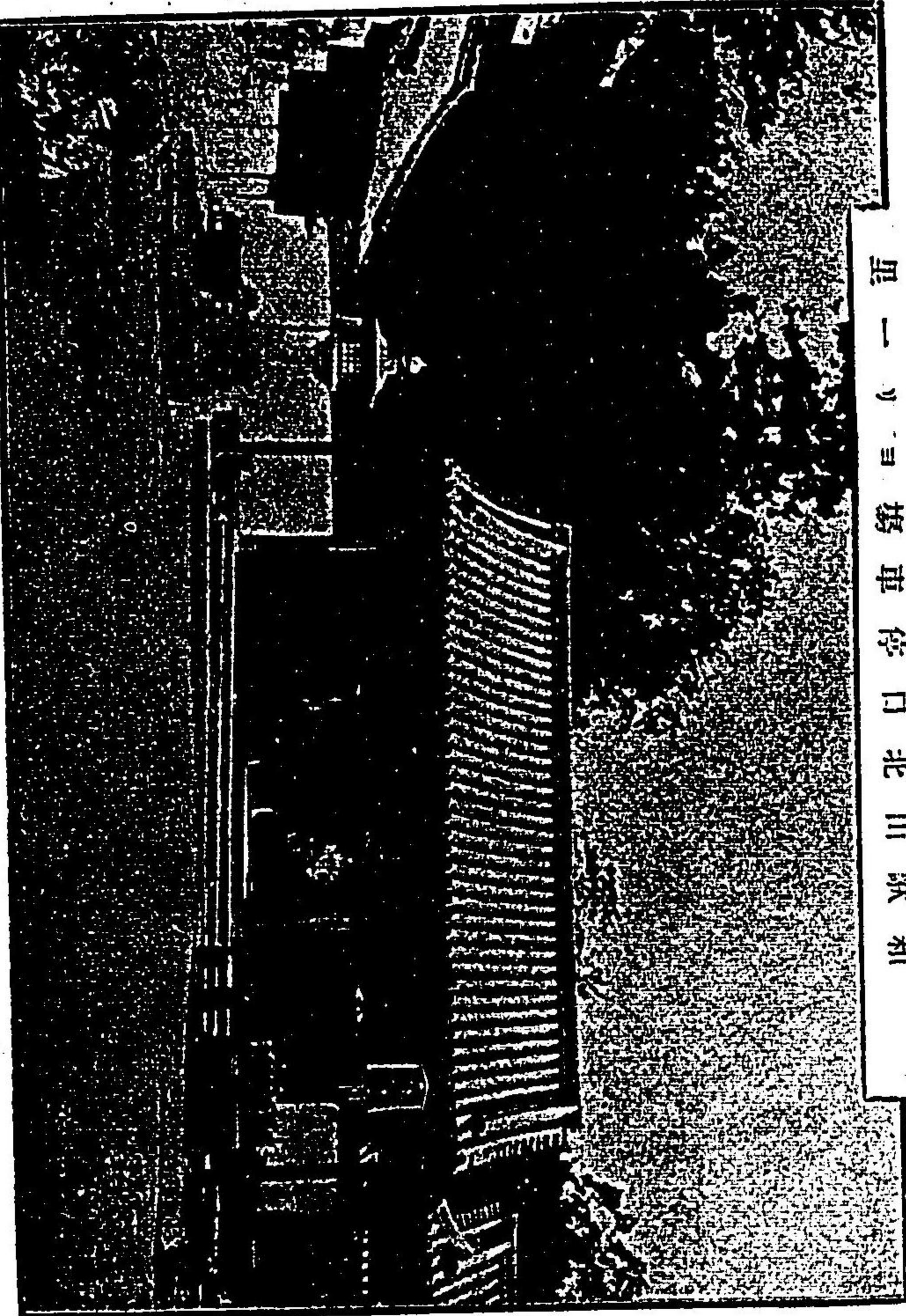
彼の「行春に和歌のうらにて追附たり」の句が石に彫つてある友人石橋
雲來翁詩あり曰く

文章卓爾足千秋 歲月與人俱水流、

短句一篇十七字、蕉翁遺蹟滿皇州、
是より方向を變へて、日前國懸の兩宮、
竈山神社、伊太祁曾神社、根來

内案客旅道畿海南

Hinokumanomiya and Kunikakasanomiya (Shinto shrines), Two miles from Wakayama-Kitaguchi Station.



和歌山縣 宮前二口 北口 停車場 一里

口前二口 國懸宮
粉三寺學を御案内しませう。

の兩社は海草郡宮村大字秋月に鎮座します。和歌山市を距ること三十
 四町、兩社とも社格は官幣大社、延喜式内の神社、日前宮の祭神は、
 天懸大神、相殿は思兼命、石凝姥命、國懸神宮の祭神は、國懸大神、
 相殿は、玉祖命、御女命、明立天御影命、謹んで鎮座の由緒及び沿革
 の大略を左に述べます
 兩宮鎮座の由來を按みまするに、國造家の舊記に因りますれば、日前國
 懸の兩神は、天照大神の前の靈であつて、上古天照大神の天の岩窟に幽
 居まし、時、諸神思兼神の神議に隨ひ、石凝姥命を治工となし、天の香
 山の金を採り、天照大神の御像を圖し造らしめられました。初度に造
 る所の日像鏡は、是則ち日前大神の神靈、日矛は是則ち國懸大神の神靈、
 天津彦火瓊杵尊、豐原中國の主君となり、天降りたまふ時、天照
 大神三種の神寶及種々の神寶を授けたまひ、特に鏡と矛の二種の神寶を
 授けられました。瓊々杵尊其二種の神寶を、神皇產靈尊五世孫天道根命
 に奉戴せしめ、始めて筑紫日向高千穂綱の峰に天降り、別殿を設けて二
 種の神寶を安置し奉り、齋鏡齋矛となされました。神日本盤余彦天皇東
 征の時、二種の神寶を以て、同じく天道根命に託して齋祭らしめられま

した、天皇諸國を經歴したまひ、攝津難波に至りたまふ、天道根命は二種の神寶を奉戴して、紀伊國海部郡加太浦に至り、加太より木本の庄に移り、木本より名草毛見郷に至り、琴浦の岩上に安置し奉り、以て天皇東征の祈禱を致してなれられたが、群虜遂に盡く征討せられた、天皇即位二年春二月乙己、諸將の功を定め賞を行はせ玉ふ時、同じく天道根命を召し、詔りしてのたまはく、朕今已に諸虜を平げ、海内の無事なるを得たるは、汝能く兩大神を敬祭して祈禱を致すに依れり、今汝を以て紀伊國造と定むれば、國名を以て姓氏とし、永く子孫に傳へ、尙能く兩大神に奉仕して、彌々神業を恢弘にし、寶祚を護り奉れ云々とありました、是に於て天道根命、恭しく勅命を蒙り、謹んで其職を奉じておられた、是に於て御間城入彦五十瓊殖天皇の五十一年、豊劔入姫命、天照大神の御靈を奉戴し、本國名草濱宮に遷し奉る時、兩大神を奉浦より同所に移し、宮を併べて鎮座し奉ること三年、同五十四年、天照大神吉備名方濱宮に遷りませど、兩大神は猶濱宮に留り座し、活目入彦五十狹茅天皇十六年、名草濱宮より伊太祁曾神社の舊地、名草萬代宮に遷し鎮座し奉る、是が目今の御宮地である、此る尊き社でありますゆゑ、古來朝

廷の御尊崇も、伊勢大神に亞がせられ、造營の製規、神事の儀式より、奉幣の勅使、奉進の神寶等に至るまで丁重をつくされ、御歴代の中にても、宇多法皇、後鳥羽院は、熊野行幸の御途次、當社へ御奉幣あり、後小松天皇も車駕を向けられ、其他繪旨教書の許多あること、枚舉に遑おらず、當時の社地境内四至九町、神殿は莊嚴を極めし大宮造りでありました、が、天正の厄に罹つて古制の一蕩すると共に、舊式神寶等も廢失するに耐えません、現今の神殿は寛永年間國主徳川頼宣卿の改築されしところ、明治四年に官幣大社に列せられ、同十四年に神宮號の復舊を許され、明らかに此御由緒に依れば、伊勢の大廟に亞ぐの社たること歴然としてみらか、朝廷の尊崇の篤きはまうすまでもなき事ですが、其比較的七回熊野へ三回と歌つて、伊勢熊野へは千里を遠しとせずして、競つて参拜するに、此社へは、七回三回はさて置き、一回の歩を運ぶものも少ないのは、神様に御幸不幸のあるものと見ゆ、社地廣く、樹木較ぶれば十分の一にも足らぬと申す事でござりますが、

もの古り、社殿壯麗に、如何にもかみさびて、伊勢の大廟にツイでの大社、忝けなくも尊くもあがまれたまへば、涼車の便に依りて、せめて一回は参拜あるべし、日本人民の義務として、當社の寫眞は物門の前より社内をかけて採影しました、境内の攝社未社、天道根命社、祭神、天道根命(明治十三年三月官命を以て攝社に定められました)、中言神社、祭神、神は、名草姬命、名草彦命(本國神名帳に、名草郡從四位上名草姬大神、從四位上、名草比古大神とある、國造家譜に、名草彦命は紀國造天道根命第六世、名草姬命は、其姉が或は母であらうと記してある、舊名草郡の地主神ゆゑ、所々に多く祭つてある、明治十年三月、官命を以て攝社に定められました)、未社八十八社(畧します)

祭日は、例祭八月廿六日(當日奉幣使参向、古來齋流馬と鏡馬がある)、戸鎮祭一月十四日夜、準例祭四月一日(古來流齋馬と鏡馬がある)、鎮座祭四月八日、太々神樂五月十一日、堰祭六月中旬(此は舊神領地の用水、宮井川堰口戸開の祭典で、岩出の堰口へ神幸の古式がある)、夏祭六月二十七日、瓜祭七月、平瓮伏祭十一月十八日夜、平瓮起祭十二月十九日夜、寶物は、古器、古文書も數百點ありますが、其内の重なるものを擧れば、

彦五瀬命御弓矢、允恭天皇御奉納鏡、古代御湯器、古代御船代、大化年間古鈴、雄劍備前盛光作、琵琶樂工神田大和椽定祥作、古文書六十五點(略之)

境内の位置は、境内坪數壹万九千四百拾坪八合(當神宮社地は、舊名草郡の中央に位して、大阪街道の南貳拾町餘、和歌山市京橋標杭まで一里餘、附屬の講社は日前講社(明治十六年某月設置事務所は境内にある)、保存會(明治二十四年十月設置、事務所同上)

當社に關する古歌

家集 くもりなきみ世を照らすます鏡うつす光の日のくまのみや 從三位紀俊長

同上 名草山峰もる月の影よりもみかげろ高き日のくまのみや おなじ人

かしこさは伊勢の神垣へだてなくこゝもあまてる日隈のみや 木居宣長

ふみそめし天の道根のみちひろくいやはりにはれ神の宮人 おなじ人

當社に由縁ある名所古跡は三ツ井垣境内にある、後小松天皇參宮の時、御馬寄の舊趾、二階島芝境内の外、一丁許南にある、鳥羽院「一説に後鳥羽院」熊野行幸の時參宮あるべき由にて、行宮を作りたまふ地、濱の宮前に申したれば畧す、徳勒津宮祭神、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇、合祭一當神宮の末社、鎮座地は海草郡四ヶ郷村大字新在家、大阪街道の南に沿ふところ、此地は往古仲哀天皇南國巡狩の時、行宮を造られし舊迹、其境内に天保三年仁井田好古の撰んだ碑文が立てある、名草山三井の神山、又は紀三井寺とも云ふ、古來此山で當社神事の榊を取るの古例、琴の浦是も前に述べたから畧す。

鳴神社

は中郷鳴神村の東にある、祭神二座、速秋津彦神、速秋津姫命、例祭は陰曆九月十二日、今日では村社なれど、其昔當社は延喜式内の神社の中にても、相當祭七十一社の其一に數へられ、本國神名帳にも正一位鳴大神と記され、殊に四社の一として尊敬され、永享大嘗會の節には楯鉾造

進の古例もあり、舊幕時代には、國守より社殿の造營神領の寄附をもせられし、由緒正しき神なれば、社格上進の事を其筋へ申出るの計畫ありと、今の神官武川安光氏は、孝安帝の時始めて當社の神主に定められし、武角河依命の子孫にて、系統正しき家柄のこと、擬社は夢神社、天照太神宮、春日社、住吉社、八幡宮以上境内、宇賀神社本社の前の中、八王子社當村北のかたにある。

竈山神社

嗚呼是を傷みても哀みても猶あまりある、彦五瀬命の御墓及び御社である、命は、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の御長男、御母は王依昆賣命、日向高千穂宮に産ます所、父命崩りたまひし後、御弟の豊御毛沼命と相識つて、大ひに、東征の師を起したまひ、連戦連勝の御勢を以て、浪速の崎に進み、流に遡つて河内の白肩津今の枚方まで至り玉ひし處、大和の登美山の長髓彦之を拒み、孔舍衛坂に遡一戦ふ、命不幸にも流矢の爲に御手を射させ大に、惱ませたまひ、吾は是日の神の御子、日に向ふて戦ひは固より不可、故に賤奴の爲に痛手負ひぬ、今より日を脊に負ふて伐んと